

No.1 消費税を考えたことがなかった、でも子どもができて変わりがけている——政治的距離感の 34 歳 IT 会社員

対象者プロフィール

氏名	三浦 康介
居住地	東京都江東区
年齢	34 歳・男性
職業	IT 企業会社員（エンジニア）
世帯年収	約 650 万
家族構成	妻（育休中）・子 1 人（1 歳）

3 フリーフィング

【Part 1】根拠：「ピンとこない」「食費は妻が全部管理してる」「自分がスーパーで食材を買うのがほとんどない」。レジシステムの話を聞いて「エンジニアとしては「あ、そうですね」とはなる」「もっと政治的な理由かと思っていた」「拍子抜け」。／推論：食費の管理を妻に委任しているため、消費税の変更が家計に与える影響を自分事として感じにくい。エンジニアとしての視点でシステムの説明を「腑に落ちる」として受容した。賛否ではなく「よくわからない」が出发点。／FD：消費税議論の当事者性が、生活における役割分担によって規定されている。食費を管理しない男性は「自分への影響」を想像できず、政策への関心が構造的に薄くなる。

【Part 2】根拠：「消費税 10%、食料品 8%」「社会保障・福祉に使われてる」という基本知識は持つ。情報源は「スマホで流れてくるニュース」と妻との会話。「保育料が高い」「なんか全部高くなってる」という生活実感は妻を通じて間接的に入ってくる。「払ってる税金が自分たちの生活に戻ってきてるのかどうかよくわからない」。／推論：消費税への認知は受動的。生活実感は妻経由で間接的に形成されている。子どもの誕生が「税の使われ方」への関心の入口になりつつあるが、まだ「漠然と」の段階。／FD：情報取得も生活実感も妻経由という構造が明確。本人の消費税への態度はほぼ未形成。ただし子の誕生により保育・教育への感度が上昇中で、そこが税への関心の回路になり得る。

【Part 3】根拠：「就任前から特に強い印象がない」「誰がなっても自分の生活がすぐ変わる感じがしない」「遠い世界の話という感じがずっとしている」。消費税について「あ、そうなんだ」くらいで批判も支持もない。高市総理へのメッセージは「子育てしやすい社会にしてください」。「消費税が 1%下がるより保育の整備の方が自分たちの生活には直接つながる」。／推論：政治家全般への構造的な距離感が高市評価にも直結。批判でも支持でもなく「関心の外」に置かれている。一方で「子育てしやすい社会」という言葉が自然に出たのは、子どもの誕生が唯一の政治接点として機能しているため。／FD：高市総理が誰であれ、消費税が何%であれ、この人の関心を動かさない。動かすのは「自分の子の生活」という具体的な生活事実のみ。保育・教育への不満は届く回路がある。

【全体総括】根拠：「自分がいかに消費税のことを考えてなかったかがわかった」「食費は妻任せで、ニュースもちゃんと見てなくて」「でも子どもが生まれてから他人事じゃなくなってきた」「保育の整備の方が自分たちの生活には直接つながる」。／推論：三浦さんの生活における役割分担が消費税への関心を構造的に遮断してきた。しかし子の誕生という生活の変化が、税の使われ方への関心の入口を生み出しつつある。この関心はまだ「漠然と」の段階で、消費税議論には直接接続していない。／FD：生活役割分担が政治関心を規定するという典型事例。「納税者だが消費税の影響を日常で受けない役割」を担う男性の構造的無関心を示す。子の誕生が変化の契機になりうるが、まだ入口段階。消費税 1%の議論は届いていないが、保育・教育の文脈では届く可能性がある。

発言録

【導入】

M：三浦さん、今日はよろしくお願いします。正解のない話ですので、思ったことをそのままお話しください。

三浦康介：「あ、よろしくお願いします。なんかこういう場は慣れてないですけど、よろしくお願いします（笑）。」

M：お子さんが1歳とのことで、最近の生活はいかがですか？

三浦康介：「もう毎日てんやわんやで（笑）。妻が育休中なんですけど、自分も仕事終わって帰ったらすぐ風呂入れたりオムツ替えたりで。夜泣きがきついですね。朝、目が開かないみたいな。まあでも、かわいいんで。」

M：育児と仕事のバランス、どうやって保っていますか？

三浦康介：「どうやってるんですかね（笑）。在宅勤務が週何日かあるので、それで何とかなってる感じで。家の中のこと、食費とかは妻が全部やってくれてます。自分は帰ってきたら育児手伝う係みたいな感じで。」

【Part 1】食料品消費税の議論への賛否と理由

M：食料品消費税の議論をご存知でしたか？知っていることがあれば教えてください。

三浦康介：「消費税の.....食料品の？うーん、なんかニュースで流れてたような気がするんですけど。なんか、食べ物の税金が安くなるとかそういう話でしたっけ。妻がそんな話をしてたような.....でも自分はあまりちゃんと聞いてなかったです。」

M：食料品消費税を1%にするという案が出ていますが、どう思いますか？

三浦康介：「1%.....。うーん、正直ピンとこないですね。食費って妻が全部管理してるんで、自分がスーパーで食材を買うってことがほとんどなくて。下がるのはいいことだと思いますけど、それが自分の生活でどう変わるのかっていうのがよくわかりません。」

M：ピンとこない」とおっしゃいましたが、それはどういうことですか？もう少し具体的に教えてください。

三浦康介：「えっと.....自分がスーパーに行くのって、土日に妻に頼まれたときくらいで。そのときも何がいくらとかあんまり気にしてなくて、買ってきたものを渡すだけって感じで。レシートを見ても消費税がいくらって確認したことがほとんどないんですよね。だから「1%になったら生活がこう変わる」っていうのが全然イメージできなくて。」

M：なぜ1%という議論が出ているか、ご存知ですか？

三浦康介：「それは.....知らないです。なんでですか？」

M：実は、スーパーなどのレジシステムを税率ゼロに対応させるための改修に約1年かかるためです。0%だと1年、1%なら半年で実現できるそうです。それを聞いてどう思いますか？

三浦康介：「あー、システムの問題か。.....なるほど。いや、確かに0%ってシステム的には特殊で、普通は「非課税」とか「免税」みたいな別の扱いになったりするんで、既存のシステムへの影響って結構大きいんだと思います。仕様変更って地味に大変なんですよ。エンジニアとして言うと「あー、そうですね」ってなる理由ではある。でも.....もっと政治的な理由かと思ってました。」

M：もっと政治的な理由かと思っていた」というのは、どういうことですか？

三浦康介：「なんか、財源がどうか、選挙のためにとか、そういう大きい話が先にあるのかなと思ってたんで。システムが対応できないから1%って言われると、なんか現実的すぎて.....拍子抜けというか（笑）。悪いとは言っていないですけど、政治の話なのにすごく地に足のついた理由だなって。」

M：拍子抜け」というのはどんな気持ちですか？もう少し聞かせてください。

三浦康介：「うーん、なんか、消費税って政治家が大きい話をしてる感じがしてたので。でも実際は「レジが対応できません」っていう理由って、なんか普通の会社でも「このシステムの改修は時間かかります」みたいな話で。政治の話なのにすごく普通の問題で。なんか意外でした。それが理由ならまあ仕方ないのかなって感じはしますけど。」

【Part 2】消費税についての認知・考え

M：消費税についてはどのような知識や情報をお持ちですか。また、どのように考えていますか？

三浦康介：「消費税は10%で、食料品は8%って知ってます。社会保障とか福祉に使われてるって聞いてます。ただ、それ以上は正直よくわからなくて。仕事でもプライベートでも消費税のことを深く考えたことってあまりなかったです。」

M：その情報はどこから得ていますか？

三浦康介：「スマホで流れてくるニュースですかね。意識して見るというより、通勤中にスクロールしてたら目に入ってくる感じで。あとは妻との会話で聞くこともあります。妻の方がそういうのをよく見てるんで。」

M：消費税の情報が「流れてくる」という感じとのことですが、それに対して何か感じることや考えることはありますか？

三浦康介：「どうですかね……。消費税って、なんか上がるたびに「また上がるのか」みたいな感じで。生活で実感するのは財布から出るお金が増えるっていうだけで。ちゃんと使われてるといいなとは思いますが、実際使われてるかどうか、よくわかってなくて。」

M：ちゃんと使われてるといいな」と思うのは、どういう場面で感じますか？

三浦康介：「子どもが生まれてから、保育園とか将来の教育費が気になり始めて。妻と「保育料って高いよね」とか「保育園入れるかな」みたいな話をするんですけど。なんか、消費税払ってるんだから子育てとか社会保障にちゃんと使ってほしいっていう気持ち、漠然とですけど出てきました。」

M：漠然と」というのはどういうことですか？もう少し聞かせてもらえますか？

三浦康介：「具体的に「何に使え」ということではなくて、なんか、払ってる税金が自分たちの生活に戻ってきてるのかどうか、よくわかんないなという感じで。ニュースで「財源が」みたいな話になると難しすぎてついていけなくなって。結局自分の生活で感じるのは「物が高くなった」くらいで。」

M：物が高くなったというのは、日常のどういう場面で感じますか？

三浦康介：「自分は直接あまり実感なくて.....買い物に行かないので。妻が「なんか全部高くなってる」とよく言ってます。食材もだし、子どもの用品もだし。消費税というより物価全体が上がってる感じがするんですけど、まあ全体的に出て行くお金が増えるな、というのは夫婦の会話で出てきます。」

【Part 3】高市総理への好感度・評価

M：高市総理が就任してから、印象は変わりましたか？

三浦康介：「うーん、印象が変わったかどうか.....。正直、就任前から特に強い印象がなかった。女性の総理になったっていうニュースは見ましたが、それ以上はちゃんと追えてないです。」

M：就任前も後も印象をあまり持っていないということですが、それはなぜですか？

三浦康介：「なんか.....政治家って、誰がなっても自分の生活がすぐ変わるっていう感じがなくて。選挙で投票はするんですけど、誰がなっても.....みたいな感覚がどこかにあって。高市さんになってから何か変わったかと言われると、自分にはよくわからない。妻の方がそういう話を追ってるかもしれないです。」

M：誰がなっても変わらない」という感覚は、どこから来ているんでしょう？

三浦康介：「なんですかね。なんか、ずっとそういう感じがしてて。景気がどうか、税金がどうか、政治家がどう言っても、自分の給料が大きく変わるわけでもないし、生活が劇的に変わったって感じたことがなくて。なんか遠い世界の話という感じがずっとしてます。」

M：消費税の問題での高市総理の姿勢、どう見えますか？

三浦康介：「えっと、さっき聞いた話で言うと、ゼロって言ってたのが1%になりそうということですね。うーん、正直「あ、そうなんだ」っていうくらいで。なんか批判する気もないし、すごく支持する気もなくして。よくわかっていないまま聞いている感じです。」

M：よくわかっていないまま」というのはどういう状態ですか？具体的に教えてください。

三浦康介：「消費税の話になると、財源がどうか社会保障がどうか難しい話が続いて、どこかでついていけなくなるんですよ。だから「下がるんならまあいいか」くらいの結論に自分の中で落ち着いてしまって。高市さんがどういう考えでその決断をしたかというのは、自分にはわからない。」

M：今の高市総理に一言メッセージを送るとしたら、何と言いますか？

三浦康介：「えー……（笑）。うーん、「子育てしやすい社会にしてください」ですかね。消費税のこともそうなんですけど、子どもが生まれてから保育料とか教育費とかが気になっていて。払ってる税金が、将来の子どもの環境に返ってくるといいなって。」

M：なぜそう言いたいのですか？理由を教えてください。

三浦康介：「自分も妻も、子育てしながら働き続けるのってこんなに大変なのかって最近思ってた。妻が育休明けに保育園に入れるかどうかとか、入れても保育料がいくらかかるのかとか、具体的な心配が出てきて。消費税が1%下がるよりも、保育の整備の方が自分たちの生活には直接つながる気がして。」

【締め】

M：今日の話を通じて、一言でまとめると何でしょう？

三浦康介：「なんか、自分がいかに消費税のことを考えてなかったかというのが、話しながらわかりました（笑）。食費は妻任せで、ニュースもちゃんと見てなくて。でも子どもが生まれてから、税金がどう使われるかというのはなんか他人事じゃなくなってきたなとは感じました。」

M：言い忘れたことや、改めて思ったことがあれば。

三浦康介：「今日話して思ったのは、エンジニアとしては「システムが対応できないから1%」っていう理由は腑に落ちるんですよ。でも、それで納得してしまっているのか、政策の話として、っていうのは……まあよくわかんないですけど、改めてちょっと考えてみようかなって。」

No.2 説明してくれれば納得できる——消費税を知らなかった主権者教育の教員

対象者プロフィール

氏名	中野 達也
居住地	杉並区
年齢	37 歳・男性
職業	公立中学校教員
世帯年収	約 780 万（共働き）
家族構成	妻（会社員）・子 2 人（8 歳・5 歳）

3 ブリーフィング

【Part 1】根拠：食料品の税率が 8%であることを「あやふやだった」と認め、1%案に対して「財源が心配」「教育予算が削られるのでは」と教員の職業経験から反応した。0%公約については「言ってた気はするが追っていなかった」。理由説明（システム問題）を聞いて「なるほど」としながら「最初から説明すればよかった」と述べた。／推論：賛否の判断軸は「説明されたかどうか」にある。財源への不安は感情的なものではなく、教員として税の使途を現場で見てきた職業的経験に基づく。／FD：情報が届けば判断が変わる層。現時点では情報断絶が不信感の根源であり、説明責任が評価の鍵。

【Part 2】根拠：「社会保障のためと言われても何が良くなったか実感がない」「慣れてしまう」と繰り返した。情報源は「なんとなくの積み重ね」「職場の同僚との会話」。主権者教育を教えながら自分が政治への諦め感を持っていることへの「複雑な気持ち」を自覚的に語った。／推論：消費税への不信感は根拠ある批判ではなく、社会化された諦めである。ただしその諦めを自己矛盾として認識しており、完全に固定化されていない。今日の対話が「知ろうとしていなかったただけかも」という気づきを生んだ。／FD：問いかけられれば動く可能性を持つ層。無関心は固定化されていない。

【Part 3】根拠：就任前から「保守的な人」というイメージがあり、就任後は「様子見」。消費税に関しては「選挙向けと思っていたが、理由を聞いて見方が変わった」と軟化した。メッセージは「説明してください」で、その理由を教員として「理由を伝えることを大事にしている」と職業経験に紐付けた。締めでは妻とこういう話をしたことがないと述べた。／推論：評価の変動は政策の中身より「説明されたかどうか」にかかっている。職業（教員）が唯一の政治参照点になっており、説明責任という文脈でのみ政治が自分事になる。／FD：高市総理への評価は中立～やや軟化。「届く説明」があれば支持に傾く可能性がある。

【全体総括】根拠：「知らなかった」を何度も繰り返しながら、財源計算・教育予算・主権者教育との矛盾を自覚的に語った。最後に「帰ったら妻に話す」「知ろうとする入口が身近にない」と述べた。／推論：この人物の核心は「諦めと関心の間で揺れる、自覚的な無関心者」である。職業上の論理（説明責任・理由の提示）が政治評価の唯一の窓口になっている。情報の届き方次第

第で態度が変わりやすい。／FD：今日の対話自体が一つの介入になった可能性がある。「知らなかった」から「少し関心を持とう」への変化が見られた。

発言録

【導入】

M：中野さん、今日はお時間いただきありがとうございます。特に正解・不正解はありませんので、日頃感じていること、思っていることをそのままお話しいただければ大丈夫です。最近の生活で気になっていることや、関心があることは何かありますか？

中野達也：「ありがとうございます。最近は新学期で学校がバタバタしていて。新しいクラスの子どもたちとの関係づくりとか、保護者対応とか。家では妻が子どもの習い事の送り迎えで大変そうにしている、自分も帰りが遅くなると申し訳ないなと思いつつ。世の中的なことで言うと.....物価が上がってるなというのは感じますね。スーパーに行くと、前より明らかに高くなっている気がします。」

【Part 1】食料品消費税の議論への賛否と理由

M：食料品の消費税についての議論を聞いたことはありますか？知っていることを教えてください。

中野達也：「なんとなく.....ゼロにするとか、下げるとか、そんな話をどこかで聞いた気はするんですが、詳しくは知らないです。ニュースをしっかりと追えてないの。」

M：そうなんですね。そもそも今、食料品の消費税は何パーセントかご存知ですか？

中野達也：「えっと.....8%でしたっけ？なんか軽減税率っていうのがあって、食べ物は低くなっていると聞いた気がします。ただ、レシートをそこまで細かく見たことはなくて、正直あやふやです。」

M：そうですね、食料品は軽減税率で 8%になっています。日頃、その 8%についてどう感じていますか？

中野達也：「8%でも高いとは思いますが。月の食費を考えると、それなりの額になる。共働きで余裕がないわけじゃないですが、子どもが 2 人いると食費はけっこうかかるので、意識しないとは言えないですね。ただ正直、消費税込みの値段で見ているから、「8%取られてる」という感覚より「値段が高い」という感覚の方が先に来ます。」

M：値段が高い」という実感は、最近特に強くなっていますか？

中野達也：「そうですね、物価が上がってからは。スーパーで同じものを買っても、前より高くなってる。消費税のせいなのか、食材の値段が上がったのか、正直区別がついていないんですが、「高くなったな」という感覚はあります。うちの学校の給食費が無償化されたので、「税金が

こういう使われ方をするのはいいな」と思って。それに比べると、消費税でどこにお金が行って
るのかはよくわからないですね。」

M：食料品の消費税を 1%にするという案が出ていますが、どう思いますか？

中野達也：「1%に……。それはありがたいとは思いますが。でも 8%から 1%って 7%下がるわけで、その分税収が減りますよね。「その穴はどこかで埋めるんじゃないか」という気持ちが同時に
出てきます。月の食費が 4 万円として、8%だと 3,200 円、1%だと 400 円。差額 2,800 円は助か
りますけど……。財源がどうなるのかが気になる。教員なので、教育予算が削られることへの不安
がどうしても先に来てしまっ。」

M：教育予算が削られるかもしれないという不安は、現場での実感から来ていますか？

中野達也：「あります。教材費とか備品とか、予算が少ないとひしひし感じる場面がある。先生
が自腹を切ることもある。だから消費税を下げること自体には賛成なんですけど、財源の手当てが
ちゃんとされているのかどうか、それが見えないと不安です。」

M：なぜ 1%という数字が出ているか、ご存知ですか？

中野達也：「全然知らないです。何か理由があるんですか？」

中野達也：「0 にするという公約があったのですが覚えていますか？」

中野達也：「あ……。そうでしたっけ。言ってた気はするんですが、選挙公約って正直あまりちゃ
んと追ってなくて。「なんか言ってたな」くらいの認識です。ゼロにするって言ってたんですね
。それが 1%になってるということは……。やっぱり公約って変わるものだなという感じはします。
最初からゼロは難しいと思っていたので、驚きはないですが。」

中野達也：「なぜですか？」

中野達也：「なぜ驚きがないか、ですか……。なんか、政治家の公約って、選挙の時に言うもの
っていうイメージが昔からあって。実現するとは思ってない、というか。親も「どうせ変わらん
」って言ってましたし、自分でも就職してから「言ったことが全部実現するわけじゃないんだな
」という場面を何度か見てきた。だから「ゼロって言ってたのに 1%になった」というのも、「
やっぱりそうなるよな」という感じで……。怒りというより、諦めに近い気持ちです。」

中野達也：「では、1%になったとしたら中野さんは評価しますか？」

中野達也：「評価……。するかどうか。うーん。ゼロって言ってたのに 1%になった、というのは、
約束を変えたわけですね。その点では「約束を守らなかった」とは思う。ただ……。全くゼロに
ならないよりは 1%でもやってくれた方がいい、という気持ちもあって。完全な評価も、完全な
ダメ出しも、どちらもできない感じです。理由をちゃんと説明してくれれば、「それなら仕方な
い」と思えるかもしれない。でも説明がないまま「1%になりました」だと、なんか置いてきぼ
りにされた感じがします。」

中野達也：「0 にできない理由について知りたいですか？」

中野達也：「知りたいです。正直、なんで 1%なのかって今まで考えたこともなかったんですがゼロにできないのに理由があるんですね。なんでですか？」

中野達也：「スーパーなどのレジ環境、システムの問題です。0 なら 1 年の準備期間が必要で、1%なら半年で準備できるそうです。この情報を聞いてどのように感じていますか？やはり 1%でもいい？」

中野達也：「そういう理由があったんですね.....。レジのシステムの問題か。それは知らなかったです。聞いてみると、なるほどなとは思いますが。現場の話として、システムを変えるのに時間がかかるっていうのは、リアルにわかる話なので。ただ.....それならなぜ最初からそう説明しなかったのかな、とも思います。「システムの都合で 1%にします」って最初から言えばよかったんじゃないかと。その説明があれば、もっと納得できた気がする。1%でいいかどうかは.....うーん。理由がわかった上では、「まあ仕方ないか」という気持ちにはなります。ゼロを目指した上での 1%なら、完全に約束破りとは言えないかもしれない。ただ、やっぱり「最初からちゃんと説明してほしかった」という気持ちは残ります。」

中野達也：「半年早いなら、1%になる方がいいということですか？」

中野達也：「.....そう聞かれると、うーん。半年早く実現できるなら、それはそれで意味があるとは思いますが。待っている間も食費はかかるわけだから、早い方が生活者にはありがたい。でも、「半年早いから 1%の方がいい」と言い切れるかという.....そこはちょっと引っかかります。結局、0%と 1%じゃ、長い目で見ると差が出てくるじゃないですか。月 2,800 円の差が、1 年続いたら 33,600 円。それをシステムの準備期間で埋め合わせと考えるのかどうか。なんか.....「半年早いから」という理由で 1%を選ぶのは、政治家側の都合に乗っかっている気がして、素直に「はい、そうですね」と言えない自分がいます。もう少し説明と議論があってもよかったんじゃないかな、とは思いますが。」

中野達也：「まだ決まったわけではないです。今も検討中のようです。」

中野達也：「あ、まだ決まってないんですね。それは知らなかった。じゃあ今、議論の最中ということか.....。だとすると、ちゃんと決める前に、もっと国民に説明してほしいですね。こういう理由で 0%が難しく、1%なら半年で実現できる、でも財源はこうなります、って。決まってから「こうなりました」じゃなくて、決める過程を見せてほしい。私みたいに普段ニュースをあまり追えていない人間でも、「こういう理由で議論している」というのが届く形で伝えてほしい。今日こうして聞いて初めて知ったことが多かったんで.....もし知っていたら、もう少し関心を持って見ていたかもしれないです。」

【Part 2】消費税についての認知・考え（自由発話）

M：消費税について、日頃どのような知識や情報をお持ちですか？また、どのようにお考えですか？自由にお話してください。

中野達也：「消費税.....。子どもの頃は 3%だったと思います。その後 5%、8%、10%と段階的に上がってきた。食料品は 8%で、それ以外は 10%。軽減税率って最初聞いたとき、なんで食料品だけ？って思いましたが、まあ生活必需品だからかなと。ただ、消費税って「社会保障のため

」って言われてきたけど、何が良くなったのか実感したことがほぼない。8%から10%になった時も「社会保障が充実します」って言われたけど、何が変わったのかよくわからなかった。給食費が無償化されたのは実感できたけど、あれは消費税とは別の話ですよ。」

M：社会保障のためといわれても実感がない」という情報はどこから来ていますか？

中野達也：「どこかというより.....なんとなくの積み重ねですかね。ニュースで「消費税は社会保障に使います」と言っていた記憶はある。でも年金が増えたとか、医療費の窓口負担が減ったとか、具体的に良くなったと感じたことがない。職場の同僚と話してても「結局どこに消えてるかわからない」っていう人が多いので、自分だけじゃないんだなという感覚はあります。」

M：実感として、消費税が上がったことで生活が変わったと感じた瞬間はありますか？

中野達也：「10%になった時、妻と「また上がったね」って話しました。スーパーのレシートを見て。でも不思議なもので、だんだん慣れてくる。最初は「高い」と思っても、そのうち「これが普通」になってしまう。今回1%の話を聞いて、下がったら実感できるのかなと思ったんですが.....正直自信がないですね。下がっても、また慣れてしまう気がして。」

M：慣れてしまうというのは？

中野達也：「「どうせ変えられないから」という気持ちが、いつのまにかできあがってる。教員として子どもたちに「社会に参加しよう」「選挙に行こう」と主権者教育をしているのに、自分がそういう感覚を持っていると気づくと、少し複雑な気持ちになります。」

M：その複雑さについて、もう少し教えてもらえますか。

中野達也：「生徒に「社会を変えるのは自分たちだ」と教えていながら、自分自身は「政治って変わらないよな」と思っている。矛盾してますよね。でも.....長年見ていると、そういう感覚になってしまう。公約が変わるのも今日初めて理由を知って、「そういう事情があったのか」と思えた。もしかしたら、知ろうとしていなかっただけで、ちゃんと追えば見えてくるものがあるのかもしれない。今日話してみて、少しそう思いました。」

【Part 3】高市総理への好感度・評価

M：高市総理が就任してから、印象は変わりましたか？

中野達也：「就任したこと自体は知っています。女性初の総理大臣ということで話題になっていたの。印象ですか.....就任前は「保守的な人」というイメージがありました。就任後は.....特別大きく変わったとは言えないかな。まだ様子見という感じです。何か決定的なことをしたという印象がまだなくて。」

M：様子見という感覚はどこから来ていますか？

中野達也：「誰が総理になっても、すぐには何も変わらないという経験があるからだと思います。最初はいろいろ言うけど、実際に動くのはゆっくりだし、変わらないこともある。だから「高市さんがどんな人か」よりも「これから何をするか」を見ていきたいという気持ちです。」

M：消費税の問題での高市総理の姿勢は、どう見えますか？

中野達也：「食料品をゼロにするという公約を出したことは、今日初めてちゃんと認識しました。それが1%になるかもしれないということも。正直、最初は「選挙向けの発言かな」と思っていました、今日話してシステムの事情があると知って、少し見方が変わりました。ただ、その説明が国民にちゃんと届いていないのが問題だと思う。私みたいに知らない人がまだたくさんいると思うので。」

M：今の高市総理に一言メッセージを送るとしたら、何と言いますか？

中野達也：「.....「説明してください」ですかね。何をするかだけでなく、なぜそうするのか、財源はどうなるのか。私が知らないだけで説明しているのかもしれないけど、普段ニュースをあまり追えない人間にも届く形で伝えてほしい。教員として、子どもたちに理由を説明しながら物事を伝えることを大事にしているので、政治にも同じことを求めています。」

M：説明してください」と言いたい理由は、どこにありますか？

中野達也：「理由がわかれば、納得できるかどうか判断できる。今日みたいに、システムの事情があると聞けば「ああ、そういうことか」と思える。でも説明がないと、ただ「変わった」という事実だけが残って、不信感になる。政治への信頼って、説明の積み重ねだと思うので。」

【締め】

M：奥様とこういう話をすることはありますか？

中野達也：「消費税の話.....あまりないですね。妻も仕事と子育てで忙しいので、帰ってきてニュースの話をする余裕がお互いがない。食費が高くなったねという話はしますけど、消費税がどうこうという話にはならないです。今日みたいに「実は8%で、1%になるかもしれないけど、その理由はシステムの問題で」という話は、したことがないですね。帰ったら話してみようかとは思いましたが。」

M：今日の話を通じて、一言でまとめると何でしょう？

中野達也：「「知らないことが多かった」ですかね。消費税を払いながら、ちゃんと考えたことがなかった。今日話してみて、もう少し関心を持とうかなという気持ちになりました。」

M：言い忘れたことや、改めて思ったことがあれば。

中野達也：「主権者教育を子どもに教えている自分が、こんなに知らなかったというのが少し恥ずかしかったです。でも、知ろうとする入口が身近にないというか.....今日みたいに話しかけてもらわないと、自分から動かないなとも思いました。」

No.3 「早く決めてください、それだけです」——レジ改修の現場論に即座に共感した 38 歳居酒屋店主の実用的賛成

対象者プロフィール

氏名	藤本 圭
居住地	東京都新宿区
年齢・性別	38 歳・男性
職業	飲食店自営業（居酒屋 1 店舗）
家族構成	妻・子 1 人（10 歳）
政治関心/知識	中／中

3 分ブリーフィング

【1. 導入+Part 1：食料品消費税の議論への賛否と理由】

根拠：「また手間が増えるのか」と事業者目線が先に出たが、生活者視点を促すと「食費が減れば子どもの習い事代に回せる」と述べた。レジシステムの理由に「うちも軽減税率の時に POS レジをいじって大変でした。半年早く実現できるなら 1%の方が現実的」と即座に応じた。

推論：居酒屋店主として消費税の制度変更を「現場の手間」として日常的に経験しているため、レジ改修の話は体感として理解できる。職業経験がそのまま納得の根拠になっており、論理的な評価ではなく現場感覚としての受け入れが起きている。

FD：藤本にとって 1%案への賛成は「制度の中身への評価」ではなく「現場の事情への共感」から来ている。飲食業の自分がレジ変更で苦労した経験が、政策への即座の納得を生んでいる。

【2. Part 2：消費税についての認知・考え】

根拠：「仕入れの食材が安くなるなら助かる」と事業者目線と生活者目線が交錯しながら語った。「食費の消費税が下がれば仕事でも家でも少し楽になります」と二重の接点を述べた。

推論：飲食業は食材の仕入れと個人の食費が重なる業種であるため、消費税への関心が職業と家計の両面から存在している。ただし家計については妻に管理を任せており、実感の厚みは仕事側の方が大きい。

FD：藤本における消費税は「仕事と家計の両面から意識する問題」だ。ただし職業的な接点の方が生活上の実感より強く、家計への影響は「妻が管理しているので正確にはわからない」という間接的な把握にとどまっている。

【3. Part 3：高市総理への好感度・評価】

根拠：「公約を出してくれたことは評価する。1%案になったことも現実的な判断だと思う」と述べた。「早く決めてください、それだけです」というメッセージを送りたいと語った。

推論：高市評価の軸は「経済政策への期待」と「早期決定への要求」にある。事業者として税率変更は「準備の問題」であるため、内容の善悪より確定の速さへの関心が先に立つ。

FD：藤本の高市評価は「動いてくれることへの実用的な承認」だ。政治的な評価より現場が動けるかどうかという実務的な判断が軸にある。「早く決めてください」というメッセージに、事業者として「準備ができないと困る」という切実な現場感覚が凝縮されている。

【全体総括】

根拠：「大きな話も大事だけど、現場が動けるかどうかが一番大事なので」と締めた。「ゼロか1%かより、早く確定して準備できることの方が重要」という立場を一貫して示した。

推論：藤本を貫く行動原理は「現場の実務で判断する」だ。政策の理念より、自分の居酒屋でどう実装するかという観点で消費税を評価する。レジシステムの話への即座の共感も、職業的な現場感覚からくる反応だ。

FD：藤本圭を特徴づけるのは「居酒屋店主の現場経験が政策評価の唯一の軸になっている生活者」だ。「早く決めてください、それだけです」という言葉は、事業者として早期確定を求める切迫感であると同時に、消費税政策を「制度論ではなく現場の段取り問題」として受け取る姿勢そのものを表している。

発言録

導入 + Part 1：食料品消費税の議論への賛否と理由

M：今日はお時間をいただきありがとうございます。正解のない対話ですので、思ったことをそのままお話しただけで大丈夫です。最近の生活はいかがですか？

藤本圭：まあ.....居酒屋をやっているんですが、食材の仕入れ値がじわじわ上がっていて正直しんどいですね。客単価を上げたいけど客足が減るのが怖くて、なかなか踏み切れない。子どもも10歳になって習い事とかかかってくるし。妻にはずっと苦勞かけてます。

M：食料品消費税の議論をご存知でしたか？

藤本圭：知っています。高市総理が食料品の消費税をゼロにするって話ですよ。飲食の仕事をしているので、業界仲間の間でも話題になっていました。

M：知っていることを教えてください。

藤本圭：「食料品を2年間ゼロにする」という公約があったのは知っています。ただ正直、最初から「本当にできるの？」という気持ちの方が強かったです。居酒屋って、食料品と飲食提供が混在しているので、税率の問題はもう複雑で。

M：その話を聞いた時、どんな気持ちでしたか？

藤本圭：仕入れの食材が安くなるなら助かると思いました。ただ——「こっちとしては預かってお国に納める側」なので、税率が変わるたびにレジのシステムを変えたり、メニュー表を刷り直したりで。「また手間が増えるのか」という気持ちも正直あって。

M：藤本さん、事業者としてのお話は後でぜひ聞かせてください。まずご家族の食費・生活費という立場から、その話を聞いた時どう感じましたか？

藤本圭：ああ、そっちですか。うちの食費は.....妻が管理しているので正確にはわかりませんが、月 7～8 万円くらいはかかっているんじゃないかと。それが減るなら、素直に助かりますよ。子どもの習い事代に回せる。

M：食料品消費税を 1%にするという案が出ていますが、どう思いますか？

藤本圭：1%.....まあ、ゼロより少ないのは残念ですけど。下げる方向で動いているなら、それはいいことじゃないですか。0 か 1 かの差より、動いているかどうかの方が大事な気がします。

M：なぜそう思いますか？

藤本圭：消費税って、上がる一方だと思っていたので。下がる方向があるというのが、まず新鮮ですよ。1%でも積み重なれば年間でそれなりの金額になりますし。

M：ゼロにするという公約があったのですが、覚えていますか？

藤本圭：覚えています。「本当にゼロにできるのかな」と最初から半信半疑でした。

M：驚きましたか、1%になったと聞いて？

藤本圭：驚かなかったですね。「まあ、そういうもんだよな」という感じで。大きな公約が現実にあたって変わるのはよくある話なので。

M：1%になったとしたら評価しますか？

藤本圭：評価します。ゼロより少ないのは残念だけど、動いてくれたこと自体は評価できる。

M：0 にできない理由について知りたいですか？

藤本圭：知りたいですね。理由があるなら教えてほしい。

M：なぜ 1%という議論が出ているか、ご存知ですか？

藤本圭：いや、詳しくは知らないです。業界では「政治の都合じゃないの」という声もあります。

M：実は、スーパーなどのレジシステムを税率ゼロに対応させるための改修に約 1 年かかるためです。0%だと 1 年、1%なら半年で実現できるそうです。それを聞いてどう思いますか？

藤本圭：.....なるほど。それは納得できる理由ですよ。うちも軽減税率が導入されたときに POS レジの設定をいじって大変でした。0%ってゼロとして扱うのか、非課税として扱うのかで、シ

システムの作り方が全然違うんですよ。半年早く実現できるなら、1%の方が現実的だと思います。

M：半年早いなら、1%になる方がいいということですか？

藤本圭：そうですね。現場の事情があるなら仕方ない。それでも半年でも早く実現してくれた方が助かる。

M：まだ決まったわけではありません。今も検討中のようです。それを聞いてどう思いますか？

藤本圭：早く決めてほしいですね。決まらないと、こちらも準備できないので。仕入れ計画も値付けも、税率が確定しないと動きにくい。

Part 2：消費税についての認知・考え（自由発話）

M：消費税についてはどのような知識や情報をお持ちですか。また、どのように考えていますか？

藤本圭：飲食をやっているので、消費税の仕組みはある程度わかっています。食料品は8%、テーブルで食べると10%。うちみたいな居酒屋は原則10%なのですが、テイクアウトや持ち帰りは8%で、判断が難しい品物が出てくるんです。お惣菜みたいなものを持ち帰りで出すと8%だけど、席で食べると10%。お客さんから「なんで違うの？」って聞かれることもあって。

M：まずご家族の食費・生活費という立場から、どう感じますか？

藤本圭：家の食費は.....仕事で仕入れているものと家の買い物が混同しやすいんですが、妻が管理している家庭の食費だけで月7~8万くらいと聞いています。消費税8%だと年間で6~7万円分くらい払っている計算ですね。それが半分でも浮けば、子どもの塾代に充てられる。

M：その情報はどこから？

藤本圭：妻から聞いた話と、自分の業界経験です。食材の仕入れ値の変動は仕事で毎日意識しているので、消費税が生活に与える影響には感度が高いと思います。

M：何か実感として感じているものはありますか？

藤本圭：食材が高くなっているのは仕事で毎日実感しています。去年と同じ食材を同じ量仕入れようとする、予算が足りなくなる。それをそのままメニューに転嫁できればいいんですが、居酒屋って値上げすると客足が落ちるリスクがある業種なので、なかなか踏み切れなくて。

M：それについてはどう思いますか？

藤本圭：正直しんどいです。消費税が下がれば仕入れコストも少し変わるかもしれない。食料品消費税が下がれば、仕事でも家でも少し楽になります。

Part 3：高市総理への好感度・評価

M：高市総理が就任してから、印象は変わりましたか？

藤本圭：就任前は「経済に強そう」というイメージがありました。就任後は.....景気がよくなっている実感は正直あまりないです。うちの店の売り上げで見ても、大きく変わった感じはしない。

M：飲食店を経営されている立場から見ると、高市総理についてどんなことが気になりますか？

藤本圭：経済政策が実際に中小・個人事業に届いているかどうかが一番気になります。「景気がいい」という話が出ても、うちみたいな小さな居酒屋には関係なかったりするので。消費税の話で言えば、食料品が下がれば仕入れコストに少し影響するかもしれないし、お客さんの財布が少し楽になれば飲食にお金が回ってくるかもしれない。そこに期待しています。

M：消費税の問題での高市総理の姿勢、どう見えますか？

藤本圭：公約を出してくれたのは評価します。1%案になったことも「現実的な判断だな」とは思います。今日のレジシステムの話みたいな説明を最初からしてくれれば、もっと納得感があったと思いますけど。

M：今の高市総理に何か一言メッセージを送るとしたら、なんと言いますか？

藤本圭：「早く決めてください。それだけです」ですかね。

M：なぜそう言いたいのですか？

藤本圭：決まらないと現場が動けないんですよ。税率が変わるなら変わるで、早く教えてくれないと準備ができない。大きな話も大事だけど、現場が動けるかどうかが一番大事なので。

締め

M：奥様とこういう話をすることはありますか？

藤本圭：たまにします。妻も「消費税が下がればいいのに」と言っています。私が「1%でも方向は正しい」と言ったら、「それはそうかもね、でも早くしてほしい」と返ってきました。

M：今日の話を通じて、一言でまとめると何でしょう？

藤本圭：「早く決めてほしい。決まれば、1%でも動き始められる」ですかね。

M：なぜそう思いますか？

藤本圭：今日のレジシステムの話聞いて、「そういう理由があるなら1%で早く進めてほしい」という気持ちが固まりました。ゼロか1%かより、早く実現されることの方が現場にとっては大事なので。

M：言い忘れたことや、改めて思ったことがあれば。

藤本圭：飲食業は消費税の影響をダイレクトに受ける業種なので、決まったら早めに告知してほしいです。準備期間がないと現場は混乱します。今日みたいに「レジシステムに時間がかかる」という理由があるなら、もっと早く説明してくれれば理解が広がるのと思います。

M：ありがとうございました。

No.4 「財源でなくシステムの問題とわかって安心した——1%でも早く食費を下げてほしい食べ盛りの子2人持つ42歳」

対象者プロフィール

氏名	岡田 正人
居住地	東京都豊島区
年齢・性別	42歳・男性
職業	会社員（大手メーカー・経理部）
家族構成	妻（パート）・子2人（14歳・11歳）
政治関心/知識	高／高

3分ブリーフィング

【1. 導入+Part 1：食料品消費税の議論への賛否と理由】

根拠：「財源じゃなくてシステムの問題だとわかって安心した」と述べ、「今の家計には早く始まってほしい」と語った。食費を月10万円と把握しており、「1%になれば月7,000円くらい変わる、年間8万円以上違う」と具体的な節約額を自ら計算した。

推論：「財源の問題」と思っていたことが「安心」の裏にある疑念の正体であり、システムの問題だとわかることでその疑念が解消された。8%から1%への変化を「塾代の足しになる」という子育ての動機に結びつけており、評価の根拠は家計への実利にある。ゼロへの残念感がありつつ、半年早く始まるという合理性で1%への支持が固まった。

FD：岡田にとって消費税1%案への賛成は、「財源ではなくシステムの問題」という情報が後ろ向きな気持ちを解消し、食べ盛りの子2人を育てる父親として半年早い実現を優先した生活感の判断だ。

【2. Part 2：消費税についての認知・考え】

根拠：「物価が上がっているのは肌で感じています」「子どもの食費が増えているのもあって食費全体が重くなっている」と語った。「給料はそれほど上がっていないのに食費は増えている。正直しんどいです」と続けた。

推論：月10万円という食費の把握は正確だが、評価の動機は数字の計算よりも「しんどい」という生活実感にある。妻が日々の買い物で物価変化を実感しており、家計情報の一次情報源として妻の感覚が機能している。

FD：岡田における消費税は「月10万円の食費に圧迫感を感じる子育て家庭の切実さ」として語られる。「正直しんどい」という言葉に、物価上昇と収入停滞の挟み撃ちにある家計の実態が出ている。

【3. Part 3：高市総理への好感度・評価】

根拠：「今日の話でシステムの問題だとわかって 1%案への評価が上がりました」と述べた。「食料品消費税は今すぐの話で助かります。でも子どもが大人になった時の社会がどうなっているかという視点も持つようになりまして」と続けた。

推論：高市総理への評価は食料品消費税の 1%案への賛成を軸に好意的だが、それが「今すぐの話」という位置づけにとどまっている。子どもの将来という長期視点も出てきており、評価が消費税の単発政策を超えた関心を持ち始めている。

FD：岡田の高市評価は「システムの問題だとわかって 1%案の合理性を認め、早く確定してほしい」という今すぐの生活者としての評価だ。「早く確定してください」という言葉に、子育て家庭の父親としての切実さが凝縮されている。

【全体総括】

根拠：「財源じゃなくてシステムの問題だとわかって安心した。1%でも早く食費を下げてほしい」と締めた。「財源の問題だと思っていたので、なんとなく政策への不満がありました」という言葉が評価変化の核心を示している。

推論：岡田を貫く行動原理は「食べ盛りの子 2 人を育てる父親として月 10 万円の食費に実際の重さを感じており、財源の問題という誤解が解けてシステムの制約と理解した瞬間に支持が固まる」だ。評価の変化に「安心」という言葉が使われており、政策への不信が解消されることが支持形成の起点になっている。

FD：岡田正人を特徴づけるのは「財源の問題という誤解が解けてシステムの改修時間の問題だとわかった瞬間に後ろ向きな気持ちが消え、月 10 万円の食費を抱える子育て家庭として半年早い 1%を支持した 42 歳」だ。「財源じゃなくてシステムの問題だとわかって安心した」という言葉に、政策への不信が解消されて支持が生まれる過程が凝縮されている。

発言録

導入 + Part 1：食料品消費税の議論への賛否と理由

M：今日はお時間をいただきありがとうございます。正解のない対話ですので、思ったことをそのままお話しいただければ大丈夫です。最近の生活はいかがですか？

岡田正人：大手メーカーで働いています。妻と子どもが二人、14 歳と 11 歳です。豊島区に住んでいます。最近はお子さんの塾代が増えてきて、家計を気にすることが多くなりました。

M：食料品消費税の議論をご存知でしたか？

岡田正人：知っています。高市総理が食料品の消費税をゼロにするという公約を出して、最近 1%案が出てきているという話ですね。

M：その話を聞いた時、どんな気持ちでしたか？

岡田正人：素直に助かると思いました。子どもが二人いて食費がかかるので、少しでも下がれば家計が楽になります。ゼロという話は驚きましたが、何か事情があるんだろうとは思っていました。

M：まずご家族の食費という立場からはいかがですか？

岡田正人：食費は月 10 万円くらいかかっています。14 歳の男の子が本当によく食べるんです。物価が上がっているので以前よりかさんでいます。消費税が下がれば、その分を塾代や将来の貯蓄に回せますし、助かります。

M：食料品消費税を 1%にするという案が出ていますが、どう思いますか？

岡田正人：良いと思います。8%から 1%になれば大きな差です。月 10 万円の食費で計算すると、毎月 7,000 円くらい変わります。年間で 8 万円以上違いますから、子どもの塾代の足しになります。

M：ゼロにするという公約があったのですが、覚えていますか？

岡田正人：覚えています。本当にゼロになるなら大きな話だと思いました。

M：驚きましたか、1%になったと聞いて？

岡田正人：少し残念ではありますね。ゼロの方が当然助かるので。ただ、何か理由があるんだろうとは思っていました。財源の問題かなと。

M：1%になったとしたら評価しますか？

岡田正人：評価します。8%からの変化は大きいですから。

M：0 にできない理由について知りたいですか？

岡田正人：知りたいです。財源の問題かなと思っていたので。

M：実は、スーパーなどのレジシステムを税率ゼロに対応させるための改修に約 1 年かかるためです。0%だと 1 年、1%なら半年で実現できるそうです。それを聞いてどう思いますか？

岡田正人：ああ、そういうことなんですね。財源の問題じゃなくてシステムの問題だったんですか。それを聞いて少し安心しました。財源が足りないから渋っているのかと思っていたので。全国のスーパーのレジを一斉に変えとなれば確かに時間がかかりますよね。それなら 1%で半年早く始まる方がずっと良いです。今の家計には早く始まってほしい。

M：半年早いなら、1%になる方がいいということですか？

岡田正人：そうですね。子どもが今ちょうど食べ盛りの時期なので、早い方が助かります。1%でも早く始まってほしいです。

M：まだ決まったわけではありません。今も検討中のようです。それを聞いてどう思いますか？

岡田正人：早く決めてほしいです。いつから変わるかわかれば、家計の計画も立てやすいので。

Part 2：消費税についての認知・考え（自由発話）

M：消費税についてはどのような知識や情報をお持ちですか。また、どのように考えていますか？

岡田正人：食料品が 8%で他が 10%というのは知っています。日常のことなので。スーパーのレシートを見れば税率が書いてありますし、物価が上がった今は余計に気になります。

M：まずご家族の食費という立場からはいかがですか？

岡田正人：月 10 万円の食費に 8%かかっているんで、1%になれば毎月 7,000 円近く変わります。年間で 8 万円以上です。子どもが二人いる今の時期には特にありがたい。その分を教育費に回せますから。

M：その情報はどこから？

岡田正人：家計のざっくりした把握は自分でもしています。妻の方が日々の買い物で物価の変化を実感しているので、妻からも話を聞いています。

M：何か実感として感じているものはありますか？

岡田正人：物価が上がっているのは肌で感じています。スーパーで同じものが前より高くなっているのがわかります。子どもの食費が増えているのもあって、食費全体が重くなっている感覚があります。

M：それについてはどう思いますか？

岡田正人：正直しんどいです。給料はそれほど上がっていないのに食費は増えている。消費税が少しでも下がれば、その分の余裕ができます。

Part 3：高市総理への好感度・評価

M：高市総理が就任してから、印象は変わりましたか？

岡田正人：就任した時は「強い人なんだな」という印象でした。食料品消費税の話は、家庭を持つ身としては方向性として良いと思います。今日の話でシステムの問題だとわかって、1%案への評価が上がりました。

M：14 歳と 11 歳のお子さんを持つ父親という立場から見ると、高市総理についてどんなことが気になりますか？

岡田正人：子どもの将来というか、教育費が家計で重くなっているんで、その支援がどうなるかは気になります。食料品の消費税は今すぐの話で、助かります。でも子どもが大人になった時の社会がどうなっているかという視点も持つようになりました。

M：消費税の問題での高市総理の姿勢、どう見えますか？

岡田正人：ゼロという大きな公約を出して、実現の過程でシステムの制約があつて 1%になったという流れは、理由がわかれば納得できます。財源じゃなくてシステムの問題というのを今日初めて知りました。それなら合理的な判断だと思います。

M：今の高市総理に何か一言メッセージを送るとしたらなんと言いますか？

岡田正人：「子どもが食べ盛りの今、食費が少しでも下がると家計が助かります。システムの問題で 1%になったというのは理解しました。早く確定してください」ですかね。

M：なぜそう言いたいのですか？

岡田正人：月 10 万円の食費に 8%かかっている今、1%になれば年間 8 万円以上変わります。子どもの塾代や教育資金にあてられますから。財源の問題じゃないとわかって安心しました。あとは早く決まれば。

締め

M：奥様とこういう話をすることはありますか？

岡田正人：します。妻が「食費が下がれば助かる」とよく言っています。スーパーで毎日買い物をしているので、妻の方が物価の変化をよく知っています。

M：今日の話を通じて、一言でまとめると何でしょう？

岡田正人：「財源じゃなくてシステムの問題だとわかって安心した。1%でも早く食費を下げてほしい」ですかね。

M：なぜそう思いますか？

岡田正人：財源の話だと思っていたので、なんとなく政策への不満がありました。でもシステムの改修に時間がかかるという理由なら仕方ない。むしろ半年早く始まる方を選ぶのは正しい判断だと思います。子どもがいる今の時期に早く始まってほしい。

M：言い忘れたことや、改めて思ったことがあれば。

岡田正人：今日の話でレジシステムの問題だとわかって良かったです。1%でも 8%からの変化は大きい。早く確定してほしいです。

M：ありがとうございました。

No.5 「言葉の意味をちゃんと説明してください」——5%から 10%を体験した 45 歳フリーランス父の条件付き承認

対象者プロフィール

氏名	西田 和也
居住地	東京都世田谷区
年齢・性別	45 歳・男性
職業	フリーランス WEB デザイナー
家族構成	妻（専業主婦）・子 3 人（12 歳・9 歳・6 歳）
政治関心/知識	中／低

3 分ブリーフィング

【1. 導入+Part 1：食料品消費税の議論への賛否と理由】

根拠：「消費税って 5%から 8%に上がって、8%から 10%に上がってきた。下がるというのが信じられなくて」と述べた。レジシステムの理由に「WEB の仕事をしていると、システムの変更にどれだけ手間がかかるかはわかります。そういう説明を最初からしてくれれば、もっと信用できたのに」と答えた。

推論：消費税が上がるたびに「社会保障に使う」と言われながら実感が薄かった経験が積み重なっており、政治的な言葉への懐疑が形成されている。WEB エンジニアとしてシステム変更の難しさを職業的に理解しているため、レジ改修の説明は納得できる理由として機能した。ただし「最初から説明してくれれば」という留保がつく。

FD：西田にとって 1%案への賛否は「内容の評価」より「説明の有無」で決まる。フリーランスとして言葉と現実のズレを積み重ねてきた経験が、「確認してから信じる」という姿勢を作っている。説明があれば納得できるというこの構造が、政治への関わり方の核心にある。

【2. Part 2：消費税についての認知・考え】

根拠：「食費は月 8～9 万円くらい。年間で 8 万円近く食費の消費税を払っている。それが減れば子どもの習い事代や教育費に回せます」と述べた。「消費税が下がること自体は賛成です。ただ——財源がどうなるかは気になります」と語った。

推論：フリーランスで確定申告をしているため消費税の仕組みへの理解がある。子ども 3 人という状況が消費税を「切実な問題」にしており、年間 8 万円という具体的な数字が実感を持つ。同時に「財源」という言葉を持ち出せる知識があり、単純な受益より制度全体の整合性を問う視点がある。

FD：西田における消費税は「生活の切実さと制度への懐疑が同居する問題」だ。子ども3人の家計として切実な当事者感を持ちながら、「財源がどうなるか」という問いも持つ。この二重性が、単純な賛成でも単純な反対でもない「条件付き承認」という立場を生んでいる。

【3. Part 3：高市総理への好感度・評価】

根拠：「言葉と現実のズレが積み重なると、政治への不信になる。今回も1%案になった理由をきちんと説明してくれれば、納得できるのに」と述べた。「言葉の意味をちゃんと説明してください」がメッセージだと語った。

推論：高市評価は「説明責任」という一点に集約されている。政策の内容より、変更の理由を説明するかどうか信頼の根拠になっている。フリーランスへの社会保障格差への言及もあり、消費税以外の政策への不満も底流にある。

FD：西田の高市評価は「説明があれば信頼できる、なければ不信が積み重なる」という条件付きの評価構造だ。「言葉の意味をちゃんと説明してください」というメッセージは、過去に言葉と現実のズレを体験してきた生活者の、政治への最小限の要求を表している。

【全体総括】

根拠：「理由を説明してくれれば納得できる。あとは早く実現してほしい」と締めた。「説明がある政治は信頼できる。消費税のことは子どもが3人いるので切実な問題で、早く実現してくれれば本当に助かります」と述べた。

推論：西田を貫く行動原理は「確認して初めて信じる」だ。消費税が上がるたびに「社会保障のため」と言われて実感が薄かった経験が、政治的な言葉への懐疑を形成している。しかしレジシステムという具体的で合理的な理由には即座に納得しており、「説明があれば信じられる」という可能性も開いている。

FD：西田和也を特徴づけるのは「消費税の上昇を体験した歴史が慎重さを作り、しかし合理的な説明には即座に応答する生活者」だ。「言葉の意味をちゃんと説明してください」という言葉は、裏切られてきた経験から生まれた要求であると同時に、説明があれば信頼できるという可能性の表明でもある。

発言録

導入 + Part 1：食料品消費税の議論への賛否と理由

M：今日はお時間をいただきありがとうございます。正解のない対話ですので、思ったことをそのままお話しただければ大丈夫です。最近の生活はいかがですか？

西田和也：フリーランスなので収入が安定しないのが常に不安で。子どもが3人いるので食費も教育費もかかります。物価が上がってから家計が苦しくなっていて、妻ともよく話しています。

M：食料品消費税の議論をご存知でしたか？

西田和也：知っています。高市総理が食料品の消費税をゼロにするという話があったのは知っています。最近では1%案が出ているとも聞きました。

M：知っていることを教えてください。

西田和也：「2年間ゼロにする」という公約があったのは知っています。ただ正直、「本当にゼロになるのかな」とは最初から半信半疑でした。消費税って5%から8%に上がって、8%から10%に上がってきた。下がるというのが信じられなくて。

M：その話を聞いた時、どんな気持ちでしたか？

西田和也：「実現したらすごく助かる」と思いました。子どもが3人いるので食費がかかっている、消費税が下がれば年間でかなりの金額になる。でも「公約って変わるよな」という気持ちも同時にあって。

M：なぜそう思いましたか？

西田和也：消費税が上がるたびに「社会保障に使う」と言われてきたけど、実感が薄くて。政治家の言葉をそのまま信じるのが難しくなっているんです。確認して初めて信じるというのが自分のスタンスで。

M：食料品消費税を1%にするという案が出ていますが、どう思いますか？

西田和也：正直、残念だとは思いますが。でも——1%でも下がるなら助かることは助かる。ゼロと1%の差は確かに大きいですが、方向性として「下げる」という意思を見せてくれているのは評価できます。

M：なぜそう思いますか？

西田和也：子どもが3人いるので、1%でも積み重なれば年間でそれなりの金額になります。「焼け石に水」とは言いたくなくても、ないよりはある。

M：ゼロにするという公約があったのですが、覚えていますか？

西田和也：覚えています。期待しましたよ、最初は。

M：驚きましたか？

西田和也：驚いたというより「やっぱりか」という感じです。過去に消費税が上がるたびに「これで社会保障が充実する」と言われてきた。言葉通りにはならないのが政治だと思っているので。

M：1%になったとしたら評価しますか？

西田和也：評価は.....半分といったところです。動いたことは評価する。でも「ゼロにできない理由」をちゃんと説明してほしい。説明なしに変わると、また「やっぱり信用できない」となってしまう。

M：0にできない理由について知りたいですか？

西田和也：知りたいです。理由によっては納得できるかもしれないし。

M：なぜ1%という議論が出ているか、ご存知ですか？

西田和也：いいえ、知らないです。

M：実は、スーパーなどのレジシステムを税率ゼロに対応させるための改修に約1年かかるためです。0%だと1年、1%なら半年で実現できるそうです。それを聞いてどう思いますか？

西田和也：あ、それは納得できる理由ですね。WEBの仕事をしていると、システムの変更にどれだけ手間がかかるかはわかります。全国のレジを一斉に変えとなれば、確かに時間がかかる。半年早く実現できるなら、1%の方がいい。

M：半年早いなら、1%になる方がいいということですか？

西田和也：そうですね。理由がわかれば納得できます。そういう説明を最初からしてくれれば、もっと信用できたのに。

M：まだ決まったわけではありません。今も検討中のようです。それを聞いてどう思いますか？

西田和也：早く決めてほしいですね。子ども3人いると、家計の計画を立てたいので。

Part 2：消費税についての認知・考え（自由発話）

M：消費税についてはどのような知識や情報をお持ちですか。また、どのように考えていますか？

西田和也：食料品8%・他10%というのは知っています。フリーランスで確定申告しているので、消費税の申告もしていて。インボイス制度が始まってから手続きが複雑になりました。仕組みはある程度わかっているつもりです。

M：まずご家族の食費・生活費という立場から、どう感じますか？

西田和也：食費は月8~9万円くらいかかっています。子どもが3人なので。消費税8%で計算すると、年間で8万円近く食費の消費税を払っている。それが減れば、子どもの習い事代や教育費に回せます。

M：その情報はどこから？

西田和也：家計簿を妻がつけているので、そこから。フリーランスで収入が変動するので、支出の管理は妻がしっかりやってくれています。

M：何か実感として感じているものはありますか？

西田和也：食材の値段が上がっているのはスーパーで実感しています。同じものを買っても支払いが増えている。消費税が下がれば少し余裕が生まれます。子どもが3人いると、本当に少しの差が大きく感じられるんですよ。

M：それについてはどう思いますか？

西田和也：消費税が下がること自体は賛成です。ただ——財源がどうなるかは気になります。消費税が社会保障に使われているなら、下げた分はどこから補うのかという疑問はあります。説明がほしいんですよ、そういうところを。

Part 3：高市総理への好感度・評価

M：高市総理が就任してから、印象は変わりましたか？

西田和也：就任前は「経済政策に積極的な人」という印象がありました。就任後は.....フリーランスへの支援策とか、具体的に変わったことはあまり実感できていないです。消費税の話は注目していますが。

M：フリーランスとして働かれている立場から見ると、高市総理についてどんなことが気になりますか？

西田和也：フリーランスへの社会保障の問題が気になります。フリーランスって国民健康保険や年金を全額自分で払うので、会社員より負担が大きい。消費税の話も大事ですが、その辺りの格差も見してほしい。消費税で言えば、「言ったことをちゃんとやるか」を見ています。

M：消費税の問題での高市総理の姿勢、どう見えますか？

西田和也：公約を出してくれた点は評価します。ただ1%案になったことについては、今日みたいな説明を最初からやってほしかった。「なぜ変わったか」を言わずに変わると、また不信感になってしまう。

M：今の高市総理に何か一言メッセージを送るとしたら、なんと言いますか？

西田和也：「言葉の意味をちゃんと説明してください」ですかね。公約を変えるなら理由を説明する、それだけで信頼できるかどうかが変わります。

M：なぜそう言いたいのですか？

西田和也：消費税が上がるたびに「社会保障に使う」と言われてきて、でも実感が薄かった。言葉と現実のズレが積み重なると、政治への不信になる。今回も1%案になった理由をきちんと説明してくれれば、納得できるのに。

締め

M：奥様とこういう話をすることはありますか？

西田和也：します。妻も「ゼロにするって言ったのに1%になるの？」と言っていました。私が「レジシステムの理由があるなら仕方ないかも」と伝えたら、「そういう理由があるなら納得できる。でも早くしてほしい」と言っていました。

M：今日の話を通じて、一言でまとめると何でしょう？

西田和也：「理由を説明してくれれば納得できる。あとは早く実現してほしい」ですかね。

M：なぜそう思いますか？

西田和也：今日レジシステムの話聞いて、「そういう理由があるなら1%で早く進めてほしい」と思いました。説明がある政治は信頼できる。消費税のことは子どもが3人いるので切実な問題で、早く実現してくれれば本当に助かります。

M：言い忘れたことや、改めて思ったことがあれば。

西田和也：フリーランスは収入が不安定なので、消費税が下がることは本当に助かります。今日みたいな「なぜ1%なのか」という説明がもっと広まれば、政治への理解が深まると思います。

M：ありがとうございました。

No.6 「レジのシステムの問題なら仕方ない、1%でも早く食費が下がってほしい——受験を控えた子2人持つ48歳」

対象者プロフィール

氏名	桑田 雅和
居住地	東京都板橋区
年齢・性別	48歳・男性
職業	地方公務員（区役所勤務）
家族構成	妻・子2人（18歳・15歳）
政治関心/知識	高／高

3分ブリーフィング

【1. 導入+Part 1：食料品消費税の議論への賛否と理由】

根拠：「子どもがまだ家にいる今のうちに始まってくれた方が助かります」と述べ、「1%で半年早く始まるなら早い方がいい」と語った。食費を月8～9万円と把握しており、「毎月5,000～6,000円くらい変わる」と計算した。

推論：18歳・15歳という「まだ家にいる」子どもの存在が、「今のうちに始まってほしい」という時間的切実さの根拠になっている。ゼロへの驚きはなく「様々な壁があると思っていた」という現実認識から1%案への違和感も少ない。システムの問題という説明も「確かに大変ですね」と自然に受け入れている。

FD：桑田にとって消費税1%案への賛成は、受験を控えた子どもを持つ親として「今のうちに始まってほしい」という時間的切実さが軸にある。制度変更への違和感なく、早く始まる方が家計として良いという生活者としての判断だ。

【2. Part 2：消費税についての認知・考え】

根拠：「物価が上がっているのを感じているので、少しでも下がれば助かるという気持ちはあります」と述べた。「子どもの受験費用や部活の費用がかさんでいる時期なので、食費が少し下がれば助かります」と続けた。

推論：消費税への知識は一般的な水準で、専門的な分析はない。妻が日々の食費を把握しており、物価上昇の実感の一次情報源は妻との会話にある。子どもの受験・部活という具体的な出費が食費節約への動機に結びついている。

FD：桑田における消費税は「受験と部活で出費が増える今の時期の家計への切実さ」として語られる。妻が買い物で物価変化を把握しており、家計の実感妻を介して出てくる。

【3. Part 3：高市総理への好感度・評価】

根拠：「食費が少し下がれば助かります」と述べた。「若者の将来や社会保障がどうなるかも気になります。子どもが社会に出た後のことを考えると」と続けた。

推論：高市総理への評価は食料品消費税の方向性への好意的な受け入れにとどまっており、強い支持でも批判でもない。18 歳の子どもを持つ親として、社会保障という「子どもが社会に出た後」の視点が自然に出てくる。

FD：桑田の高市評価は「食費が下がる方向は良い、若者の将来も気になる」という穏やかな複層評価だ。政策への強い評価より、家庭として今すぐ助かることへの実感が主調になっている。

【全体総括】

根拠：「レジのシステムの問題なら仕方ない、1%でも早く食費が下がってほしい」と締めた。「子どもがまだ家にいる今の時期に食費が少しでも下がれば助かります」という言葉が一貫した動機を示している。

推論：桑田を貫く行動原理は「18 歳・15 歳の子どもがまだ家にいる今の時期に教育費と食費が重なっており、システムの問題という説明を自然に受け入れて 1%で早く始まることを生活者として歓迎する」だ。今のうちに、という時間的な切実さが評価の核にある。

FD：桑田雅和を特徴づけるのは「受験を控えた 15 歳と 18 歳の子どもを育てる父親として、今のうちに食費が下がってほしいという切実さを持ち、システムの問題という説明を素直に受け入れて 1%案を支持した 48 歳」だ。「子どもがまだ家にいる今のうちに始まってくれた方が助かります」という言葉に、タイムリミットを感じる子育て家庭の親の本音が出ている。

発言録

導入 + Part 1：食料品消費税の議論への賛否と理由

M：今日はお時間をいただきありがとうございます。正解のない対話ですので、思ったことをそのままお話しいただければ大丈夫です。最近の生活はいかがですか？

桑田雅和：板橋区の区役所で働いています。妻と子どもが二人、18 歳と 15 歳です。板橋区に住んでいます。下の子が来年受験なので、出費が増えてきています。

M：食料品消費税の議論をご存知でしたか？

桑田雅和：知っています。高市総理の食料品消費税ゼロの公約も、最近の 1%案も聞いています。

M：まずご家族の食費という立場からはいかがですか？

桑田雅和：食費は月 8～9 万円くらいです。子どもが 18 歳と 15 歳でまだ食費がかかりますし、物価も上がっているので以前より出費が増えています。少しでも下がれば助かります。

M：食料品消費税を 1%にするという案が出ていますが、どう思いますか？

桑田雅和：良いと思います。月 8～9 万円の食費で計算すると、1%になれば毎月 5,000～6,000 円くらい変わります。子どもの受験費用や教育費に充てられますから、家計として助かります。

M：ゼロにするという公約があったのですが、覚えていますか？

桑田雅和：覚えています。

M：驚きましたか、1%になったと聞いて？

桑田雅和：驚かないですね。ゼロというのは実現に様々な壁があると思っていたので。

M：1%になったとしたら評価しますか？

桑田雅和：評価します。

M：0 にできない理由について知りたいですか？

桑田雅和：知りたいです。

M：実は、スーパーなどのレジシステムを税率ゼロに対応させるための改修に約 1 年かかるためです。0%だと 1 年、1%なら半年で実現できるそうです。それを聞いてどう思いますか？

桑田雅和：レジのシステムの問題なんですね。全国のスーパーを一斉に変えとなれば確かに大変ですね。家計として、1%で半年早く始まるなら早い方がいいです。子どもがまだ家にいる今のうちに始まってくれた方が助かりますから。

M：半年早いなら、1%になる方がいいということですか？

桑田雅和：そうですね。早く始まる方が家計として助かります。

M：まだ決まったわけではありません。今も検討中のようです。それを聞いてどう思いますか？

桑田雅和：早く決まれば良いと思います。

Part 2：消費税についての認知・考え（自由発話）

M：消費税についてはどのような知識や情報をお持ちですか。また、どのように考えていますか？

桑田雅和：食料品が 8%で他が 10%というのは知っています。物価が上がっているのを感じているので、少しでも下がれば助かるという気持ちはあります。

M：まずご家族の食費という立場からはいかがですか？

桑田雅和：月 8～9 万円くらいかかっています。1%下がれば年間で 5,000～7,000 円くらいの節約になります。子どもの受験費用や部活の費用がかさんでいる時期なので、食費が少し下がれば助かります。

M：その情報はどこから？

桑田雅和：ニュースや妻からの話が主ですね。妻の方が毎日の買い物をしているので、値段の変化をよく把握しています。

M：何か実感として感じているものはありますか？

桑田雅和：物価が上がっているのは感じています。スーパーで同じものが前より高くなっているのがわかります。妻から「同じものが高くなった」と聞きます。

M：それについてはどう思いますか？

桑田雅和：消費税が少しでも下がれば助かります。家計として物価上昇は厳しいです。

Part 3：高市総理への好感度・評価

M：高市総理が就任してから、印象は変わりましたか？

桑田雅和：就任前から積極的な印象がありました。食料品消費税の話は家庭として良いと思います。1%案は実現可能な修正として受け入れています。

M：18歳と15歳のお子さんを持つ親という立場から見ると、高市総理についてどんなことが気になりますか？

桑田雅和：下の子が来年受験なので出費がこれから増えます。食費が少し下がれば助かります。若者の将来や社会保障がどうなるかも気になります。子どもが社会に出た後のことを考えると。

M：消費税の問題での高市総理の姿勢、どう見えますか？

桑田雅和：方向性は良いと思います。今日の話でシステムの問題だとわかって、1%案の理由が理解できました。

M：今の高市総理に何か一言メッセージを送るとしたらなんと言いますか？

桑田雅和：「子どもがいる家庭として食費が少し下がれば本当に助かります。1%案で早く始めてほしいです」ですかね。

M：なぜそう言いたいのですか？

桑田雅和：18歳と15歳の子どもがいて、教育費も食費もかかる時期です。消費税が少しでも下がれば、その分を子どもたちのために使えます。

締め

M：奥様とこういう話をすることはありますか？

桑田雅和：します。妻が「食費が下がれば助かるね」と言っていました。妻の方が毎日の買い物をしているので、値段の変化によく気づいています。

M：今日の話を通じて、一言でまとめると何でしょう？

桑田雅和：「レジのシステムの問題なら仕方ない、1%でも早く食費が下がってほしい」ですね。

M：なぜそう思いますか？

桑田雅和：子どもがまだ家にいる今の時期に食費が少しでも下がれば助かります。システムの問題で半年早く始まるなら、1%の方が家計として良い判断です。

M：言い忘れたことや、改めて思ったことがあれば。

桑田雅和：今日の話でシステムの問題とわかって良かったです。早く確定してほしいです。

M：ありがとうございました。

No.7 「1%でも下がるなら文句は言わない」——消費税と物価の区別がつかない 49 歳製造業工員の、それだけの賛成

対象者プロフィール

氏名	浜田 敏雄
居住地	東京都荒川区
年齢・性別	49 歳・男性
職業	製造業工員
家族構成	妻・子 2 人（20 歳・18 歳）
政治関心/知識	低/低

3 分ブリーフィング

【1. 導入+Part 1：食料品消費税の議論への賛否と理由】

根拠：「消費税って上がることはあっても下がることはないと思っていた」と述べた。1%案に「まあ、そういうもんかなという気持ちです。政治の話って、言ったとおりにならないことが多い」と答えた。レジシステムの理由に「工場でも機械の切り替えは大変なので。半年早く実現できるなら、それはそっちの方がいい」と応じた。

推論：消費税への関心は薄く、「下がること自体が新鮮」という程度の認識水準にある。公約変更への反応は「そういうもんか」という諦め観で、失望も期待もない。工場作業員としての機械交換経験がレジ改修への共感につながっており、論理的な評価より職業的な実感での理解が起きている。

FD：浜田にとって消費税政策への態度は「下がれば助かる、それだけ」という最小限の関心だ。賛否を考える以前に、消費税が「下がることもある」という事実自体への驚きがある。政治的な評価の枠組みを持たないため、「文句は言わない」という形で賛成の意思を示す。

【2. Part 2：消費税についての認知・考え】

根拠：「食料品が 8%で、それ以外は 10%というのは知っています」と述べた。「物の値段が上がっているのは感じます。スーパーで同じものを買っても高くなっている気がする。消費税の分なのか、食材自体が高くなっているのか、区別はついていないですが」と語った。

推論：消費税と物価上昇の区別がついていない状態は、消費税への関心が低さの表れだ。知識として税率は知っているが、日常の体験として消費税を意識していない。老後の蓄えへの言及は、定年前の現実的な不安を示しており、消費税問題は「出費が減ること自体は良い」という枠で評価されている。

FD：浜田における消費税は「物価という大きな問題の中に溶け込んでいて単独では見えない問題」だ。スーパーの値段が高くなっているのは実感しているが、消費税との因果関係は把握してい

ない。この認知の曖昧さが、政策への評価を「下がれば助かる」という単純な受け入れにとどめている。

【3. Part 3：高市総理への好感度・評価】

根拠：「言ったことはちゃんとやってほしい」と述べた。「大きな約束をして変えるなら、理由をちゃんとやってほしい。理由を言ってくれば、そういう事情があるなら仕方ないと思えますから」と語った。

推論：高市への評価は具体的な政策内容より「言葉の一貫性」への素朴な要求に集約されている。政治的な詳細には関心がないが、「言ったことをやる」という基本的な誠実さへの期待は明確にある。製造業工員として指示と実行の一致を日常的に経験しており、政治家への要求も同じ枠組みで考えている。

FD：浜田の高市評価は「難しいことはわからないが、言ったことをやってほしい」という素朴な誠実さへの要求だ。政治への関心は低い、「約束を守る」という日常の感覚を政治にも求めている、その要求は単純だが核心的でもある。

【全体総括】

根拠：「1%でも下がるなら文句は言わない。早く決まってくればそれでいい」と締めた。レジシステムの話に「そういう理由があるなら納得できる」と答えた。

推論：浜田を貫く行動原理は「過度な期待も過度な失望もしない、最小限の賛成」だ。政治への関心が低く、消費税と物価の区別もついていないが、「下がれば助かる」という現実的な利益への関心は明確にある。諦め観と現実主義が重なったところに、この人物の政治との関係が成立している。

FD：浜田敏雄を特徴づけるのは「消費税と物価の区別がつかないほど政治から距離を置いているが、下がれば素直に助かる」と言える製造業工員の生活者感覚」だ。「1%でも下がるなら文句は言わない」という言葉に、過剰な期待も失望もなく、ただ生活が少し楽になればという最低限の願いが表れている。

発言録

導入 + Part 1：食料品消費税の議論への賛否と理由

M：今日はお時間をいただきありがとうございます。正解のない対話ですので、思ったことをそのままお話いただければ大丈夫です。最近の生活はいかがですか？

浜田敏雄：工場で働いているんですが、物の値段が上がっているのは実感しています。子どもが2人とも成人してだいぶ楽になりましたけど、定年まであと10年くらいで、老後のことを考えると不安はありますね。

M：食料品消費税の議論をご存知でしたか？

浜田敏雄：ニュースで見た気はします。高市総理が消費税をゼロにするという話があったのは覚えていますが。最近また何か変わったんですか？

M：知っていることを教えてください。

浜田敏雄：ゼロにするという話があったのは知っています。でも詳しくはよくわからなくて。テレビでやっているのを横で聞いているくらいで。1%になるかもというのは知らなかったです。

M：その話を聞いた時、どんな気持ちでしたか？

浜田敏雄：「ゼロになるの？それはすごいな」とは思いましたよ。でも「本当になるのかな」とも思って。

M：なぜそう思いましたか？

浜田敏雄：消費税って上がることはあっても下がることはないと思っていたので。「そんなことできるの？」という感じで。

M：食料品消費税を 1%にするという案が出ていますが、どう思いますか？

浜田敏雄：1%.....まあ、ゼロよりは少ないですけど、下がるなら下がる方がいいですよ。文句は言いません。

M：なぜそう思いますか？

浜田敏雄：下がれば助かるに決まっていますから。子どもが成人したので以前ほど食費はかかりませんが、妻と 2 人でも食費はかかるし。

M：ゼロにするという公約があったのですが、覚えていますか？

浜田敏雄：なんとなく覚えています。

M：驚きましたか、1%になったと聞いて？

浜田敏雄：まあ.....そういうもんかなという気持ちです。政治の話って、言ったとおりにならないことが多いイメージがあるので。

M：1%になったとしたら評価しますか？

浜田敏雄：評価というか.....まあ、やってくれるなら文句は言わないです。

M：0 にできない理由について知りたいですか？

浜田敏雄：知りたいといえば知りたいですけど、理由があるんでしょうね。

M：なぜ 1%という議論が出ているか、ご存知ですか？

浜田敏雄：いや、知らないです。

M：実は、スーパーなどのレジシステムを税率ゼロに対応させるための改修に約 1 年かかるためです。0%だと 1 年、1%なら半年で実現できるそうです。それを聞いてどう思いますか？

浜田敏雄：そういう理由ですか。まあ、機械を変えるには時間がかかりますよね。工場でも機械の切り替えは大変なので。半年早く実現できるなら、それはそっちの方がいいですよ。

M：半年早いなら、1%になる方がいいということですか？

浜田敏雄：そうですね。早い方がいいですから。

M：まだ決まったわけではありません。今も検討中のようです。それを聞いてどう思いますか？

浜田敏雄：早く決まってほしいですね。決まらないと何も変わらないので。

Part 2：消費税についての認知・考え（自由発話）

M：消費税についてはどのような知識や情報をお持ちですか。また、どのように考えていますか？

浜田敏雄：食料品が 8%で、それ以外は 10%というのは知っています。スーパーで買い物するとレシートに書いてあるので。消費税がどこに使われているかは、よくわかりません。社会保障って聞いたことはありますが。

M：まずご家族の食費・生活費という立場から、どう感じますか？

浜田敏雄：子どもが成人してからだいぶ食費が減りましたが、妻と 2 人でも月 5～6 万円くらいかかっています。8%の消費税で年間 5 万円くらいは払っているんですかね。それが少し減るなら助かります。

M：その情報はどこから？

浜田敏雄：妻が家計を管理しているので、妻から聞いた話です。私はあまり気にしていなかったのです。

M：何か実感として感じているものはありますか？

浜田敏雄：物の値段が上がっているのは感じます。スーパーで同じものを買っても高くなっている気がする。消費税の分なのか、食材自体が高くなっているのか、区別はついていないですが。

M：それについてはどう思いますか？

浜田敏雄：消費税が下がればいくらか楽になるんでしょうね。老後の蓄えを考えると、出費は減るに越したことはないですから。

Part 3：高市総理への好感度・評価

M：高市総理が就任してから、印象は変わりましたか？

浜田敏雄：就任したのは知っていますが.....正直、あまり変わった感じはしないですね。景気がよくなっているというのも、工場で働いているとあまり実感できないです。

M：製造業で働かれている立場から見ると、高市総理についてどんなことが気になりますか？

浜田敏雄：物価が上がって賃金が追いついていない感じがするので、そこをなんとかしてほしいというのはあります。消費税の話は——正直、政治のことはよくわかりませんが、下がるなら下がる方がいいというそれだけです。

M：消費税の問題での高市総理の姿勢、どう見えますか？

浜田敏雄：公約を出してくれたことは知っています。1%案になったことも「まあそういうもんか」という感じで。今日のシステムの話聞いて、そういう理由があるんだとわかりました。

M：今の高市総理に何か一言メッセージを送るとしたら、なんと言いますか？

浜田敏雄：「言ったことはちゃんとやってほしい」ですかね。大きな約束をして変えるなら、理由をちゃんとやってほしい。

M：なぜそう言いたいのですか？

浜田敏雄：政治家って言葉が変わることが多い印象があるので。理由を言ってくれば、「そういう事情があるなら仕方ない」と思えますから。

締め

M：奥様とこういう話をすることはありますか？

浜田敏雄：します。妻が「消費税が下がれば助かる」とよく言っています。1%案になったことは妻に話したら「ゼロじゃなくなったの？」と言っていました。今日のシステムの話伝えたら、「そういう理由があるなら仕方ないね」と言うと思います。

M：今日の話を通じて、一言でまとめると何でしょう？

浜田敏雄：「1%でも下がるなら文句は言わない。早く決まってくればそれでいい」ですかね。

M：なぜそう思いますか？

浜田敏雄：今日レジシステムの話聞いて、「そういう理由があるなら納得できる」と思いました。大きな議論よりも、早く決まって実現してくれる方が大事なので。

M：言い忘れたことや、改めて思ったことがあれば。

浜田敏雄：あまり政治のことはわかりませんが、物価が高くて生活が苦しいというのは実感しています。消費税が下がるというのが本当に実現するなら、素直に助かります。

M：ありがとうございました。

No.8 「妻が喜んでくれることが一番」——妻から聞いて初めて知った 33 歳営業マン父の、消費税への遠い距離

対象者プロフィール

氏名	本田 真一
居住地	東京都葛飾区
年齢・性別	33 歳・男性
職業	会社員（営業職）
家族構成	妻（専業主婦）・子 1 人（1 歳）
政治関心/知識	低/低

3 分ブリーフィング

【1. 導入+Part 1：食料品消費税の議論への賛否と理由】

根拠：「妻から『食品の消費税が安くなるかも』と聞いて知りました。自分ではニュースを追っていなかったの」と述べた。1%案に「妻がどう思うかな、という感じです」と答えた。レジシステムの理由に「半年早く実現できるなら、1%の方がいいんじゃないですか。妻も早く始まる方が嬉しいと思います」と語った。

推論：消費税の政策情報を妻から入手しており、評価の基準も「妻が喜ぶかどうか」という代理的な視点に依存している。自分自身の賛否よりも、妻の反応を介した評価が先に来る構造がある。レジシステムの理由への反応も「妻に早く教えてあげたい」という言葉に表れており、本人の判断より妻への還元が優先されている。

FD：本田にとって消費税政策は「自分ごと」ではなく「妻ごと」の問題だ。政策の是非を自分の言葉で評価するより、妻が助かるかどうかという代理的な関心が評価軸になっている。「妻が喜んでくれることが一番」という言葉が、この人物の政治との距離感を凝縮している。

【2. Part 2：消費税についての認知・考え】

根拠：「食費は妻が管理しているので正確にはわかりませんが、『最近高くなった』とよく言っています。子どもが 1 歳でミルクとかおむつとか出費が多くて、食費まで詳しく把握できていない」と述べた。

推論：家計管理を全面的に妻に委ねており、食費の実態も「妻から聞いた話」という間接的な把握にとどまっている。子どもが 1 歳という時期の出費は認識しているが、消費税という観点から家計を見たことがない。政治や税制への関心を持てる余裕が、仕事と育児補助の生活には存在していない。

FD：本田における消費税は「妻が気にしている問題であり、自分は気にしたことがなかった問題」だ。家計への関心が薄く、消費税の知識も最低限にとどまっている。ただし「妻が助かるなら自分も助かる」という素直な連帯感が、関心の薄さを補っている。

【3. Part 3：高市総理への好感度・評価】

根拠：「子育て支援が充実してくれると助かります」と述べた。「消費税の話は妻が気にしているので、妻が助かるなら自分も助かるという感じです」と語った。「早く実現してください、子どもが小さいうちに」がメッセージだと答えた。

推論：高市への評価の軸は「子育て支援」と「消費税の早期実現」だが、どちらも妻への影響を通じて語られている。「女性の総理」という印象が最初に出たことも、自分自身の生活との接続より印象的な特徴への反応であることを示している。

FD：本田の高市評価は「妻が助かれば自分も助かる」という代理的な評価の構造だ。政策への個人的な見解を持たない代わりに、家族、特に妻への影響という軸で政治を評価している。この間接性が、政治との最小限の接続点を作っている。

【全体総括】

根拠：「妻が喜んでくれることが一番なので」と締めた。「今日初めて消費税のことをちゃんと聞いたかもしれないです。妻が気にしているので、帰って話したいと思います」と述べた。

推論：本田を貫く行動原理は「妻と家族が中心にあり、政治はその周辺に存在する」だ。消費税という政策問題を、妻への報告という文脈で初めて意味あるものとして受け取っている。このインタビュー自体が「消費税のことを初めてちゃんと聞いた」経験になっており、妻に伝えることが最初の動機になっている。

FD：本田真一を特徴づけるのは「消費税への関心が妻を経由して初めて生まれる、政治から遠い新米父親の代理的関心」だ。「妻が喜んでくれることが一番」という言葉は、消費税政策への最終的な評価軸が「妻の喜び」であることを率直に示しており、政治との距離の正直な表れでもある。

発言録

導入 + Part 1：食料品消費税の議論への賛否と理由

M：今日はお時間をいただきありがとうございます。正解のない対話ですので、思ったことをそのままお話しいただければ大丈夫です。最近の生活はいかがですか？

本田真一：子どもが1歳になったばかりで、毎日バタバタしています。妻が家にいてくれるので助かっていますが、収入が1本になったので家計が少し苦しくなってきました。

M：食料品消費税の議論をご存知でしたか？

本田真一：妻から「食品の消費税が安くなるかも」と聞いて知りました。自分ではニュースを追っていないかったので、妻に教えてもらったんです。

M：知っていることを教えてください。

本田真一：妻から「高市総理がゼロにするって言っていた」と聞きました。詳しくはわかりませんが、食費が安くなるなら助かるなとは思っていました。1%案が出ているのは今日初めて聞きました。

M：その話を聞いた時、どんな気持ちでしたか？

本田真一：妻が「助かる」と言っていたので、そうなんだと思いました。自分ではあまりピンときていなかったですが、妻が喜んでいたので、それは良い話なんだと。

M：なぜそう思いましたか？

本田真一：食費の管理は妻に任せているので、妻がいいと言えればいいんだという感じで。仕事と飲み会でいっぱいいっぱい、政治のニュースまで追えていないです。

M：食料品消費税を 1%にするという案が出ていますが、どう思いますか？

本田真一：1%.....ゼロよりは少ないんですよね。妻がどう思うかな、という感じです。でも下がるなら下がる方がいいんじゃないですか。

M：なぜそう思いますか？

本田真一：妻が専業主婦で、子どもが小さくて食費がかかるので。少しでも下がれば助かるんじゃないかと思います。

M：ゼロにするという公約があったのですが、覚えていますか？

本田真一：妻から聞いた話では覚えています。自分ではあまりちゃんと聞いていなかったですが。

M：驚きましたか？

本田真一：驚いたというか.....そういうものなのかなという感じです。政治の話は難しくて、公約が変わっても「そうなんだ」くらいで。

M：1%になったとしたら評価しますか？

本田真一：評価.....うーん、妻は評価するんじゃないかと思います。自分では正直よくわかりませんが、下がるなら悪いことじゃないと思います。

M：0 にできない理由について知りたいですか？

本田真一：理由があるんですね。聞けば「そうなんだ」と思うと思います。

M：なぜ 1%という議論が出ているか、ご存知ですか？

本田真一：知らないです。

M：実は、スーパーなどのレジシステムを税率ゼロに対応させるための改修に約1年かかるためです。0%だと1年、1%なら半年で実現できるそうです。それを聞いてどう思いますか？

本田真一：あ、そういう理由ですか。それは納得できる気がします。機械って変えるのが大変ですよ。半年早く実現できるなら、1%の方がいいんじゃないですか。妻も早く始まる方が嬉しいと思います。

M：半年早いなら、1%になる方がいいということですか？

本田真一：そうですね。子どもが小さいうちに始まった方が助かるので。

M：まだ決まったわけではありません。今も検討中のようです。それを聞いてどう思いますか？

本田真一：早く決まってほしいですね。妻にも早く教えてあげたいです。

Part 2：消費税についての認知・考え（自由発話）

M：消費税についてはどのような知識や情報をお持ちですか。また、どのように考えていますか？

本田真一：食料品が8%で、他は10%というのはなんとなく知っています。詳しくはよくわかりませんが、スーパーのレシートを見ると書いてありますよね。消費税がどこに使われているかはあまり知らないです。

M：まずご家族の食費・生活費という立場から、どう感じますか？

本田真一：食費は妻が管理しているので正確にはわかりませんが、「最近高くなった」とよく言っています。子どもが1歳でミルクとかおむつとか出費が多くて、食費まで詳しく把握できていないですが、下がれば助かると思います。

M：その情報はどこから？

本田真一：妻から聞いた話がほとんどです。自分では買い物はあまりしないので。

M：何か実感として感じているものはありますか？

本田真一：コンビニで買い物するとレシートが高くなった気はします。でも消費税なのか物価なのか区別がつかなくて。妻の方が詳しいと思います。

M：それについてはどう思いますか？

本田真一：下がればいいなとは思いますが。妻が専業主婦で家計を切り盛りしているので、少しでも楽になってほしいという気持ちはあります。

Part 3：高市総理への好感度・評価

M：高市総理が就任してから、印象は変わりましたか？

本田真一：就任したのは知っています。女性の総理というのが印象的でした。それ以外は.....正直あまり追えていないですね。

M：子どもが生まれたばかりのお父さんの立場から見ると、高市総理についてどんなことが気になりますか？

本田真一：子育て支援が充実してくれると助かります。保育園の問題とかも気になっていて。消費税の話は妻が気にしているので、妻が助かるなら自分も助かるという感じです。

M：消費税の問題での高市総理の姿勢、どう見えますか？

本田真一：正直あまり詳しくないですが、今日の話を聞いて「そういう事情があるんだ」と思いました。妻に伝えたら喜ぶと思います。

M：今の高市総理に何か一言メッセージを送るとしたら、なんと言いますか？

本田真一：「早く実現してください」ですかね。子どもが小さいうちに始まってほしいので。

M：なぜそう言いたいのですか？

本田真一：子どもが小さいうちが一番お金がかかる時期だと妻から聞いているので。この時期に実現してくれたら、妻が助かると思います。

締め

M：奥様とこういう話をすることはありますか？

本田真一：妻から教えてもらうことが多いです。今日の話を帰って伝えたら、妻が「そういう理由なんだ、なら 1%でも早く始まってほしい」と言うと思います。

M：今日の話を通じて、一言でまとめると何でしょう？

本田真一：「早く実現してくれれば、1%でも助かる」ですかね。

M：なぜそう思いますか？

本田真一：今日レジシステムの話聞いて、「そういう理由があるなら 1%で早く進めてほしい」と思いました。妻が喜んでくれることが一番なので。

M：言い忘れたことや、改めて思ったことがあれば。

本田真一：今日初めて消費税の話をちゃんと聞いたかもしれないです。妻が気にしているので、帰って話したいと思います。レジシステムの話は妻も知らないと思うので、教えてあげます。

M：ありがとうございました。

No.9 食料品の消費税、正直ピンとこなかった——ゼロか 1%か、妻に家計を任せる 43 歳個人タクシーの本音

対象者プロフィール

氏名	安田 博之
居住地	東京都大田区
年齢・性別	43 歳・男性
職業	個人タクシー運転手
世帯年収	約 420 万
家族構成	妻・子 1 人（16 歳）
政治関心/知識	中／低

3 分ブリーフィング

【1. 導入】

根拠：「食料品の消費税よりガソリン代が頭にある」と最初に語った。「お客さんの話を聞いていると、同じニュースに対して全然違う解釈をしていて、自分の判断が難しくなる」と述べた。

推論：安田にとって食料品消費税の議論は、自分の仕事・生計と直結した問題ではなく、妻を通じた間接的な関心事だ。政治への関心は「お客さんから聞く」という受動的な経路で形成されており、多様な意見に毎日さらされる職業が「自分の判断の難しさ」という独特の構えを生んでいる。

FD：政治への関心は高めだが、知識より「お客さんの声の集積」として持っている。食料品消費税より燃料費・インボイスという個人事業主の問題が本音の核心にあり、家計の食費視点（妻）と仕事の燃料費視点（自分）が並走している。

【2. Part 1：食料品消費税の議論への賛否と理由】

根拠：「1%でも下がれば助かる。でも食料品の消費税よりガソリンの税金を何とかしてくれた方がありがたい」と述べた。レジシステムの理由に「タクシーのメーター設定変更と似た話」と職業経験で納得した。

推論：1%案への評価は「家計として助かる」だが、優先度は低い。ガソリン税・インボイスという個人事業主の問題が判断の上位にあり、食料品消費税は「妻の問題」として処理されている。レジシステムの理由への納得は、自分の職業経験（メーター変更）との類比から来た。

FD：消費税ゼロか 1%かという争点を「家庭の問題」として理解しながら、自分の本音は「ガソリンと個人事業主の問題」にある。二つの関心軸が並走しており、妻と自分で「見てるところが違う」という言葉がそれを端的に示している。

【3. Part 2：消費税についての認知・考え】

根拠：「消費税の申告・インボイス対応で事務負担が増えた」と語った。また消費税と物価値上がりの混同については「全部別の要因があるのに全部まとめて『高い』ってなってる」と整理した。

推論：消費税を「払う側」だけでなく「納める側」としても経験している。インボイス制度の導入による事務負担増が、消費税議論に「下げる話は嬉しいが、こっち側の負担も見てほしい」という複層的な視点を加えている。

FD：食料品消費税の生活者の議論より、個人事業主として消費税制度の実務的な複雑さを経験していることが際立っている。「消費税を払う人」と「消費税を集めて納める人」の両側を生きしており、議論の見え方が他のパネルと質的に異なる。

【4. Part 3：高市総理への好感度・評価】

根拠：「お客さんの高市への反応は二極化している。自分はまだどういう人か見えてきていない」と述べた。メッセージは「個人事業主の声も聞いてください」。

推論：高市への評価が「お客さんの話の集積」として形成されており、自分の独立した評価軸が薄い。「二極化を見ている観察者」という立場が、確定的な評価表明を難しくしている。メッセージは消費税ではなくガソリン・インボイスという個人事業主の問題へと向かった。

FD：高市評価において「観察者」的な立場をとるのは、毎日多様な意見にさらされる職業の影響だ。強い賛否を出さず「まだ見えてきていない」という位置にとどまる。しかしメッセージは明確で、消費税議論の枠外にある個人事業主の問題への訴えが本音の核心だ。

【全体総括】

根拠：締めの一言は「消費税だけじゃない」。「消費税ゼロか1%かって議論してる間も、私は毎日ガソリン入れて走ってる。もっとたくさん問題を同時に動かしてほしい」と語った。

推論：安田にとって消費税ゼロか1%かという争点は「大事だが自分の優先事項ではない」話だ。家計として妻目線では関心があるが、個人事業主として自分目線ではガソリンとインボイスが上位にある。「話してみて、自分の本音がはっきりした」という締めの言葉は、このインタビューを通じて自分の関心の所在を再確認したことを示している。

FD：消費税0%か1%かという争点を正確に把握しながら、「消費税だけじゃない」という視点を持つパネルだ。個人事業主として消費税を「納める側」でもあるという経験が、生活者の議論を相対化している。「毎日お客さんの話を聞く仕事で、自分で話すことが少ない」という言葉が示すように、今日初めて自分の本音を整理した面がある。

発言録

導入 + Part 1：食料品消費税の議論への賛否と理由

M：安田さん、今日はよろしくお願いします。正解のない話ですので、思ったことをそのままお話しください。最近、食料品の消費税についての議論が出ていますが、ご存知でしたか？

安田博之：知ってますよ。お客さんとの話でよく出てきますから。ゼロにするって高市さんが言ってたやつでしょ。タクシーに乗ってくるお客さん、特に主婦の方とか年配の方が「消費税下がるといいわね」なんて話してて。私も「そうですねえ」って相槌打ちながら聞いてます。

M：お客さんの話を聞いて、安田さんご自身はどんな気持ちでしたか？

安田博之：うーん.....食料品の消費税って言われると、正直ピンとこなかったというか。私の場合、毎日の仕事でガソリン代がかかるじゃないですか。食費より燃料費の方が頭にある。でも妻から「食品の税金が下がるかも」って聞いて、それは家計的には助かるなとは思いました。

M：その話を聞いた時、どんな気持ちでしたか？

安田博之：お客さんから聞いてた時は「そういう話があるんだな」程度だったんですけど、妻から聞いてから「あ、これうちにも関係する話だ」ってなりました。子どもが16歳で食費もかかるし、妻がやりくりしてるのを見てるので。でも「本当に下がるのかな」という気持ちもあって。政治家の話って、どこまで信じていいかわからないんですよ、お客さんの話を聞いてると特に。

M：「どこまで信じていいかわからない」というのは、どういう意味ですか？

安田博之：タクシーって、いろんな人が乗ってくるじゃないですか。政治家の先生が乗ってくることもあるし、サラリーマンの人も、主婦の人も。聞いてると、同じニュースに対して全然違う解釈をしてて。「高市は本気だ」って言う人もいれば、「どうせできない」って言う人もいる。毎日そういう話を聞いてると、自分の判断が難しくなってくるんですよ。どっちが本当なんだろうって。

M：食料品消費税を1%にするという案が出ていますが、どう思いますか？

安田博之：1%か.....ゼロって言ってたのに、って感じですね。お客さんの中にも「あれ、ゼロじゃなかったの」って言ってた人がいましたよ。私個人としては、1%でも下がるなら助かるかなと思う。でも、食料品の消費税より、ガソリンの税金を何とかしてくれた方が正直ありがたい。私の場合は生活の中でガソリン代の比重が大きいので。

M：なぜ1%という案が出ているか、ご存知ですか？

安田博之：そこまでは知らないですね。何かシステムの話だとお客さんが言ってた気がしますが。

M：レジシステムの改修に時間がかかるためです。0%だと約1年、1%なら半年で実現できるそうです。それを聞いてどう思いますか？

安田博之：ああ、そういうことか。レジのシステムって変えるの大変なんですね。タクシーでもメーターの設定とか、料金改定のたびに変更作業があって大変なんです。それと似た話かな。理由があるならまあ仕方ないかなとは思いますが.....でもちゃんと説明してほしいですね、そういうことは。

M：半年早いなら、1%の方がいいということですか？

安田博之：早く動く方がいいとは思いますが。ただ.....私の本音を言うと、食料品の消費税が下がってもガソリンが高いままだと、私の家計への影響は限られるんですよ。毎月のガソリン代が何万もかかっている。そっちを何とかしてくれて気持ちの方が強くて。

M：まだ決まっていなそう。それを聞いてどう思いますか？

安田博之：まだなんですか。お客さんも「早く決めてほしい」って言う人が多いですよ。特に主婦のお客さんは。私もさっさと決めて、もし下がるなら早く下げてほしいとは思いますが。決まらない間も生活は続くので。

Part 2：消費税についての認知・考え

M：消費税についての知識や情報、考えを自由にお話してください。

安田博之：消費税ですかね.....私がいちばん感じるのは、仕事の話になりますけど、ガソリンと消費税の組み合わせの話で。ガソリンって消費税とガソリン税が両方かかっているじゃないですか。「税金に税金がかかっている」って話をお客さんから聞いて、「そういうものなのか」って思ったことがあります。食料品とは別の話ですけど。

M：その情報はどこから？

安田博之：お客さんからですね。いろんな話を聞くので。経済に詳しくないお客さんが話してくれたりして、「へえ」と思うことがよくあります。自分で調べるタイプじゃないので、人から聞いて知ることが多いです。

M：実感として感じていることはありますか？

安田博之：物価は上がってますよね。食材も高いし、外食も高くなった。お客さんが「また値上げか」って言うのをよく聞きます。ただ私の場合、食費より燃料費の方が身に沁みて。ガソリンが1リットル10円上がるだけで、月の収支が全然変わる。食料品の消費税の話より、ガソリン価格の話の方が私にはリアルです。

M：消費税と物価の値上がりは別の話だと思いますか？

安田博之：そうですね.....ちょっとごちゃごちゃになってる気がします。食品が高くなったのって消費税が上がったから？って最初思ったんですけど、食品の消費税は変わっていないって聞いて。じゃあ物が値上がりしてるってことか、と。ガソリンは円安とか原油の話が出てくるし。全部別の要因があるんですよね。でも全部まとめて「高い」ってなってる。

M：消費税について、他に気になることはありますか？

安田博之：個人タクシーって、消費税の申告もしなきゃいけないんですよ。売上に対して消費税を納める。インボイス制度が始まってから、事務作業が増えて正直面倒で。お客さんからもらう運賃に消費税が含まれてて、それを申告して納める。消費税って、払う側だけじゃなくて、こっち側も大変なんだってことは実感してます。

M：インボイス制度が始まってから、どう変わりましたか？

安田博之：以前は大雑把にやれてたのが、細かい記録が必要になって。税理士さんに頼む費用も増えたし。小さい個人事業主にとっては、制度が複雑になればなるほど負担が増える。消費税を「下げる」話は嬉しいんですけど、こっち側の事務負担も何とかしてほしいなと思いますよ。

Part 3：高市総理への好感度・評価

M：高市総理が就任してから、印象は変わりましたか？

安田博之：お客さんの話を聞いてると、高市さんへの反応って結構二極化してるんですよ。「高市さんはいい」って言う人と、「どうせ変わらない」って言う人と。私自身は.....女性の総理が初めてってことと、消費税ゼロって言ったことは印象に残ってます。就任後は、まだどういう人なのか見えてきてないかなという感じです。

M：安田さんの立場——個人タクシーで生計を立てているお父さんという立場から見て、高市総理について気になることはありますか？

安田博之：個人事業主への目線があるかどうかですね。大企業とか会社員の話はよく出てくるけど、私みたいな個人でやってる人間への政策って、あまり聞こえてこない。インボイスの話もそうだし、ガソリン税の話もそうだし。働いてる人の全員が会社員じゃないのに、そっちへの目線が薄い気がする。

M：消費税の問題での高市総理の姿勢、どう見えますか？

安田博之：ゼロって言ったのに 1%になりそうなのは.....まあ、お客さんの話を聞いてると「そういうもんだよ」って言う人が多いですね。私も「そういうもんかな」という感じで。ただ、さっき聞いたレジのシステムの理由みたいなことは、ちゃんと言ってほしいと思います。理由を言わずに変わってると、「また裏切られた」って感じる人が多いんですよ。お客さんの話を聞いてるとそれは感じます。

M：今の高市総理に一言メッセージを送るとしたら、何と言いますか？

安田博之：「個人事業主の声も聞いてください」ですね。消費税の話も大事だけど、ガソリン税とかインボイスとか、個人で仕事してる人間には切実な問題がたくさんある。大きな会社の話ばかりじゃなくて、私みたいに一人でやってる人間のことも政策に入れてほしい。

M：なぜそのメッセージを伝えたいのですか？

安田博之：見えてないと思うからですよ。私みたいな個人タクシーって、統計で出てくる数字には入ってるでしょうけど、実態はあまり知られてないと思う。毎日何十人ものお客さんと話して

、みんなの生活を運んでる仕事なんですけどね。その仕事が成り立つかどうかって、消費税より燃料費の方がよっぽど大事で。そこを見てほしいです。

締め

M：奥様とこういった消費税や政治の話をすることはありますか？

安田博之：しますよ。妻が「消費税下がるといいね」って言ってて、私が「ガソリンも下がってくれないかな」って言って、噛み合わないことが多いですけど（笑）。妻は食費の目線で見えて、私は燃料費の目線で見てる。どっちも大事なんですけど、見てるところが違うんですよね。子どもも高校生で食費かかるので、妻の言いたいことはわかります。

M：今日の話を通じて、一言でまとめると何でしょう？

安田博之：「消費税だけじゃない」かな。

M：なぜそう思いますか？

安田博之：食料品の消費税が下がるのは、家庭としては助かります。でも私の仕事と生活にとっては、ガソリン代やインボイスの話の方が大きくて。消費税ゼロか1%かって議論してる間も、私は毎日ガソリン入れて走ってる。政治ってひとつのことしか議論できないのかなって思うことがある。もっとたくさん問題を同時に動かしてほしいんですよ。

M：今日話して、言い忘れたことや改めて思ったことはありますか？

安田博之：タクシーって、いろんな人の話を聞く仕事なんですよ。今日みたいに自分で話すことって少なく、いつも聞く側なので。話してみて、自分の本音はガソリンと個人事業主の問題なんだなって改めて感じました。消費税の議論は大事だと思うし、下がれば助かる。でも私が本当に困ってることは別にある。今日はそれがはっきりしました。

No.10 「財源の絵を見せてください」——イギリス在住経験を持つ 39 歳外資コンサルの、方向は正しいが評価は保留という立場

対象者プロフィール

氏名	松尾 健太郎
居住地	東京都渋谷区
年齢・性別	39 歳・男性
職業	外資系コンサルタント
家族構成	妻（外資系会社員）・子なし
政治関心/知識	中／高

3 分ブリーフィング

【1. 導入+Part 1：食料品消費税の議論への賛否と理由】

根拠：「財源をどうするかが問題で。消費税を下げる分の財源手当がないと、いずれ他で増税になるか、社会保障が削られる。そこが見えないので、単純に喜べない」と述べた。レジシステムの理由に「システムの合理性はあると思います。ただ、それだけが理由なのか、財政的な理由もあるのかが気になります。本当の理由が『財源確保』なら、それを正直に言ってほしい」と答えた。

推論：外資系コンサルタントとして財務分析を職業としているため、「減税は良いこと」という単純な評価軸を持っていない。レジシステムの理由は部分的に納得するが、「財政的な理由も含めて正直に言ってほしい」という留保がつく。政策の整合性と透明性を評価軸にしており、一般的な生活者とは異なる評価の枠組みを持つ。

FD：松尾にとって消費税 1%案への評価は「財源の説明がセットで出るまで保留」という状態だ。方向性は正しいと認める一方、財源の整合性なしには「人気取り政策」の域を出ないという評価軸がある。この評価保留は生活への切実さの欠如と、財政への職業的な知識の両方から来ている。

【2. Part 2：消費税についての認知・考え】

根拠：「イギリスで 2 年勤務したことがあって、食料品が非課税の生活を経験しました。日本に戻った時に『食品にも税がかかるのか』と改めて意識しました」と述べた。「我が家の食費への消費税は生活を圧迫するほどではない。ただ低所得世帯や子育て世代には意味がある政策だと分析しています」と語った。

推論：海外在住経験があり、消費税のない食料品生活を体験している唯一の参照点を持つ。個人の家計への影響が限定的であるため、政策の評価が「自分への効果」ではなく「社会全体への効果」の分析として行われる。これは生活への切実さを欠く代わりに、客観的な政策評価の視点を持つことを意味する。

FD：松尾における消費税は「個人の生活よりも政策の設計問題」として見えている。実感が薄い分だけ、国際比較や財政論という知識の枠組みで評価する。「賛成はしている、ただ財源問題と制度設計がセットで示されないと継続性がない」という言葉に、切実さのない代わりに精度の高い評価が表れている。

【3. Part 3：高市総理への好感度・評価】

根拠：「消費税の公約がすぐに変容したことで、『政治的な計算が先に来ている』という印象が少し強まりました」と述べた。「政策の費用対効果と財源の整合性が示されているかどうかです」がコンサルとしての評価軸だと語った。「財源の絵を見せてください」がメッセージだと答えた。

推論：高市への評価は「財源の整合性と透明性」という一点に集約されている。消費税公約の変容を「政治的な計算」として評価する視点は、政策の合理性を重視する職業的な習慣から来ている。「財源の絵」という言葉は、コンサルタントとして施策の費用対効果をセットで分析する仕事の語彙がそのまま政治への要求になっている。

FD：松尾の高市評価は「方向性を認めつつ、財源の説明なしには評価を確定できない」という保留状態だ。「財源の絵を見せてください」というメッセージは、減税の恩恵より政策の持続可能性を重視する立場の表明であり、この人物が政治に求める「誠実さ」の定義が財政的な透明性にあることを示している。

【全体総括】

根拠：「方向性は正しいが、財源の説明がないと評価できない」と締めた。「日本がそこ（食料品税率引き下げ）に近づくことは良いことだと思っている。ただ、インパクト重視の発表の仕方ではなく、制度の全体設計を丁寧に説明してほしい」と述べた。

推論：松尾を貫く行動原理は「政策の整合性と財源の透明性で評価する」だ。海外経験と財務の職業的知識が、「減税は良いこと」という感情的な受け取り方を排除している。個人の生活への切実さがない代わりに、政策の設計と財源問題を正確に問う能力を持つ。

FD：松尾健太郎を特徴づけるのは「イギリスでの非課税食料品生活経験と財務分析の職業知識が、消費税政策への評価を保留状態にしている外資系コンサルタント」だ。「財源の絵を見せてください」という要求は、この調査の中で最も高い政策知識から発せられた評価保留であり、「方向は正しい、しかし評価するには情報が足りない」という立場を端的に示している。

発言録

導入 + Part 1：食料品消費税の議論への賛否と理由

M：今日はお時間をいただきありがとうございます。正解のない対話ですので、思ったことをそのままお話しいただければ大丈夫です。最近の生活はいかがですか？

松尾健太郎：仕事が忙しくて正直余裕がないですが、妻と2人で収入が安定しているので生活自体は落ち着いています。物価が上がっているのは感じますが、食費への影響は限定的で、正直そこまで切迫していないですね。

M：食料品消費税の議論をご存知でしたか？

松尾健太郎：知っています。高市総理の食料品消費税ゼロ公約と、最近1%案が浮上しているという話も知っています。

M：知っていることを教えてください。

松尾健太郎：「2年間ゼロにする」という公約があって、政府内でレジシステムの問題から1%案が出ているという流れは把握しています。海外でもゼロ税率というのはあって——イギリスは食料品が非課税ですし、欧州各国も軽減税率の設定がバラバラです。日本が食料品を下げることは国際的に見て珍しくはないと思っています。

M：その話を聞いた時、どんな気持ちでしたか？

松尾健太郎：政策の方向性としては正しいと思っています。ただ、財源をどうするかが問題で。消費税を下げる分の財源手当がないと、いずれ他で増税になるか、社会保障が削られる。そこが見えないので、単純に喜べないという感じです。

M：なぜそう思いましたか？

松尾健太郎：コンサルの仕事で財務分析をしているので、税収と支出のバランスには敏感で。「減税は良いこと」という単純な話ではなく、その後の財源設計が重要だと思っています。

M：食料品消費税を1%にするという案が出ていますが、どう思いますか？

松尾健太郎：ゼロより現実的な落としどころだとは思いますが。ただ——1%という数字に政策的な合理性があるのか、あるいは妥協の産物なのかが気になります。

M：なぜそう思いますか？

松尾健太郎：ゼロと1%では、制度設計上の扱いが全然違います。ゼロは非課税と混同されやすいし、システムのにも特殊な扱いが必要になる。1%は課税のまま税率を下げる形なので、仕組みとしてはシンプルです。コンサルの立場から見ると1%の方が設計しやすい。

M：ゼロにするという公約があったのですが、覚えていますか？

松尾健太郎：覚えています。選挙向けのインパクト重視だと当初から感じていました。

M：驚きましたか？

松尾健太郎：驚かなかったです。公約の実現可能性を最初から低めに見ていたの。「ゼロ」という言葉のインパクトと、実際の実施コストのギャップは大きいからです。

M：1%になったとしたら評価しますか？

松尾健太郎：評価は、財源の説明次第です。減税の効果と財源手当をセットで示してくれれば評価できる。そこがないと「人気取り政策」の印象は拭えません。

M：0にできない理由について知りたいですか？

松尾健太郎：もちろん。レジシステムの問題は把握していますが、それ以外にも財政的な制約があるはずで、そちらの説明も必要だと思っています。

M：なぜ1%という議論が出ているか、ご存知ですか？

松尾健太郎：レジシステムの改修時間の問題ですよね。ゼロは約1年、1%なら半年で実装できるという話は知っています。

M：それを聞いてどう思いますか？

松尾健太郎：システムの合理性はあると思います。ただ、それだけが理由なのか、財政的な理由もあるのかが気になります。本当の理由が「財源確保」なら、それを正直に言ってほしい。

M：半年早いなら、1%になる方がいいということですか？

松尾健太郎：システム面だけで言えばそうです。ただ、政策の評価は実施タイミングより中身の設計と財源の整合性だと思っているので、「早ければいい」という単純な話ではないという感覚です。

M：まだ決まったわけではありません。今も検討中のようです。それを聞いてどう思いますか？

松尾健太郎：財源の絵を描いてから決めてほしいですね。タイミングより設計の方が重要なので。

Part 2：消費税についての認知・考え（自由発話）

M：消費税についてはどのような知識や情報をお持ちですか。また、どのように考えていますか？

松尾健太郎：日本の消費税制度はかなり詳しく把握しています。現行の軽減税率（食料品8%・標準税率10%）も、欧州各国と比較すると税率は低めで、かつ還付の仕組みが消費者向けではなく事業者向けになっている。消費税の逆進性——低所得者への負担が相対的に重いという問題も理解しています。食料品の税率を下げることは逆進性の緩和になりますが、財源問題は別に解決しなければならない。

M：まずご家族の食費・生活費という立場から、どう感じますか？

松尾健太郎：正直に言うと、我が家の食費への消費税は生活を圧迫するほどではないです。妻と2人で食費は月8～10万円くらいですが、それが8%か1%かで変わる金額は、我が家の収入水準では大きな差ではない。

M：その情報はどこから？

松尾健太郎：仕事での財務分析と、海外在住時の経験です。イギリスで2年勤務したことがあって、食料品が非課税の生活を経験しました。日本に戻った時に「食品にも税がかかるのか」と改めて意識しました。

M：何か実感として感じているものはありますか？

松尾健太郎：個人の生活レベルでは実感は薄いです。ただ——政策効果として見ると、低所得世帯や子育て世代には意味がある政策だと思っています。自分には直接的な切迫感はないですが、社会全体の消費底上げには効果があると分析しています。

M：それについてはどう思いますか？

松尾健太郎：賛成はしています。ただ、財源問題と制度設計がセットで示されないと、継続性がない。ポピュリズム的な政策にならないよう、きちんと設計してほしいと思っています。

Part 3：高市総理への好感度・評価

M：高市総理が就任してから、印象は変わりましたか？

松尾健太郎：就任前は「経済政策に一定の見識がある」という印象でした。就任後は——消費税の公約がすぐに変容したことで、「政治的な計算が先に来ている」という印象が少し強まりました。

M：コンサルタントとして働かれている立場から見ると、高市総理についてどんなことが気になりますか？

松尾健太郎：政策の費用対効果と財源の整合性が示されているかどうかです。コンサルの仕事では、施策の効果とコストを必ずセットで分析します。消費税の話も「下げてどう財源を埋めるか」がセットで出てくるかどうかを見ています。今のところ、そこが見えていない。

M：消費税の問題での高市総理の姿勢、どう見えますか？

松尾健太郎：方向性は悪くないと思っています。ただ、財源の説明が足りない。「ゼロから1%に変わった理由がシステムのコスト」というのは一部の理由で、財政的な制約も含めて正直に話してほしい。

M：今の高市総理に何か一言メッセージを送るとしたら、なんと言いますか？

松尾健太郎：「財源の絵を見せてください」ですね。

M：なぜそう言いたいのですか？

松尾健太郎：減税の恩恵より、その後の持続可能性の方が重要だと思っているからです。消費税を下げることで他の税が上がったり社会保障が削られたりすれば、トータルでは国民の負担が増える可能性がある。その全体像を見せてほしい。

締め

M：奥様とこういう話をすることはありますか？

松尾健太郎：します。妻も経済やビジネスに詳しいので、二人でよく議論します。今日の財源の話も、「財源の説明なしに減税を評価するのは難しい」という点では一致しています。

M：今日の話を通じて、一言でまとめると何でしょう？

松尾健太郎：「方向性は正しいが、財源の説明がないと評価できない」ですかね。

M：なぜそう思いますか？

松尾健太郎：今日の話を通じて、レジシステムの理由は一定の合理性があると確認できました。ただ財政的な制約についての説明がないと、政策としての評価は保留です。消費税を下げること自体は逆進性の緩和に効果があるので、財源をきちんと示した上で進めてほしいと思います。

M：言い忘れたことや、改めて思ったことがあれば。

松尾健太郎：海外の事例と比較すると、食料品の消費税を下げること自体は先進国では標準的な政策です。日本がそこに近づくことは良いことだと思っています。ただ、インパクト重視の発表の仕方ではなく、制度の全体設計を丁寧に説明してほしい。それが政策への信頼につながります。

M：ありがとうございました。

No.11 「育休中に始まってくれば 1%でも十分です」——31 歳 IT 系の「レジ改修なら仕事で実感があります」

対象者プロフィール

氏名	石川 美子
居住地	東京都中野区
年齢・性別	31 歳・女性
職業	IT 系会社員（育休中）
家族構成	夫（会社員）・子 1 人（0 歳）
政治関心/知識	中／中

3 分ブリーフィング

【1. 導入+Part 1：食料品消費税の議論への賛否と理由】

根拠：「育休に入って初めてスーパーで買い物をするようになって、食費って結構かかるんだなと実感しています」と述べた。1%案に「1%でも下がるなら助かります」と答えた。レジシステムの理由に「IT 系の仕事をしているのでシステムの改修がどれだけ大変かはよくわかります。半年早く実現できるなら 1%の方がいいですね」と応じた。

推論：育休に入るまで消費税を「自分ごと」と感じていなかった。買い物を担うようになったことで初めて食費の重さに気づき、消費税への関心が生まれた。IT エンジニアとしてのレジ改修への理解は即座で、感情論より論理的な理由で納得している。

FD：石川にとって消費税 1%案への賛成は「育休という特定の時期に収入が下がるタイミングで、少しでも早く実現してほしい」という切実さから来ている。「ゼロにこだわるより半年早く 1%で始まる方がいい」という判断は、職業的な知識が根拠になっており感情より論理で動いている。

【2. Part 2：消費税についての認知・考え】

根拠：「育休前は自分で買い物することが少なかったのですが、今は毎日スーパーに行くのでレシートを見ると消費税の金額が結構あるなと実感しています」と述べた。「育休で収入が 7 割くらいに減っているのに、出費が増えた感じがして」と語った。

推論：消費税を体験として意識し始めたのは育休後という生活の変化点からだ。収入減と支出増という二重の圧力が消費税への関心を高めている。知識として税率は把握しているが、体験としての消費税は育休後に初めて獲得したものだ。

FD：石川における消費税は「育休という人生の変化点で初めて実感した問題」だ。仕事では意識していなかった食費への消費税を、買い物担当になることで初めて体験した。この生活の変化が消費税への当事者感を作っている。

【3. Part 3：高市総理への好感度・評価】

根拠：「消費税の話もそうですが、保育園の問題も気になります」と述べた。「育休が終わるまでに実現してください」がメッセージだと答えた。「育休中が一番収入が下がる時期なので、ちょうど今消費税が下がってくれば一番助かります」と語った。

推論：高市への評価は消費税の実現タイミングが「育休期間中」という個人の時間軸で測られている。政治への関心は「今の自分の状況に何が役立つか」という実用的な軸で動いており、保育園問題との連動で評価されている。

FD：石川の高市評価は「今の育休という時期に何が実現するか」という時間的な切実さで測られている。「育休が終わるまでに実現してください」という言葉は、政策への評価が自分の人生のフェーズと連動していることを示している。

【全体総括】

根拠：「レジシステムの話聞いて、理由があるなら納得できます。ゼロにこだわるより、半年早く 1%で始まる方が私には助かる」と締めた。「消費税の話、育休に入るまで自分ごとじゃなかった」と述べた。

推論：石川を貫く行動原理は「生活の変化が当事者感を生み、職業的知識が論理的な納得につながる」だ。育休前は他人ごとだった消費税が、買い物担当になることで初めて自分ごとになった。IT エンジニアとしての知識がレジ改修への理解を促し、感情論より根拠で判断する構造がある。

FD：石川美子の特徴づけるのは「育休に入るまで消費税は他人ごとだったが、買い物担当になることで初めて当事者になり、IT の知識でレジ改修に即座に納得した 31 歳の現実的な賛成」だ。「育休が終わるまでに 1%でも始まってほしい」という言葉は、政策への評価が自分の人生のフェーズと連動しており、ゼロにこだわるより早期実現を優先する明確な判断を示している。

発言録

導入 + Part 1：食料品消費税の議論への賛否と理由

M：今日はお時間をいただきありがとうございます。正解のない対話ですので、思ったことをそのままお話しいただければ大丈夫です。最近の生活はいかがですか？

石川美子：育休中で子どもが生まれたばかりなので、毎日育児でバタバタしています。育休に入って初めてスーパーで買い物をするようになって、食費って結構かかるんだなと実感しています。仕事に戻ったら保育園に入れないといけないので、待機児童の問題もすごく気になっています。

M：食料品消費税の議論をご存知でしたか？

石川美子：知っています。高市総理が食料品の消費税をゼロにするとおっしゃっていたのは聞きました。最近 1%という話も出ているんですよね。

M：知っていることを教えてください。

石川美子：育休中で急に買い物をするようになって、消費税って思ったよりかかるんだなと気づいて。それで興味が出てきたんです。

M：その話を聞いた時、どんな気持ちでしたか？

石川美子：実現したら助かるなと思いました。でも「本当にゼロになるのかな」という気持ちも正直ありました。

M：なぜそう思いましたか？

石川美子：消費税って上がることはあっても下がることはあまりなかったもので、そんな大きなことが実現するのかなと。

M：食料品消費税を 1%にするという案が出ていますが、どう思いますか？

石川美子：ゼロよりは少なくて残念ですけど.....でも 1%でも下がるなら助かります。育休中は収入が減るので、少しでも食費が安くなれば。

M：なぜそう思いますか？

石川美子：育休に入って、食費が生活費の中でこんなに大きな割合を占めるんだって初めて気づいて。仕事をしていたときはあまり意識していなかったのです。

M：ゼロにするという公約があったのですが、覚えていますか？

石川美子：覚えています。

M：驚きましたか？

石川美子：「やっぱりゼロは難しかったか」という感じです。驚いたというより、「そうか」という感じで。

M：1%になったとしたら評価しますか？

石川美子：育休中に実現してくれれば嬉しいです。ゼロじゃなくても、1%でも下がるなら。

M：0 にできない理由について知りたいですか？

石川美子：知りたいです。なぜ 1%になったのか、ちゃんと理由があるなら納得したい。

M：なぜ 1%という議論が出ているか、ご存知ですか？

石川美子：知らないです。

M：実は、スーパーなどのレジシステムを税率ゼロに対応させるための改修に約 1 年かかるためです。0%だと 1 年、1%なら半年で実現できるそうです。それを聞いてどう思いますか？

石川美子：ああ、そういう理由ですか。IT 系の仕事をしているのでシステムの改修がどれだけ大変かはよくわかります。全国のレジを一斉に対応させるとなれば、確かに時間がかかる。半年早く実現できるなら 1%の方がいいですね。

M：半年早いなら、1%になる方がいいということですか？

石川美子：そうです。育休が終わるまでに始まってくれば、1%でも十分助かります。

M：まだ決まったわけではありません。今も検討中のようです。それを聞いてどう思いますか？

石川美子：早く決めてほしいですね。育休中に実現してくれると一番嬉しいので。

Part 2：消費税についての認知・考え（自由発話）

M：消費税についてはどのような知識や情報をお持ちですか。また、どのように考えていますか？

石川美子：食料品が 8%で、それ以外は 10%というのは知っています。育休前は自分で買い物することが少なかったのですが、今は毎日スーパーに行くのでレシートを見ると消費税の金額が結構あると実感しています。

M：まずご家族の食費・生活費という立場から、どう感じますか？

石川美子：毎月の食費が予想より多くて。子どもが生まれてミルクやオムツもかかりますし、自分たちの食費も思ったより高い。育休で収入が 7 割くらいに減っているのに、出費が増えた感じがして。

M：その情報はどこから？

石川美子：レシートを見て気づきました。あとは SNS で育休中のお母さんたちが食費の話をしているのを見て。

M：何か実感として感じているものはありますか？

石川美子：食材が高くなったのは感じます。消費税のせいなのか物価なのか区別はつかないですけど、全体的に高くなっているのは実感しています。

M：それについてはどう思いますか？

石川美子：育休中は収入が減るのに出費は増える。消費税が下がれば少し楽になるので、早く決ましてほしいです。

Part 3：高市総理への好感度・評価

M：高市総理が就任してから、印象は変わりましたか？

石川美子：就任前は経済や安全保障に強い人というイメージがありました。就任後は消費税の話が注目されて、「本当にやるんだ」と思っていたら 1%案が出て、少し複雑な気持ちです。

M：育休中のお母さんの立場から見ると、高市総理についてどんなことが気になりますか？

石川美子：消費税の話もそうですが、保育園の問題も気になります。育休が終わったら保育園に入れないといけないので。消費税が下がっても保育園に入れなかったら.....両方やってほしいです。

M：消費税の問題での高市総理の姿勢、どう見えますか？

石川美子：公約を出してくれたことは評価します。1%案になったことは残念ですが、今日のシステムの理由を聞いて、それなら仕方ないかなと思いました。

M：今の高市総理に何か一言メッセージを送るとしたらなんと言いますか？

石川美子：「育休が終わるまでに実現してください」ですかね。

M：なぜそう言いたいのですか？

石川美子：育休中が一番収入が下がる時期なので。ちょうど今、消費税が下がってくれば一番助かります。

締め

M：ご主人とこういう話をすることはありますか？

石川美子：します。夫も「1%になるかもって言ってたね」と話していました。夫は「保育園の問題の方が切実だよね」とも言っていますが。

M：今日の話を通じて、一言でまとめると何でしょう？

石川美子：「育休が終わるまでに 1%でも始まってほしい」ですかね。

M：なぜそう思いますか？

石川美子：レジシステムの話聞いて、理由があるなら納得できます。ゼロにこだわるより、半年早く 1%で始まる方が私には助かるので。

M：言い忘れたことや、改めて思ったことがあれば。

石川美子：消費税の話、育休に入るまで自分ごとじゃなかったです。スーパーで買い物するようになって初めて実感しました。IT 系の仕事をしているので、レジシステムの改修が大変なのはよくわかります。

M：ありがとうございました。

No.12 「ゼロにこだわって1年待つより1%で半年早い方が助かる――保育料の重さを抱える小さな子2人の母35歳」

対象者プロフィール

氏名	村上 裕子
居住地	東京都文京区
年齢・性別	35歳・女性
職業	大学職員
家族構成	夫（研究職）・子2人（7歳・4歳）
政治関心/知識	高／高

3分ブリーフィング

【1. 導入＋Part 1：食料品消費税の議論への賛否と理由】

根拠：「ゼロにこだわって1年待つより、1%で半年早い方が実際の生活には良い」と述べ、「子どもが小さい今の時期に早く始まってほしいので1%で半年早いなら助かります」と語った。食費を月8～9万円と把握しており、「1%下がれば年間1万円程度の節約になる」と計算した。

推論：7歳・4歳という子どもの小ささが「今の時期に早く」という時間軸の根拠になっている。保育料・習い事など食費以外の出費が重なる時期であることが、食費節約への動機の背景にある。ゼロへの驚きはなく、システムの問題という説明も「確かに時間がかかりますね」と自然に受け入れた。

FD：村上にとって消費税1%案への賛成は、保育料や習い事費用が重なる小さな子どもを育てる母親として「今の時期に少しでも早く」という切実さから来ている。ゼロより半年早い1%という選択を、生活者として合理的に評価した判断だ。

【2. Part 2：消費税についての認知・考え】

根拠：「保育料や教育費の方が今の家計の大きな課題です」と述べた。「食費が少し下がれば、その分を他に回せますから助かります」と続け、「保育料や教育費の支援の方が日常的に切実です」と語った。

推論：食料品消費税への関心は持ちながら、家計の最大の重荷として保育料を位置づけている。消費税の節約額（年間1万円程度）と保育料の重さを天秤にかけており、消費税への評価が相対的なものであることを自覚している。

FD：村上における消費税は「保育料という最重課題の隣にある、ありがたいが部分的な解決」として位置づけられている。食費節約の恩恵を否定しないが、子育て支援という大きな文脈の中に消費税問題が埋め込まれている。

【3. Part 3：高市総理への好感度・評価】

根拠：「子育て支援がどうなるかが一番気になります。保育料の問題は今の生活で一番重い課題なので」と述べた。「食料品の消費税が下がることは助かります。でも子育て世帯には保育料や教育費の支援の方が日常的に切実です」と続けた。

推論：高市総理への評価は食料品消費税の方向性への好意的受け入れだが、「でも」という言葉で保育料・子育て支援への要求が続く。消費税への賛成と子育て支援への要求が並列しており、評価は部分的だ。

FD：村上の高市評価は「消費税の方向性は良い、でも保育料・子育て支援の充実の方が切実」という子育て中の母親としての正直な複層評価だ。食費節約より保育料支援という優先順位が明確に出ている。

【全体総括】

根拠：「ゼロにこだわって1年待つより1%で半年早い方が、小さい子どもを育てる今の家計には助かる」と締めた。「保育料の問題は今の生活で一番重い課題」という言葉が家計の優先順位を示している。

推論：村上を貫く行動原理は「7歳・4歳の子どもを育てる母親として保育料が最重課題にある中で、食費が少しでも早く下がることへの実利として1%案を支持し、子育て支援全体への要求も合わせて持つ」だ。保育料という最大の課題の隣に消費税問題が置かれることで、評価が「部分的な歓迎」になっている。

FD：村上裕子の特徴づけるのは「保育料が家計の最大の重荷にある中で、食費節約への恩恵をありがたく受け取りながら、ゼロより半年早い1%の方が今の生活には良いと判断した35歳の子育て母親」だ。「でも子育て世帯には保育料や教育費の支援の方が日常的に切実です」という言葉に、食費節約を相対化する子育て家庭の本音が出ている。

発言録

導入 + Part 1：食料品消費税の議論への賛否と理由

M：今日はお時間をいただきありがとうございます。正解のない対話ですので、思ったことをそのままお話しいただければ大丈夫です。最近の生活はいかがですか？

村上裕子：大学で事務の仕事をしています。夫が研究職で共働きです。子どもが7歳と4歳で、毎日保育園の送り迎えと仕事でばたばたしています。文京区に住んでいます。

M：食料品消費税の議論をご存知でしたか？

村上裕子：知っています。高市総理の食料品消費税ゼロの公約も、最近の1%案も把握しています。

M：まずご家族の食費という立場からはいかがですか？

村上裕子：食費は月 8～9 万円くらいかかっています。子どもが 7 歳と 4 歳でまだかかりますし、物価も上がっているので以前より増えています。消費税が下がれば助かります。

M：食料品消費税を 1%にするという案が出ていますが、どう思いますか？

村上裕子：良いと思います。1%下がれば年間で 1 万円程度の節約になりますが、保育料や習い事の費用も重なっているので、食費が少し下がれば助かります。

M：なぜそう思いますか？

村上裕子：子どもが小さくて保育料がまだかかっていますし、習い事も始まってきています。食費以外の出費も多い時期なので、食費が少しでも下がれば家計にゆとりができます。

M：ゼロにするという公約があったのですが、覚えていますか？

村上裕子：覚えています。

M：驚きましたか、1%になったと聞いて？

村上裕子：驚かないですね。ゼロにするには何か難しい理由があるんだろうと思っていました。

M：1%になったとしたら評価しますか？

村上裕子：評価します。

M：0 にできない理由について知りたいですか？

村上裕子：知りたいです。

M：実は、スーパーなどのレジシステムを税率ゼロに対応させるための改修に約 1 年かかるためです。0%だと 1 年、1%なら半年で実現できるそうです。それを聞いてどう思いますか？

村上裕子：そういう理由だったんですね。全国のスーパーのレジを変えとなれば確かに時間がかかりますね。子どもが小さい今の時期に早く始まってほしいので、1%で半年早いなら、その方が家計としては助かります。ゼロにこだわって 1 年待つより、1%で半年早い方が実際の生活には良いです。

M：半年早いなら、1%になる方がいいということですか？

村上裕子：そうですね。早い方が助かります。

M：まだ決まったわけではありません。今も検討中のようです。それを聞いてどう思いますか？

村上裕子：早く確定してほしいです。子どもが小さい今の時期に早く始まってほしいので。

Part 2：消費税についての認知・考え（自由発話）

M：消費税についてはどのような知識や情報をお持ちですか。また、どのように考えていますか？

村上裕子：食料品が 8%で他が 10%というのは知っています。物価が上がっているのを感じているので、少しでも下がれば助かります。

M：まずご家族の食費という立場からはいかがですか？

村上裕子：月 8～9 万円くらいかかっています。1%下がれば年間 1 万円程度の節約になりますが、保育料や教育費の方が今の家計の大きな課題です。でも食費が少し下がれば、その分を他に回せますから助かります。

M：その情報はどこから？

村上裕子：自分で家計を管理しているので大体把握しています。ニュースも見えています。

M：何か実感として感じているものはありますか？

村上裕子：物価が上がっているのは感じています。スーパーで同じものが前より高くなっているのがわかります。保育料も上がっていますし、子育てのコスト全体が増えている感覚があります。

M：それについてはどう思いますか？

村上裕子：消費税が少しでも下がれば助かります。ただ保育料や教育費の方が家計への影響が大きいのので、そちらの支援も充実してほしいというのが本音です。

Part 3：高市総理への好感度・評価

M：高市総理が就任してから、印象は変わりましたか？

村上裕子：就任前から経済政策に積極的という印象でした。食料品消費税の話は方向性として良いと思います。今日の話でシステムの問題だとわかって評価が高まりました。

M：7 歳と 4 歳のお子さんを持つ母親という立場から見ると、高市総理についてどんなことが気になりますか？

村上裕子：子育て支援がどうなるかが一番気になります。保育料の問題は今の生活で一番重い課題なので。食料品の消費税が下がるのはありがたいですが、保育料の支援や子育て費用の補助が充実してほしいです。

M：消費税の問題での高市総理の姿勢、どう見えますか？

村上裕子：方向性は良いと思います。システムの問題で 1%になったという理由は今日わかりました。早く確定してほしいです。

M：今の高市総理に何か一言メッセージを送るとしたらなんと言いますか？

村上裕子：「食料品の消費税が下がることは助かります。でも子育て世帯には保育料や教育費の支援の方が日常的に切実です。そちらも合わせてお願いします」ですかね。

M：なぜそう言いたいのですか？

村上裕子：7歳と4歳の子どもがいて、保育料がまだかかっています。食費が下がるのは助かりますが、毎月の保育料の重さの方が大きい。子育て支援全体を充実してほしいです。

締め

M：ご主人とこういう話をすることはありますか？

村上裕子：します。夫も「食費が下がれば助かるね」と言っています。夫は研究職で保育料や子どもの費用を気にしているので、消費税の話にも関心があります。

M：今日の話を通じて、一言でまとめると何でしょう？

村上裕子：「ゼロにこだわって1年待つより1%で半年早い方が、小さい子どもを育てる今の家計には助かる」ですかね。

M：なぜそう思いますか？

村上裕子：子どもが小さい今の時期に食費が少しでも下がれば助かります。システムの問題で半年早く始まるなら、1%の方が家計として良い選択です。

M：言い忘れたことや、改めて思ったことがあれば。

村上裕子：食料品の消費税が下がることは良いことです。保育料や子育て支援も合わせて充実してほしいです。

M：ありがとうございました。

No.13 「消費税 1%でも下がれば、困っているご家庭に早く届いてほしい」――塾代に比べたら誤差の範囲、と言える 41 歳専業主婦

対象者プロフィール

氏名	田口 敦子
居住地	東京都品川区
年齢・性別	41 歳・女性
職業	専業主婦
家族構成	夫（大企業管理職）・子 2 人（14 歳・10 歳）
政治関心/知識	低/低

3 分ブリーフィング

【1. 導入＋Part 1：食料品消費税の議論への賛否と理由】

根拠：「食費より教育費の方が家計の大きなテーマ」と述べた。1%案に「1%でも下がるなら、下がった方がいいとは思いますが。うちはそれほど困っていないのですが、大変な家庭には嬉しい話なんじゃないかと」と答えた。レジシステムの理由に「じゃあ 1%の方が早く実現できるなら、その方がいいと思います。困っているご家庭には早い方がいいでしょうし」と応じた。

推論：消費税議論を「自分ごと」ではなく「困っている他の家庭のこと」として評価している。夫の収入が高く食費への消費税が切実ではないため、賛否の評価軸が「自分への影響」ではなく「社会全体への影響」に向いている。

FD：田口にとって消費税 1%案は「自分には切実ではないが、困っている人には良い話」という他者視点での賛成だ。当事者としての切実さが薄く、評価の軸が「うちは恵まれているので」という自己認識から来ている。

【2. Part 2：消費税についての認知・考え】

根拠：「うちは食費の消費税を意識して節約するほどではない。家計で一番大きな支出は教育費で、塾代や習い事で月に相当かかっている」と述べた。「消費税が下がっても、それが塾代の足しになるかというと……誤差の範囲かな」と語った。

推論：家計の最大の圧力が消費税ではなく教育費であるため、消費税の変化が家計に与える影響を「誤差の範囲」と認識している。消費税の知識は断片的で深くはないが、それが問題にならない生活水準にある。

FD：田口における消費税は「家計に影響しないほど小さな問題」だ。教育費が最大の支出であり、消費税の増減は生活実感に届かない。この生活水準が、消費税議論への距離感を作っている。

【3. Part 3：高市総理への好感度・評価】

根拠：「困っているご家庭の方が助かるようにしてほしい」がメッセージだと答えた。「うちは恵まれている方なので、自分のことを中心に考えるより、本当に助けが必要な方に届いてほしい」と語った。

推論：高市への評価は「自分への利益」ではなく「社会の困窮者への影響」という視点から語られている。政治への関心は低く深く追っていないが、「困っている人への支援」という基本的な価値観は明確だ。

FD：田口の高市評価は「自分には関係ないが、困っている人には良い話」という第三者的な評価構造だ。「うちは恵まれているので」という言葉が繰り返され、消費税議論を自分ごととして受け取れない生活水準と、それでも社会への関心が薄くない姿が浮かぶ。

【全体総括】

根拠：「消費税が1%下がっても、うちの家計にはほとんど影響がない。でもそれで助かる方は確実にいらっしゃる」と締めた。「消費税の話は今日初めてちゃんと聞いたかもしれない」と述べた。

推論：田口を貫く行動原理は「自分には切実ではないが、困っている人には届いてほしい」という他者視点の賛成だ。家計に余裕があり教育費が最大の関心事であるため、消費税議論が自分ごとにならない構造がある。

FD：田口敦子の特徴づけるのは「消費税1%案を自分への恩恵としてではなく困っている家庭への支援として評価する、教育費が最大の家計テーマの41歳専業主婦」だ。「うちは恵まれているので」という言葉が繰り返されることで、消費税議論との距離と、それでも「困っている方に届いてほしい」という関心が伝わる。

発言録

導入 + Part 1：食料品消費税の議論への賛否と理由

M：今日はお時間をいただきありがとうございます。正解のない対話ですので、思ったことをそのままお話しただければ大丈夫です。最近の生活はいかがですか？

田口敦子：子どもが受験生なのでそちらで頭がいっぱいです。上の子が高校受験で、習い事の送り迎えや勉強のサポートで毎日バタバタしています。

M：食料品消費税の議論をご存知でしたか？

田口敦子：ママ友から「食品の消費税がゼロになるかもって言ってたわよ」と聞いたことがあります。詳しくは追っていませんでした。

M：知っていることを教えてください。

田口敦子：高市総理が「食料品の消費税をゼロにする」と言っていたというのは聞きました。それがどうなったのかまでは追っていないくて。

M：その話を聞いた時、どんな気持ちでしたか？

田口敦子：「ゼロになったら助かるわよね」とは思いましたが、うちは夫の収入のおかげで家計に困っているわけではないので.....どちらかというところよりも受験の方が気になっていて。

M：なぜそう思いましたか？

田口敦子：食費より教育費の方が家計の大きなテーマで。消費税が下がっても下がらなくても、正直あまり生活は変わらないかなというのが本音で。

M：食料品消費税を 1%にするという案が出ていますが、どう思いますか？

田口敦子：1%でも下がるなら、下がった方がいいとは思いますが。うちはそれほど困っていないのですが、大変な家庭には嬉しい話なんじゃないかと。

M：なぜそう思いますか？

田口敦子：私は恵まれている方だと思うので、自分のことというよりも、節約しながら生活されているご家庭の方が助かるんじゃないかと。

M：ゼロにするという公約があったのですが、覚えていますか？

田口敦子：なんとなく覚えています。

M：驚きましたか、1%になったと聞いて？

田口敦子：そういうものかなという感じで。政治の話って変わることがよくありますから。

M：1%になったとしたら評価しますか？

田口敦子：評価というか.....良いことだとは思いますが。ただ自分への影響はあまりないので実感が薄いですが。

M：0 にできない理由について知りたいですか？

田口敦子：気になりますね、理由があるなら。

M：なぜ 1%という議論が出ているか、ご存知ですか？

田口敦子：知らないです。

M：実は、スーパーなどのレジシステムを税率ゼロに対応させるための改修に約 1 年かかるためです。0%だと 1 年、1%なら半年で実現できるそうです。それを聞いてどう思いますか？

田口敦子：それはわかりやすい理由ですね。じゃあ 1%の方が早く実現できるなら、その方がいいと思います。困っているご家庭には早い方がいいでしょうし。

M：半年早いなら、1%になる方がいいということですか？

田口敦子：そうですね。早い方がいいでしょうね。

M：まだ決まったわけではありません。今も検討中のようです。それを聞いてどう思いますか？

田口敦子：早く決まるといいですね。どちらにせよ、早めに決めてくれる方が助かる方には助かるので。

Part 2：消費税についての認知・考え（自由発話）

M：消費税についてはどのような知識や情報をお持ちですか。また、どのように考えていますか？

田口敦子：食料品が 8%で、それ以外は 10%というのは知っています。レシートを見ると書いてありますよね。消費税がどこに使われているかは.....社会保障とか言いますが、実感はないですね。

M：まずご家族の食費・生活費という立場から、どう感じますか？

田口敦子：正直なところ、うちは食費の消費税を意識して節約するほどではないんです。家計で一番大きな支出は教育費で、塾代や習い事で月に相当かかっています。消費税が下がっても、それが塾代の足しになるかというと.....誤差の範囲かな、という感じです。

M：その情報はどこから？

田口敦子：ママ友との話や、夫が教えてくれることが多いです。自分ではあまりニュースを追っていないくて。

M：何か実感として感じているものはありますか？

田口敦子：食材が高くなったのは感じます。でも消費税のせいなのか物価なのか.....正直よくわからなくて。それでも家計に大きな支障はないので、困っているとまでは言えないですね。

M：それについてはどう思いますか？

田口敦子：消費税が下がること自体は良いことだと思います。ただ、うちよりも本当に困っているご家庭の方が助かる話なんじゃないかと。

Part 3：高市総理への好感度・評価

M：高市総理が就任してから、印象は変わりましたか？

田口敦子：就任したのは知っています。女性の総理という印象が最初にありました。それ以外はあまり追えていないですが。

M：専業主婦のお母さんの立場から見ると、高市総理についてどんなことが気になりますか？

田口敦子：教育の話が気になります。受験にかかるお金とか、教育費の支援とか。消費税の話は.....下がれば助かる方はいらっしゃると思うんですが、私には正直あまり切実ではなくて。

M：消費税の問題での高市総理の姿勢、どう見えますか？

田口敦子：こういう話を進めようとしている姿勢は良いと思います。ただ詳しくは追っていないので、深く評価できる立場でもなくて。

M：今の高市総理に何か一言メッセージを送るとしたらなんと言いますか？

田口敦子：「困っているご家庭の方が助かるようにしてほしい」ですかね。

M：なぜそう言いたいのですか？

田口敦子：うちは恵まれている方なので、自分のことを中心に考えるより、本当に助けが必要な方に届いてほしいという気持ちが先に来るので。

締め

M：ご主人とこういう話をすることはありますか？

田口敦子：夫は仕事で消費税のことを追っているらしくて、たまに話してくれます。「ゼロは難しかったみたいだけど、1%には下がるかもしれない」という話は聞きました。私はあまり詳しくなくて、「そうなんだ」という感じで聞いています。

M：今日の話を通じて、一言でまとめると何でしょう？

田口敦子：「うちは恵まれているので、困っているご家庭に届くといいと思います」ですかね。

M：なぜそう思いますか？

田口敦子：消費税が1%下がっても、うちの家計にはほとんど影響がない。でもそれで助かる方は確実にいらっしゃるので、早く実現してほしいです。

M：言い忘れたことや、改めて思ったことがあれば。

田口敦子：消費税の話は今日初めてちゃんと聞いたかもしれないです。ママ友から断片的に聞くことはあっても、自分ごととして考えたことがなかったの。自分には切実ではないけれど、大変な方には大事な話なんだと改めて思いました。

M：ありがとうございました。

No.14 ゼロじゃないのかというモヤモヤは残る——公約はゼロ、現実 は1%、毎日レジに立つ44歳の本音

対象者プロフィール

氏名	河合 尚子
居住地	東京都墨田区
年齢・性別	44歳・女性
職業	パート（スーパー勤務）
世帯年収	約420万
家族構成	夫（トラック運転手）・子3人（16歳・13歳・11歳）
政治関心/知識	中／低

3分ブリーフィング

【1. 導入】

根拠：「またレジ変わるの？」という反応が最初に出た。消費者としての「安くなるならありがたい」より先に、スーパー現場の負担感が口をついて出た。

推論：河合にとって食料品消費税の議論は「生活費の問題」と「現場の労働問題」が二重に重なっている。どちらの視点も同等に持っているが、最初に出る言葉は現場側だ。生活者としての自分と、働く現場の自分が常に並走している。

FD：食料品消費税の議論に対し「現場労働者」として反応するのが第一の本能である。家計の切迫感を持ちながらも、政策変更のたびに現場が混乱してきた経験が、「歓迎」より先に「またか」という構えを作っている。

【2. Part 1：食料品消費税の議論への賛否と理由】

根拠：「1%でも下げようとしてくれた姿勢は伝わる」と言いながら、「ゼロじゃないのかというモヤモヤは残る」と両立させた。1%案の理由（システム改修）に対しては「現場としてはわかる気がします」と職業的納得を示した。

推論：河合の判断軸は「現実的に動いているか」と「説明があるか」の二点だ。ゼロから1%への変更を「裏切り」として断罪するのではなく、「理由があるなら現実的な判断」として受け入れる構えがある。ただし「国民に説明が足りない」という条件が常についてくる。

FD：公約変更に対して強い怒りではなく「条件付きの受容」を示す。現場経験からシステム改修の現実感を持っているため、1%案への理解が発生した。しかし「説明なき変更」への不信は根強く、賛否より「なぜそうなったかを知りたい」という情報要求が本音の核心にある。

【3. Part 2：消費税についての認知・考え】

根拠：「最初は消費税のせいか物価のせいかわからなかった。スーパーで働いて仕入れ値が上がると聞いて気づいた」と、職業経験から自力で混同を解消したと語った。また「消費税は社会保障に使われると聞くが、実感がない。どこに行ったのかわからない」と述べた。

推論：消費税と物価の混同を職場という文脈で解消できた点で、他のパネルとは異なる経路をたどっている。ただし「制度の説明は聞いた・実感はない」という構造は同様に、政府のお金の使い方への不信が底流にある。

FD：消費税知識の習得が「日常生活」ではなく「現場労働」を通じて行われた稀なケース。それゆえ理解は具体的だが、「政策が生活に届いた実感」は持っていない。「言われていると感じない」という言葉と現実のズレへの不信が、消費税に対する態度全体を規定している。

【4. Part 3：高市総理への好感度・評価】

根拠：「就任時は期待した。女性の総理だから私みたいな働く主婦をわかってくれるかと思って」と述べた一方、「なったら急に静かになった」「現場を知っているのか、という点が気になる」と続けた。メッセージは「現場の声を聞いてください」。

推論：高市への期待は「女性」という属性への共感から生まれたが、政策の見えにくさと公約変更によって「よくわからない」という位置に後退している。「理想はあるが現実的にどうするか」を自分も毎日考えているという自己投影があり、高市の現実的判断への理解と「説明不足への不満」が同居している。

FD：高市への評価軸は「女性かどうか」ではなく「現場の実態を知っているかどうか」に移行している。消費税政策に関しては「押し返された感がある」と弱さを指摘しつつも、1%で半年早く動けるなら現実的と評する。評価の決め手は「説明があるかどうか」であり、説明なき政策変更が不信の核心にある。

【全体総括】

根拠：「信じたいけど、信じ切れない」という一言で締めた。理由として「何度も変わる変わると言われて変わってこなかった経験から、期待しすぎない方がいいというブレーキが癖になっている」と語った。

推論：河合の基本的な態度は「期待の事前抑制」だ。消費税も高市も、評価する前にブレーキをかける習慣がある。これは裏切られた経験の蓄積によるもので、無関心や無力感とは異なる。「関心はある・期待もある・しかし素直には出せない」という構造が一貫している。

FD：働く現場と家計という二つの視点を持ち、消費税議論を生活者としても労働者としても語れる稀なパネルだ。しかし政治への信頼が「経験的に削られてきた」ことで、本来あるはずの期待が抑制されている。「決まってから先が大事」という言葉が示すように、関心の重心は「政策の決定」より「自分の生活に届くかどうか」にある。

発言録

導入 + Part 1：食料品消費税の議論への賛否と理由

M：河合さん、今日はお時間をいただきありがとうございます。今日は政治や税金について「正解のない話」をしますので、思ったことをそのまま話していただければ大丈夫です。では早速ですが——最近、食料品の消費税についての議論が出ていますが、ご存知でしたか？

河合尚子：あ、はい、なんとなく聞いてます。スーパーで働いているので、同僚たちとも「またレジ変わるの？」って話してました。消費税がゼロになるかもって話ですよ？

M：その話を聞いた時、どんな気持ちでしたか？

河合尚子：正直.....複雑です。消費者としては「安くなるならありがたい」って思うんですけど、レジの仕事をしている立場からすると、「また対応しなきゃいけないのか」って。前に 8% から 10% になった時、値札の貼り替えとかシステム変更とかで本当に大変だったの。

M：なぜそう思ったんですか——「またか」と感じた理由を、もう少し教えてください。

河合尚子：軽減税率が入った時ですね、食品は 8%・それ以外は 10% ってなって。お客さんに「これって何%なの？」って聞かれても最初は私もわからなくて。お弁当は持ち帰りか店内かで違ったりして.....とにかく現場が混乱したんです。だから「またシステム変えてレジ打ちなおして.....」って思うと、ちょっとうんざりする気持ちがあつて。

M：なるほど。では——食料品の消費税を 1% にするという案が出ていますが、どう思いますか？

河合尚子：1% ですか.....正直、ゼロじゃないのかって気持ちはあります。でも、1% でも下がるなら、まあ助かることは助かるかな。うちは子ども 3 人いるので食費がバカにならなくて。月の食費だけで 7~8 万はかかっていますから。

M：なぜ「ゼロじゃないのか」と思ったんですか？

河合尚子：だって、ゼロにするって言ってませんでしたっけ？ テレビで高市さんが言ったような気がして。選挙の時だったかな.....はつきり覚えてないんですけど、ゼロにするって公約だったんじゃないかって。

M：そうです。「食料品消費税を 2 年間ゼロにする」という公約がありました。それ、覚えていましたか？

河合尚子：あ、やっぱりそうでしたか。なんとなく覚えてました。でも.....正直、公約ってあんまり信じてないんですよ。前の総理とか、言ったこと全部できたわけじゃなかったし。

M：なぜ「驚かない」んですか？

河合尚子：うーん.....政治家って、言ったことが全部実現するわけじゃないって、もうわかってるから。期待して裏切られるのが嫌で。だから最初から「どうせ変わるんでしょ」って思っちゃうんですよね。

M：では、1%になったとしたら、評価しますか？

河合尚子：評価は.....するかな、一応。ゼロよりは少ないけど、下げようとしてくれたっていう気持ちは伝わる気がする。でも素直には喜べないっていうか。「最初ゼロって言ってたじゃん」っていうモヤモヤは残りますよね。

M：なぜ 1%という案が出ているか、ご存知ですか？

河合尚子：レジのシステムの関係じゃないですか？確か同僚が言ってたような.....ゼロにするとシステムを全部作り直さないといけないけど、1%なら短くできるって話を聞いた気がします。

M：そうです。0%だとレジシステムの改修に約 1 年、1%なら半年で実現できるそうです。それを聞いてどう思いますか？

河合尚子：あ、やっぱりそういうことか。私ちょっとそれわかる気がします。スーパーのレジって税率が変わるたびにシステムを変えるので、現場は大変なんです。だから 1%の方が半年早く動かせるなら.....まあ、現場としては助かるかもしれない。0 のままって、システム的には「ない」って扱いになるんですよね、きっと。その方が難しいのかな、なんて。

M：半年早いなら、1%の方がいいということですか？

河合尚子：現場目線ではそう思います。でも生活者としては.....やっぱりゼロがよかった。子どもの食費を考えたら、1%でも差はあるんですよね。完璧じゃなくても、動いてくれる方がまだ信頼できる気はするけど。

M：今もまだ決まっていないそうです。それを聞いてどう思いますか？

河合尚子：まだ決まってないんですか.....選挙から時間経ってるのに、まだ迷ってるんですね。早くしてほしいです。私たちの生活、毎日続いているんで。決まらないと、現場も「いつ準備すればいいんだ」ってなりますし。

Part 2：消費税についての認知・考え

M：ありがとうございます。ここからは消費税についての知識や情報、考えを自由に話してください。どんなことでも構いません。

河合尚子：消費税か.....私、スーパーで働いてるから普通の人よりは身近にあるかもしれないですね。食品は 8%で、お酒とかは 10%で、持ち帰り店内で違うっていう、あの軽減税率。最初は本当に意味がわからなくて、覚えるのが大変でした。それと.....やっぱり消費税って、私みたいな低収入の家庭の方が負担が重いと思うんですよ。お金持ちと同じ 8%払うでしょ。うちは食費を削ってなるべく安いものを選んでるけど、それでも月 7〜8 万の食費にかかる税金って、バカにならないですよ。

M：その情報はどこから？

河合尚子：消費税の逆進性の話ですか？どこで聞いたか.....ニュースかな。それか SNS で見た気がします。貧しい人ほど消費税の負担割合が大きいって。私は実感としてそう感じてますよ。夫がトラックの運転手で、そんなに収入が多いわけじゃないし、子どもが3人いるから食費は削れないし。

M：実感として感じているものはありますか？

河合尚子：食費の話で言うと.....ここ2〜3年で明らかに高くなりましたよね。同じものを買っても、昔より絶対高い。お客さんも「また上がった？」って言うし、私も自分の買い物で感じます。でも.....実は最初、それが消費税のせいなのか、物価のせいなのか、よくわからなかったんですよ。消費税は変わってないのに値段が上がってるから、それは別の話だって気づいたのは最近で。スーパーで働いてて、仕入れ値が上がってるって上司が言ってたので。

M：消費税と物価の値上がりは、別の話だと気づいたのはいつ頃ですか？

河合尚子：そうですね.....1〜2年前くらいかな。ウクライナとかコロナとかで食材が高くなったって話を聞いて、「あ、税率変わってないのに値段上がってるのはそっちの理由か」って。でも、お客さんの中にはまだ「消費税が上がったから高くなった」って思ってる人がいますよ。最近も言ってたお客さんがいたので、「消費税は変わってないんですよ」って説明したことがあります。

M：それについて、どう思いますか？

河合尚子：うーん.....消費税と物価の区別って、意外と難しいんだと思います。お客さんが混乱するのも無理はないかなって。「税金で高くなった」って言いたくなる気持ちはわかる。全部まとめて「高い」って感じるから。ただ私は現場で見ているので区別できるようになりましたけど、普通に生活してたらわからないかもしれないですね。

M：消費税について、他に気になっていることや考えていることはありますか？

河合尚子：そうですね.....消費税って、社会保障に使われてるって聞きますよね。医療とか年金とか介護に。だから「ゼロにする」って言われると、じゃあその分どこから取ってくるの？って不安にもなります。うちの夫は体を使う仕事だから、将来の医療費とか年金とか.....削られると困るなって。だから消費税を下げるのは嬉しいんだけど、財源の話をちゃんとしてほしいって思います。食費は助かるけど、老後が不安になるのも嫌なので。

M：その情報——消費税が社会保障に使われているという話は、どこから？

河合尚子：ニュースで聞いたことがあります。増税の時に「社会保障のため」って政府が言ってたじゃないですか。でも実際に年金が増えたかとか、医療費が下がったかとか、実感がありませんよ。「使われてる」って言われても、どこに行ったのかわからないというか。

M：実感がない、というのは？

河合尚子：年金の話が出るたびに「将来は減るかも」って言われるし、医療費の窓口負担は上がったし.....「消費税で社会保障が充実した」って感じたことがないんですよ。じゃあ何に使ったの？って思っちゃいます。だから正直、政府のお金の使い方をあまり信頼していないかもしれないです。

Part 3：高市総理への好感度・評価

M：高市総理が就任してから、印象は変わりましたか？

河合尚子：変わった.....かな。就任した時は「女性の総理が初めて」ってニュースになってたので、ちょっと期待しました。私みたいな働く主婦のことをわかってくれるかなって。でも最近は.....正直よくわからなくなってきました。消費税の話もそうだし、言ってたことと実際の話が違う方向になってきてるので。

M：「よくわからなくなった」という感覚は、どこから来ていると思いますか？

河合尚子：情報が少ないというか、私が追えていないのかもしれないんですけど.....高市さんが日々何をやってるかって、あんまり見えてこないんですよ。選挙の時は「消費税ゼロ」って大きく言ってたのが印象に残ってるのに、なったら急に静かになったというか。テレビで見ることも減った気がして。あと——スーパーのパートで働いていて、現場で毎日物価の変化を見てる私からすると、政策が現場に届くまでの時間の遅さにもどかしさを感じます。「決めた」って言うってから実際に変わるまで、すごく時間がかかる印象で。

M：河合さんの立場——スーパーで働くお母さんという立場から見て、高市総理についてどんなことが気になりますか？

河合尚子：やっぱり.....現場を知ってるのかな、っていうことですね。レジの税率を変えるって、現場はすごく大変なんですよ。システムを変えて、値札を全部貼り替えて、スタッフに説明して。「税率を変えます」って政治家が言う一言で、私たちは何週間も準備しないといけない。それがちゃんとわかってて1%という判断をしてるなら、まあ理解できる。でも「なんとなく1%でいいか」みたいな感じで決めてるなら、ちょっと違うなって思う。

M：消費税の問題での高市総理の姿勢、どう見えますか？

河合尚子：姿勢としては.....あまり強くは見えません。ゼロって言ってたのに1%になってるという時点で、どこかで押し返された？という感じ。総理なのに押し返されるんだって。でも一方で、全部0にするより1%の方が早く動ける、という理由があるなら、それはそれで現実的な判断だとも思う。私も現場で「理想はあるけど現実的にどうするか」って考えながら働いてるので、その感覚はわかります。ただ、国民に説明が足りないですよ。なぜ変わったのか、ちゃんと言ってほしいです。

M：今の高市総理に一言メッセージを送るとしたら、何と言いますか？

河合尚子：「現場の声を聞いてください」かな。スーパーで働いてる私たちも、食費を削って生活してる家庭も、毎日の生活の中で苦しんでる。その声が政治に届いてるのか、いつも疑問なんです。会議室で話し合うだけじゃなくて、本当のところを見てほしいって思います。

M：なぜ「現場の声を聞いてほしい」と言いたいのですか？

河合尚子：届いていない気がするからです。消費税の話もそうだし、物価の話もそうだし、私たちがどれだけやりくりしてるかって、政治家の人にはピンと来ないんじゃないかって思う。スーパーのレジに立ってみてください、って言いたいくらい。お客さんが「また高くなった」って言う顔を毎日見るから。

締め

M：旦那さんとこういった話——消費税や政治の話——をすることはありますか？

河合尚子：たまにはします。夫がトラックの仕事から帰ってきた時に「また食材高くなった」とか「消費税の話どうなるんだろう」とか。でも夫も疲れて帰ってくるので、深い話にはならないですね。「そうだよなあ」って言って終わる感じ。選挙の話も「どうせ変わらない」って言うので、あんまり盛り上がりなくて。

M：今日の話を通じて、一言でまとめると何でしょう？

河合尚子：.....「信じたいけど、信じ切れない」かな。消費税が下がってほしいのは本当だし、高市さんに期待したいのも本当。でも何度も「変わる、変わる」って言われて変わってこなかったから、素直に「やった！」って喜べない自分がある。現実的に動いてほしいっていう気持ちと、また裏切られるかもという気持ちが、いつも同時にある感じです。

M：なぜそう思うのですか？

河合尚子：経験からだと思います。消費税が上がった時も、軽減税率が入った時も、現場は大変だったけど「生活が楽になった」って実感はなかった。政治が何かを変えても、自分たちの手元に届く頃には別の問題が来てる。だからどこかで「期待しすぎない方がいい」ってブレーキをかける癖がついてしまってるんだと思います。

M：今日話して、言い忘れたことや改めて思ったことはありますか？

河合尚子：そうですね.....消費税が1%でも下がれば助かるのは本当です。月7～8万の食費の8%と1%じゃ、年間で計算するとけっこう違う。ただ、下がったことがちゃんと実感できるかどうか——スーパーで値段が本当に下がるのか、それとも何かで帳消しになるのか——そこが気になります。決まってから先が大事だと思っています。

No.15 ないよりはいい——「またここでも対象外か」、46 歳シングルマザーが消費税に感じる疎外感

対象者プロフィール

氏名	前田 奈緒子
居住地	北区（東京都）
年齢	46 歳・女性
職業	フリーランスライター
世帯年収	約 380 万（ひとり親）
家族構成	子 2 人（17 歳・14 歳）
政治関心/知識	高／中

3 分ブリーフィング

【Part 1】根拠：1%案を聞いて「また変わったんだ」と感じながら「ないよりはいい」と条件付きで肯定。ゼロ公約は覚えており「驚かなかった、また変わるんだろうなという感覚が先に来る」と述べた。システム理由を聞いて「最初からそう説明してくれれば、あんなにがっかりしなかった」と語り、「半年早く下がるなら 1%でも助かる、ゼロを 1 年待つより生活には現実的」と評価した。「まだ決まらないのかと疲れた気持ちになった、早く決めてほしい」とも述べた。／推論：期待と不信が同時に存在している。「驚かない」という鈍化した反応は傷つきを避ける防衛として機能している。「説明があれば」という条件は、まだ動ける余地があることを示す。／FD：不信は固定化されておらず、「説明と誠実さ」があれば態度が変わる可能性を持つ層。怒りより諦めが先に来るのは、傷つきの蓄積の結果である。

【Part 2】根拠：「税金は取られているのに、戻ってきてる感じがしない」「高校の無償化で所得制限に引っかかって対象外になった時、またここでも対象外かって」と述べた。情報収集能力はあるが「読めば読むほど変わらないと思う」ので意図的に距離を置いている。「消費税が 1%下がっても本当にそれだけ？根本的なところを変えてほしい」と述べた。／推論：消費税問題を孤立した制度として見ておらず、「制度の外側に置かれ続ける構造」への不満と結びついている。情報遮断は無関心ではなく「傷つきたくない」という能動的選択。／FD：消費税 1%への評価は実質的な家計負担だけでなく、「自分がこの制度の対象に含まれているか」という帰属感で判断する層。

【Part 3】根拠：就任当初「やっとな自分たちのことを考えてくれる人が出てきたかも」と期待した。深掘りで「調べるほど傷つく、期待して裏切られるを繰り返してきたから最初から距離を置くようになっていく」「知れば知るほど自分には関係ないということが見えてくる、最初から調べない方が楽という感覚がある」と語った。メッセージは「私たちを見てください」「政策って平均的な家庭を想定して作られている、私みたいな人間はいつもその外側にいる」。締めで「期待することをやめたくない」と述べた。／推論：「調べない」のは無関心ではなく傷つきを避ける防衛機制。「消費税が 1%になることより、見てもらえていると感じることの方が大事かもしれない」という発言は、政策の中身より「自分が想定されているか」という承認が評価軸の核心

にあることを示す。／FD：期待と諦めを同時に抱える層。政策の内容より「自分を見てくれているか」という帰属感が評価軸の核心にある。

【全体総括】根拠：「またここでも対象外か」「調べるほど傷つく」「消費税が1%になることより見てもらえていと感じることの方が大事」「期待することをやめたくない」という言葉が核心。／推論：フリーランス・ひとり親という立場が、制度設計の「想定外」に繰り返し置かれてきた経験が政治への距離を形成している。不信は固定ではなく「傷つきを避けるための合理的選択」として機能している。本音では政治への希望を手放していない。／FD：消費税の賛否より「自分が見えているか」が評価の核心。この層への政策コミュニケーションには制度の説明より「誰のための政策か」の明示が効く。

発言録

【導入】

M：前田さん、今日はお時間いただきありがとうございます。正解・不正解はありませんので、日頃感じていることをそのままお話しいただければ大丈夫です。最近の生活で気になっていることや、関心があることは何かありますか？

前田奈緒子：「そうですね.....子どもが2人いてひとり親なので、毎月の生活費のことはいつも気になっています。フリーランスで収入が安定しないので、来月どうなるかという不安が常にあって。最近は食材の値段が上がっているのも地味にきつくて。上の子が高校生で、下が中学生で、食べ盛りなので食費がかかるんです。政治のニュースもわりと追っているんですが、最近は追えば追うほど気が重くなって、あえて見ないようにしている時期もあります。」

【Part 1】食料品消費税の議論への賛否と理由

M：食料品消費税の議論をご存知でしたか？知っていることを教えてください。

前田奈緒子：「はい、知っています。高市総理が食料品の消費税をゼロにするって言っていたやつですね。ニュースで見っていました。」

M：その話を聞いた時、どんな気持ちでしたか？

前田奈緒子：「最初は「本当に？」って思いました。ひとり親で毎月の食費がきついので、ゼロになったら本当に助かるって。でも同時に「どうせ実現しないんじゃないか」という気持ちもあって、素直に喜べなかった部分もありました。」

M：どうせ実現しない」と思ったのはなぜですか？

前田奈緒子：「政治家が選挙で言ったことが、実際にはなかなか実現しないというのを何度も見てきたので。期待して、また違ったってなる.....それが怖くて。」

M：食料品消費税を1%にするという案が出ていますが、どう思いますか？

前田奈緒子：「.....ゼロって言ってたのに、という気持ちが先に来ます。1%でも下がるのはありがたいんですが、また変わったんだ、という感じで。」

M：なぜそう思いますか？

前田奈緒子：「毎月の食費、本当にかかっている。ひとり親で2人育てているので、1円でも削ろうとしている生活なんです。消費税が下がれば助かる。でも.....怒る気力も最近なくて。「やっぱりそうなるよな」って諦めの方が先に来る。それが一番悲しいかもしれないです。」

M：ゼロにするという公約があったのですが、覚えていますか？

前田奈緒子：「覚えています。それが最初に期待した理由でもあって。」

M：なぜ驚かなかったのですか？

前田奈緒子：「政治家が言ったことが変わるの、もう慣れてしまっていて。「また変わるんだろうな」という感覚が先に来る。それが悲しいんですけど。」

M：では、1%になったとしたら評価しますか？

前田奈緒子：「ゼロじゃないのは残念だけど、ないよりはいい。毎日の買い物が少しでも楽になるなら、それは素直にありがたいです。」

M：0にできない理由について知りたいですか？

前田奈緒子：「知りたいです。なぜゼロにできないのか、ちゃんと説明してほしい。」

M：なぜ1%という議論が出ているか、ご存知ですか？

前田奈緒子：「システムの問題.....とか？なんとなく聞いた気はしますが、詳しくはわかりません。」

M：実は、スーパーなどのレジシステムを税率ゼロに対応させるための改修に約1年かかるためです。0%だと1年、1%なら半年で実現できるそうです。それを聞いてどう思いますか？

前田奈緒子：「.....それを聞いて、少し気持ちが落ち着きました。理由があるならわかる、という感じで。最初からそう説明してくれれば、あんなにがっかりしなかったかもしれない。なぜ最初に言わなかったんだろう、という疑問は残りますけど。」

M：半年早いなら、1%になる方がいいということですか？

前田奈緒子：「そうですね。半年早く下がるなら、1%でも助かります。毎日の買い物のことを考えると、半年は大きい。ゼロを1年待つより、1%が半年で来る方が、生活には現実的だと思います。」

M：まだ決まったわけではありません。今も検討中のようです。それを聞いてどう思いますか？

前田奈緒子：「.....また決まらないのかって、少し疲れた気持ちになりました。早く決めてほしい。私みたいな立場の人間は、毎月毎月がギリギリなので。」

【Part 2】消費税についての認知・考え（自由発話）

M：消費税について、日頃どのような知識や情報をお持ちですか？また、どのようにお考えですか？自由にお話してください。

前田奈緒子：「消費税.....食料品は 8%で、外食や日用品は 10%というのは知っています。フリーランスなのでインボイス制度が始まってから請求書の書き方が変わって、税のことを考える機会が増えました。でも「なぜ消費税が必要なのか」って聞かれると、社会保障のためって言われてるけど、本当に使われてるのかな.....という疑問はずっとあります。税金は取られているのに、戻ってきてる感じがしない、というのが正直なところですよ。」

M：戻ってきてる感じがしない」とはどういう場面で感じますか？

前田奈緒子：「高校の無償化で所得制限に引っかかって対象外になった時です。ひとり親で、フリーランスで、収入は安定しないのに。「またここでも対象外か」って。消費税は毎日払っているのに、必要なところには届いていない感覚ですよ。」

M：その情報はどこから得ていますか？

前田奈緒子：「ニュースサイトや X で流れてくる記事です。ライターなので文章を読む習慣はあるんですが.....読めば読むほど「どうせ変わらない」という気持ちになって、あえて見ないようにしている時期もあります。」

M：実感として体を感じるものはありますか？

前田奈緒子：「スーパーの値段が上がっているのはすごく感じます。消費税が変わったわけじゃないのに、食材が高くなって。消費税が 1%下がっても.....「本当にそれだけ？」という気持ちも正直あります。根本的なところを変えてほしい、という。」

【Part 3】高市総理への好感度・評価

M：高市総理が就任してから、印象は変わりましたか？

前田奈緒子：「変わりました.....というか、最初は少し期待したんです。女性の総理っていうのもあったし、消費税ゼロって言ってくれてたから。ひとり親で、フリーランスで、毎月の生活がギリギリな自分には、「やっと自分たちのことを考えてくれる人が出てきたかも」って思ってた。でも、今は.....また同じかな、という感じになってきています。」

M：前田さんはひとり親でフリーランスという立場から見ると、高市総理についてどんなことが気になりますか？

前田奈緒子：「所得制限のことが引っかかっていて。高校の無償化でも、インボイス制度でも、「小さな個人」が一番割を食うんですよね。大企業でも正社員でもない。制度の設計が、いつも私みたいな人を見落としている感じがして。高市さんに期待したのは、そこを変えてくれるんじゃないかな。」

ないかという思いがあったから。今もまだ信じたい気持ちはあるんですが.....消費税が1%になりそうという話を聞いて、また少し遠くなった感じがします。」

M：消費税の問題での高市総理の姿勢、どう見えますか？

前田奈緒子：「ゼロって言ったのは本気だったんだと思いたい。でも1%になりそうって聞いた時、「ああ、やっぱり」って思った自分がいて。システムの理由があると聞いてからは、少し気持ちが落ち着きましたが.....「なぜ最初から説明しなかったんだろう」という疑問は残ります。説明があれば、もう少し信頼できたと思うんです。」

M：なぜ最初から説明しなかったんだろう」という疑問を持たれたんですね。ご自身で調べてみようとはなかったですか？

前田奈緒子：「.....確かに。調べればよかったんですが.....そうしなかったですね。なんでだろう。ニュースで「1%になりそう」って流れてきた時に、まず感情が先に来て。「あ、変わった」という気持ちが先で、理由を調べようという気持ちにならなかった。」

M：なぜ疑問よりも先に、不信感が来たんでしょうか。

前田奈緒子：「.....慣れてしまっているのかもしれないです。政治家が言ったことが変わる、というのを何度も経験してきたから。「また変わったんだ」という方が先に来て、「なぜ」を考える前に気持ちがシャットダウンしてしまう。ライターだから情報は追える立場のはずなんですけど.....政治に関しては、調べるほど傷つく、というか。期待して、裏切られる、を繰り返してきたから、最初から距離を置くようになっているのかもしれないです。」

M：調べるほど傷つく」という感覚、もう少し教えてもらえますか？

前田奈緒子：「知れば知るほど「自分には関係ない」ということが見えてくるんです。所得制限も、フリーランスの扱いも、調べると「ああ、またここでも対象外か」って。だから最初から調べない方が楽、という感覚が、どこかにあるのかもしれない。それが「説明がなければ不信」につながっているのかも.....今話しながら気づきました。」

M：今の高市総理に一言メッセージを送るとしたら、何と言いますか？

前田奈緒子：「.....「私たちを見てください」ですかね。数字じゃなくて。ひとり親で、フリーランスで、所得制限に引っかかって、でも毎日ギリギリで生活している人間がいる、ということ。政策って、「平均的な家庭」を想定して作られているような気がして。私みたいな人間は、いつもその外側にいる。そこを見てほしい。」

M：私たちを見てください」と言いたい理由を教えてください。

前田奈緒子：「見えていないと思うから、です。政治家の言う「生活者」「国民」って、誰のことなんだろうって、ずっと思っていて。私のことじゃないんじゃないか、という気持ちがいつもある。高市さんに期待しているのは、まだそこに希望があるからかもしれないんですが.....」

【締め】

M：お子さんや身近な方と、こういう話をすることはありますか？

前田奈緒子：「子どもとは.....あまりしないですね。上の子が 17 歳なので、選挙の話を少ししたことはあるんですが、消費税の細かい話はしていない。「お母さんが働いても大変そうだな」というのは感じているみたいで、それが申し訳なくて。友人とはたまに愚痴レベルで話すことはありますが、「なぜそうなってるのか」まで掘り下げて話したことはなかったです。」

M：今日の話を通じて、一言でまとめると何でしょう？

前田奈緒子：「「期待することをやめたくない」かな。諦めている、と思っていたんですが、今日話しながら、まだ諦めていない自分もいるんだな、と気づいて。調べるのが怖い、傷つくから距離を置いている、でも本当は期待している。そのぐるぐるが、自分の正直な気持ちだと思います。」

M：言い忘れたことや、改めて思ったことがあれば。

前田奈緒子：「ひとり親で、フリーランスで、という人間が 100 人いたら、みんな同じようなことを感じているんじゃないかと思うんです。制度の外側にいる感覚。高市さんには、そういう人たちのことを一度ちゃんと見てほしい。消費税が 1%になることより、「見てもらえている」と感じるの方が、実は大事ななのかもしれないと、今日話して思いました。」

No.16 「消費税 1%でも下がれば助かる、でも財源の手当てもセットでお願いしたい」――コロナ禍の予算削減を現場で経験した 32 歳看護師

対象者プロフィール

氏名	小泉 恵利
居住地	東京都台東区
年齢・性別	32 歳・女性
職業	看護師（正職員）
家族構成	夫（会社員）・子なし
政治関心/知識	中／中

3 分ブリーフィング

【1. 導入+Part 1：食料品消費税の議論への賛否と理由】

根拠：「助かるなとは思いました。ただ.....看護師なので、医療の財源のことがどうしても頭をよぎって。コロナのとき、病院の予算が削られて本当に大変だったので」と述べた。レジシステムの理由に「財源の問題とは別の話で、システムの問題で 1%になっているなら、ちゃんとした理由だと思います」と応じた。

推論：消費税への賛否が「助かる」という生活者の感覚と「財源が削られる」という職業的な不安の両方から構成されている。レジシステムという説明を聞いて「財源の問題ではない」とわかった瞬間に即座に納得しており、財源への懸念が最大の障壁だったことがわかる。

FD：小泉にとって 1%案への態度は「財源の問題でないといわれれば賛成できる、条件付きの賛成」だ。コロナ禍で医療予算が削られた経験が、消費税という言葉に財源への警戒を自動的に呼び起こしている。

【2. Part 2：消費税についての認知・考え】

根拠：「下がるのはありがたい。でも財源の話がちゃんとしていれば、という条件付きで賛成という感じです」と述べた。「コロナのとき医療現場の予算が削られて大変だったので、消費税と医療財源の関係には敏感になっています」と語った。

推論：消費税知識は一般水準より高く、財源と社会保障の関係を職業的な経験から理解している。食費への影響は「助かる」と認識しているが、長期的な医療財源への影響という懸念が同時に存在している。

FD：小泉における消費税は「生活者としての恩恵と医療従事者としての財源不安が同居する問題」だ。コロナ禍の体験が消費税議論に対して一般的な生活者より複雑な視点を加えている。

【3. Part 3：高市総理への好感度・評価】

根拠：「下げるなら財源の手当てもセットで説明してください」がメッセージだと答えた。「消費税が下がることで助かる部分はあるけれど、医療や介護の財源が削られたら現場はまた苦しくなる」と語った。

推論：高市への評価は「説明責任」と「財源の手当て」の2点に集約されている。消費税ゼロの公約を出した点は評価するが、変更の理由説明の遅さへの不満がある。

FD：小泉の高市評価は「政策の方向性は評価するが、財源とセットで説明してほしい」という条件付きの評価だ。看護師として医療財源への影響を常に意識する立場が、一般的な生活者より一歩踏み込んだ要求を生んでいる。

【全体総括】

根拠：「助かる気持ちはあるけど、財源の手当てもセットでお願いしたい」と締めた。「生活者として助かりたいし、看護師として現場も守ってほしいという、両方の気持ちが今もあります」と述べた。

推論：小泉を貫く行動原理は「生活者と医療従事者という二つの立場が消費税議論への評価を複雑にしている」だ。レジシステムの説明で財源問題でないとわかり即座に納得した場面が、財源への懸念が最大の障壁だったことを明確に示している。

FD：小泉恵利を特徴づけるのは「助かる気持ちはあるけど財源の手当てもセットでお願いしたい、コロナ禍の予算削減を現場で経験した32歳看護師の条件付き賛成」だ。「生活者として助かりたいし、看護師として現場も守ってほしい」という言葉に、二つの立場の間で揺れる本音が凝縮されている。

発言録

導入 + Part 1：食料品消費税の議論への賛否と理由

M：今日はお時間をいただきありがとうございます。正解のない対話ですので、思ったことをそのままお話しいただければ大丈夫です。最近の生活はいかがですか？

小泉恵利：病院で夜勤もあるので、体力的にはしんどい毎日ですが、夫と2人なのでなんとかやっています。物価が上がっているのは実感していて、スーパーでの買い物の金額が少し増えた気がします。

M：食料品消費税の議論をご存知でしたか？

小泉恵利：知っています。高市総理が食料品の消費税をゼロにするという公約を出していたのは知っています。最近1%案が出ているというのも聞きました。

M：知っていることを教えてください。

小泉恵利：ゼロにするという話があって、それがなぜか 1%案になってきているということは知っています。詳しい経緯まではわかりませんが。

M：その話を聞いた時、どんな気持ちでしたか？

小泉恵利：助かるなとは思いました。ただ.....私、看護師なので、医療の財源のことがどうしても頭をよぎって。コロナのとき、病院の予算が削られて本当に大変だったので。

M：なぜそう思いましたか？

小泉恵利：消費税は社会保障の財源にもなっていると聞いているので、下げると財源が減るのかなと。助かるのはわかるけど、それで医療や福祉が削られたら困るという気持ちが同時にあって。

M：食料品消費税を 1%にするという案が出ていますが、どう思いますか？

小泉恵利：ゼロよりは財源への影響が少し抑えられるのかなという気はします。1%でも下がれば助かりますし。ただ財源の話がどうなるのかは気になります。

M：なぜそう思いますか？

小泉恵利：生活費が少しでも下がるのはありがたいんです。ただ看護師として、医療や介護の現場が財源不足で苦しんでいるのを見ているので、「下げるのはいいけど、その分はちゃんと補われるの？」という疑問が出てきてしまって。

M：ゼロにするという公約があったのですが、覚えていますか？

小泉恵利：覚えています。

M：驚きましたか、1%になったと聞いて？

小泉恵利：「やっぱりゼロは難しかったか」という感じです。財源の話を考えると、ゼロにするのは相当難しいだろうとは思っていたので。

M：1%になったとしたら評価しますか？

小泉恵利：方向性としては良いと思います。ただ財源の話がどうなるかを見てから、という気持ちがあって。

M：0 にできない理由について知りたいですか？

小泉恵利：知りたいです。ちゃんと理由があるなら納得したい。

M：なぜ 1%という議論が出ているか、ご存知ですか？

小泉恵利：知らないです。

M：実は、スーパーなどのレジシステムを税率ゼロに対応させるための改修に約1年かかるためです。0%だと1年、1%なら半年で実現できるそうです。それを聞いてどう思いますか？

小泉恵利：あ、そういう理由なんですね。それは納得できます。財源の問題とは別の話で、システムの問題で1%になっているなら、ちゃんとした理由だと思います。半年早く実現できるなら1%の方がいい。

M：半年早いなら、1%になる方がいいということですか？

小泉恵利：そうですね。理由がわかれば納得できます。

M：まだ決まったわけではありません。今も検討中のようです。それを聞いてどう思いますか？

小泉恵利：早く決まってほしいです。見通しが立たない方が、生活の計画も立てにくいので。

Part 2：消費税についての認知・考え（自由発話）

M：消費税についてはどのような知識や情報をお持ちですか。また、どのように考えていますか？

小泉恵利：食料品が8%で、それ以外は10%というのは知っています。消費税が社会保障に使われているというのも聞いています。コロナのとき医療現場の予算が削られて大変だったので、消費税と医療財源の関係には敏感になっています。

M：まずご家族の食費・生活費という立場から、どう感じますか？

小泉恵利：夫と2人で食費は月5万円くらいです。消費税が1%下がれば年間で数千円は変わる計算になりますよね。助かることは助かります。ただ、それで社会保障が削られたら、長い目でみると損をするんじゃないかという気持ちもあって。

M：その情報はどこから？

小泉恵利：職場の先輩や同僚から聞くことが多いです。コロナのとき予算削減で大変だった話をよく聞いているので。

M：何か実感として感じているものはありますか？

小泉恵利：食材が高くなっているのは感じます。スーパーで同じものを買っても値段が上がっている。消費税なのか物価なのかは区別がついていませんが。

M：それについてはどう思いますか？

小泉恵利：下がるのはありがたい。でも財源の話がちゃんとしていれば、という条件付きで賛成という感じです。

Part 3：高市総理への好感度・評価

M：高市総理が就任してから、印象は変わりましたか？

小泉恵利：就任前は経済政策に積極的な人というイメージでした。消費税ゼロという公約は「本当にできるの？」と思いながら注目していました。

M：看護師として働かれている立場から見ると、高市総理についてどんなことが気になりますか？

小泉恵利：医療・介護の財源をどう確保するかが一番気になります。消費税を下げることと、医療の財源を守ることを両立できるのかを見えています。

M：消費税の問題での高市総理の姿勢、どう見えますか？

小泉恵利：公約を出した点は評価しますが、1%案になった理由をもっと早く説明してほしいと思った。今日聞いてシステムの話とわかって納得しましたが、財源の話は別途ちゃんと説明してほしいと思っています。

M：今の高市総理に何か一言メッセージを送るとしたらなんと言いますか？

小泉恵利：「下げるなら財源の手当てもセットで説明してください」ですかね。

M：なぜそう言いたいのですか？

小泉恵利：コロナのとき医療現場が予算削減で本当に大変でした。消費税が下がることで助かる部分はあるけれど、医療や介護の財源が削られたら現場はまた苦しくなる。両立してほしいという気持ちが強いので。

締め

M：ご主人とこういう話をすることはありますか？

小泉恵利：します。夫は「下がるのはいいことじゃないの？」と言っていて、私が「でも財源は大丈夫なの？」と言うと「そんなに心配しなくても」と返ってきます。私の方が気にしすぎなのかもしれないですが。

M：今日の話を通じて、一言でまとめると何でしょう？

小泉恵利：「助かる気持ちはあるけど、財源の手当てもセットでお願いしたい」ですかね。

M：なぜそう思いますか？

小泉恵利：レジシステムの理由を聞いて 1%案には納得しました。ただ、消費税を下げることで医療や社会保障がどうなるかは別の問題として残っている。生活者として助かりたいし、看護師として現場も守ってほしいという、両方の気持ちが今もあります。

M：言い忘れたことや、改めて思ったことがあれば。

小泉恵利：今日初めてレジシステムの理由を聞いて、「ちゃんと理由があるなら納得できる」と思いました。説明がある政策は信頼できる。財源の話もちゃんと説明してもらえれば、もっと安心して賛成できると思います。

M：ありがとうございました。

No.17 「1%でもいいから早く始めてください」——毎日チラシで1円を節約する生活が、早期実現を求める36歳介護パート

対象者プロフィール

氏名	清田 亜里沙
居住地	東京都足立区
年齢・性別	36歳・女性
職業	パート（介護補助）
家族構成	夫（工場勤務）・子1人（7歳）
政治関心/知識	低/低

3分ブリーフィング

【1. 導入+Part 1：食料品消費税の議論への賛否と理由】

根拠：「毎日チラシを見て、少しでも安いものを探しているので。消費税がなくなったら、同じお金でもう少し多く買えるじゃないですか」と述べた。1%案に「ゼロじゃないんですか？1%でも下がるなら、それはそれで助かります」と答えた。レジシステムの理由に「じゃあ1%の方が早く始められるなら、1%でいいです。早く始まる方が助かります」と応じた。

推論：消費税への評価軸は「いくら下がるか」より「いつ始まるか」に向かっている。毎日チラシで1円単位の節約をしている生活が、「早ければ早いほどいい」という時間的切迫感を生んでいる。レジシステムの理由への反応も「理由はわかった、早い方がいい」と即座で、条件や懸念より実現速度を優先している。

FD：清田にとって1%案の評価軸は「ゼロか1%か」ではなく「いつ始まるか」だ。毎日チラシで節約するほど切迫した生活が、政策の中身より実現タイミングへの関心を生んでいる。

【2. Part 2：消費税についての認知・考え】

根拠：「食費は月3万円台に抑えようとしています。チラシで特売を探して、少しでも安く買うのが毎日の仕事みたいになっています。消費税が8%って、結構大きいんですよ」と述べた。

推論：消費税への知識は深くないが、レシートと日常の買い物を通じて8%という負担を体感している。消費税の使途や財源への関心はなく、「下がれば家計が楽になる」というシンプルな実感で評価している。

FD：清田における消費税は「チラシと特売で戦っている毎日の中で、8%という数字として実感している問題」だ。財源や制度の議論には入らず、「下がれば助かる」という直接の生活実感だけで消費税を評価している。

【3. Part 3：高市総理への好感度・評価】

根拠：「早く実現してください」がメッセージだと答えた。「毎日チラシを見て1円単位で節約している生活なので。少しでも早く消費税が下がってくれば、それだけで助かります」と語った。

推論：高市への評価は「早く実現するかどうか」の一点に集約されている。政治家への評価を政策の哲学や方針ではなく、生活への即効性で判断している。

FD：清田の高市評価は「早く実現してくれるかどうか、それだけ」だ。介護の処遇改善という別の要求もあるが、今日の話の文脈では消費税の早期実現が最優先になっている。

【全体総括】

根拠：「1%でもいいから早く始めてください」と締めた。「今日レジシステムの話聞いて、ゼロの方がよかったけど、1%で半年早く始まるなら、その方が助かります。うちは今すぐにでも助かりたいので」と述べた。

推論：清田を貫く行動原理は「今の生活の切迫が、政策の中身より早期実現を求める」だ。ゼロより1%を選ぶ理由も「半年早い」という一点にあり、消費税の水準より実現タイミングへの関心が一貫している。

FD：清田亜里沙を特徴づけるのは「毎日チラシで1円を節約する生活が、1%でもゼロでも早く始まってほしいという切迫した要求を生んでいる36歳介護パート」だ。「1%でもいいから早く始めてください」という言葉に、政策の中身より実現タイミングへの関心が凝縮されている。

発言録

導入 + Part 1：食料品消費税の議論への賛否と理由

M：今日はお時間をいただきありがとうございます。正解のない対話ですので、思ったことをそのままお話しいただければ大丈夫です。最近の生活はいかがですか？

清田亜里沙：毎日バタバタしています。介護の仕事が終わって子どもを迎えに行って、夕飯作って……という繰り返しで。夫の給料と私のパート代を合わせてなんとかやっていますが、食費を切り詰めるのが日課になっています。スーパーのチラシは毎日欠かさず見ていて、1円でも安いお店を探すのが習慣です。

M：食料品消費税の議論をご存知でしたか？

清田亜里沙：消費税がゼロになるって話、聞いたことがあります。テレビでやってましたよね。

M：知っていることを教えてください。

清田亜里沙：高市さんが食料品の消費税をなくすって言ったのは聞きました。本当になるのかな、と思ってました。

M：その話を聞いた時、どんな気持ちでしたか？

清田亜里沙：本当にゼロになったら助かるなって思いました。うちは食費を本当にギリギリで管理しているので。

M：なぜそう思いましたか？

清田亜里沙：毎日チラシを見て、少しでも安いものを探しているので。消費税がなくなったら、同じお金でもう少し多く買えるじゃないですか。

M：食料品消費税を 1%にするという案が出ていますが、どう思いますか？

清田亜里沙：ゼロじゃないんですか？1%でも下がるなら、それはそれで助かります。ゼロが良かったけど、1%でも何もないよりはいいですね。

M：なぜそう思いますか？

清田亜里沙：1 円でも安くなれば助かるのが正直なところで。毎日チラシで節約しているので、消費税が少しでも下がれば、その分が浮くじゃないですか。

M：ゼロにするという公約があったのですが、覚えていますか？

清田亜里沙：覚えています。

M：驚きましたか、1%になったと聞いて？

清田亜里沙：「あ、やっぱりゼロは無理だったか」という感じです。なんか政治ってそういうもんかなと思って。

M：1%になったとしたら評価しますか？

清田亜里沙：1%でも下がってくれるなら、ありがたいです。何もないよりはいいので。

M：0 にできない理由について知りたいですか？

清田亜里沙：理由があるんですか？知りたいですね。

M：なぜ 1%という議論が出ているか、ご存知ですか？

清田亜里沙：知らないです。

M：実は、スーパーなどのレジシステムを税率ゼロに対応させるための改修に約 1 年かかるためです。0%だと 1 年、1%なら半年で実現できるそうです。それを聞いてどう思いますか？

清田亜里沙：そういう理由なんですね。じゃあ 1%の方が早く始められるなら、1%でいいです。早く始まる方が助かります。今すぐでも始めてほしいくらいで。

M：半年早いなら、1%になる方がいいということですか？

清田亜里沙：そうです。早ければ早いほどいい。うちはそれだけ切迫しているので。

M：まだ決まったわけではありません。今も検討中のようです。それを聞いてどう思いますか？

清田亜里沙：早く決めてほしいです。検討中って言われても、うちの家計は待ってくれないので。

Part 2：消費税についての認知・考え（自由発話）

M：消費税についてはどのような知識や情報をお持ちですか。また、どのように考えていますか？

清田亜里沙：食料品が 8%で、それ以外は 10%というのはスーパーのレシートで見てわかります。消費税がどこに使われているとか、難しいことはよくわかりませんが。

M：まずご家族の食費・生活費という立場から、どう感じますか？

清田亜里沙：食費は月 3 万円台に抑えようとしています。子どもがいるので栄養は削れなくて、でもお金はないので。チラシで特売を探して、少しでも安く買うのが毎日の仕事みたいになっています。消費税が 8%って、結構大きいんですよ。同じものでも 8%分余計に払っているわけで。

M：その情報はどこから？

清田亜里沙：レシートで確認しています。あとは職場のパートの仲間から聞いたり。テレビのニュースもたまに見ますが、難しい話は頭に入らないことが多くて。

M：何か実感として感じているものはありますか？

清田亜里沙：食材が高くなっているのは実感します。同じものを買っても以前より高い。消費税のせいなのか物の値段が上がったのかわからないですが、全体的に高くなっているのは確かです。

M：それについてはどう思いますか？

清田亜里沙：消費税が下がれば少し楽になります。1%でも下がれば、年間で考えたら結構な金額になる気がして。

Part 3：高市総理への好感度・評価

M：高市総理が就任してから、印象は変わりましたか？

清田亜里沙：就任したのは知っています。女性の総理というのが印象に残っています。それ以外はあまり追えていないですが。

M：介護の仕事をされているお母さんの立場から見ると、高市総理についてどんなことが気になりますか？

清田亜里沙：介護の仕事をしていると、給料が低くて大変なのはいつも感じています。処遇改善をもっとやってほしいというのはあります。消費税の話は——早く実現してほしいというそれだけです。

M：消費税の問題での高市総理の姿勢、どう見えますか？

清田亜里沙：ゼロにするって言ってくれたのはよかったと思います。1%になりそうというのは残念ですが、今日の理由を聞いて「ならしょうがない」という気持ちです。

M：今の高市総理に何か一言メッセージを送るとしたらなんと言いますか？

清田亜里沙：「早く実現してください」です。それだけです。

M：なぜそう言いたいのですか？

清田亜里沙：毎日チラシを見て1円単位で節約している生活なので。少しでも早く消費税が下がってくれば、それだけで助かります。

締め

M：ご主人とこういう話をすることはありますか？

清田亜里沙：たまにします。夫も「消費税ゼロになったら助かるな」と言っていました。1%になりそうだという話は伝えていなかったもので、今日帰って話してみます。

M：今日の話を通じて、一言でまとめると何でしょう？

清田亜里沙：「1%でもいいから早く始めてください」です。

M：なぜそう思いますか？

清田亜里沙：今日レジシステムの話聞いて、「そういう理由なら仕方ない」と思いました。ゼロの方がよかったけど、1%で半年早く始まるなら、その方が助かります。うちは今すぐにでも助かりたいので。

M：言い忘れたことや、改めて思ったことがあれば。

清田亜里沙：消費税の難しい話はよくわからないですが、毎日チラシで節約している生活なので、少しでも下がってくると本当に助かります。1%でもゼロでも、早く決まってほしいです。

M：ありがとうございました。

No.18 「焼け石に水かもしれないけど、それでも 1%でも早く下げてほしい」——教育費の重さの前で消費税が霞む 48 歳パート母

対象者プロフィール

氏名	山本 和江
居住地	東京都練馬区
年齢・性別	48 歳・女性
職業	パート（事務）
家族構成	夫（会社員）・子 2 人（21 歳・18 歳浪人中）
政治関心/知識	中／中

3 分ブリーフィング

【1. 導入＋Part 1：食料品消費税の議論への賛否と理由】

根拠：「食費の節約ができて、教育費の方が桁違いに大きいので、焼け石に水かなという気持ちの方が先に来ちゃって」と述べた。1%案に「1%でも下がるなら、下がらないよりはいい。焼け石に水かもしれないけど、それでも水はあった方がいい」と答えた。レジシステムの理由に「半年早く始まるなら、1%でもその方がいい。うちは今が一番教育費がかかる時期なので」と応じた。

推論：消費税への評価が「焼け石に水」という表現に集約されている。教育費が最大の家計テーマであるため、消費税の変化を「誤差ではあるが、ないよりはまし」という現実主義的な目線で評価している。「それでも水はあった方がいい」という言葉が、諦めと現実的な需要の間にある態度を示している。

FD：山本にとって消費税 1%案は「焼け石に水でも水はあった方がいい」という現実主義的な賛成だ。大学生と浪人生を抱える家計では教育費が最大のテーマであり、消費税の変化はその前では小さく霞む。それでも「早く始まってほしい」という切実さが残っている。

【2. Part 2：消費税についての認知・考え】

根拠：「食費は月 6～7 万円くらいかかっています。消費税が下がっても、教育費の前では焼け石に水なんですけど.....それでも、焼け石に水でも水はあった方がましですから」と述べた。

推論：家計管理を自分でしており、食費への消費税の影響を把握している。ただし、教育費という圧倒的に大きな支出があるため、消費税の変化を「誤差」として相対化している。「焼け石に水」という表現が繰り返されることで、この相対化が山本の消費税観の核心であることがわかる。

FD：山本における消費税は「助かることは助かるが、教育費という現実の前では焼け石に水という問題」だ。この認識が消費税議論への距離感を作っており、それでも「早く始まってほしい」という現実的な需要が残っている。

【3. Part 3：高市総理への好感度・評価】

根拠：「消費税を下げるのはいいけど、教育費の支援も一緒にやってほしい」がメッセージだと答えた。「消費税が1%下がっても、大学の学費や予備校代の重さは変わらないので」と語った。

推論：高市への評価は消費税と教育費支援の両方を求める複合的な要求になっている。消費税単独での評価より、自分の生活の最大課題である教育費と合わせて政策を評価している。

FD：山本の高市評価は「消費税は方向性として良いが、教育費支援もセットでやってほしい」という複合的な要求だ。受験・大学という今の生活の最大課題が、消費税議論をより大きな生活問題の文脈に位置づけている。

【全体総括】

根拠：「焼け石に水かもしれないけど、それでも1%でも早く下げてほしい」と締めた。「1%で半年早く始まるなら、その方がいい。焼け石に水でも、水はあった方がましです」と述べた。

推論：山本を貫く行動原理は「教育費という圧倒的な現実の前でも、消費税の変化に現実的な需要を見出す」だ。「焼け石に水」という言葉が何度も繰り返されることで、この相対化と同時にある切実さが伝わる。

FD：山本和江を特徴づけるのは「大学と浪人という最も教育費のかかる時期に、消費税1%案を焼け石に水と認識しながらも、それでも1%でも早く始まってほしいと切実に思う48歳パート母」だ。「焼け石に水でも水はあった方がまし」という言葉に、諦めと現実的な需要が同居している。

発言録

導入 + Part 1：食料品消費税の議論への賛否と理由

M：今日はお時間をいただきありがとうございます。正解のない対話ですので、思ったことをそのままお話しいただければ大丈夫です。最近の生活はいかがですか？

山本和江：上の子が大学生で、下の子が浪人中なので、教育費が大変な時期です。夫の給料とパートの収入でやりくりしていますが、受験の費用や大学の学費が毎月の家計を圧迫していて。食費も節約しようとは思っているのですが、なかなか思うようにはいかないですね。

M：食料品消費税の議論をご存知でしたか？

山本和江：ゼロにするという話があったのは聞きました。テレビで見た気がします。

M：知っていることを教えてください。

山本和江：高市総理が食料品の消費税をゼロにするという公約を出していたのは知っています。それが最近どうなったのかはあまり追えてなくて。

M：その話を聞いた時、どんな気持ちでしたか？

山本和江：実現したらありがたいとは思いましたが.....正直、食費の節約ができて、教育費の方が桁違いに大きいので、焼け石に水かなという気持ちが先に来てしまって。

M：なぜそう思いましたか？

山本和江：浪人の予備校代と大学の学費を合わせると、毎月の食費の節約なんてほぼ意味がないくらいの額になっていて。それでも下がってくれば助かるのは助かるんですが。

M：食料品消費税を 1%にするという案が出ていますが、どう思いますか？

山本和江：ゼロの方が良かったとは思いますが、1%でも下がるなら、下がらないよりはいい。「焼け石に水かもしれないけど、それでも水はあった方がいい」という気持ちです。

M：なぜそう思いますか？

山本和江：毎月の家計は本当にギリギリで、少しでも楽になれば助かります。1%でも、積み重なれば年間でそれなりの金額になりますから。

M：ゼロにするという公約があったのですが、覚えていますか？

山本和江：覚えています。

M：驚きましたか、1%になったと聞いて？

山本和江：「まあ、そうなるか」という感じです。大きな公約が変わっても、政治ってそういうものだと思うので。

M：1%になったとしたら評価しますか？

山本和江：下がること自体は評価します。でも、もう少し教育費の支援もやってほしいというのが本音で。

M：0 にできない理由について知りたいですか？

山本和江：そうですね、理由があるなら聞きたいです。

M：なぜ 1%という議論が出ているか、ご存知ですか？

山本和江：知らないです。

M：実は、スーパーなどのレジシステムを税率ゼロに対応させるための改修に約 1 年かかるためです。0%だと 1 年、1%なら半年で実現できるそうです。それを聞いてどう思いますか？

山本和江：ああ、そういう理由なんですね。それは納得できます。機械の改修って大変ですよ。半年早く始まるなら、1%でもその方がいい。うちは今が一番教育費がかかる時期なので、早い方が助かります。

M：半年早いなら、1%になる方がいいということですか？

山本和江：そうです。今すぐにでも助かりたいので。

M：まだ決まったわけではありません。今も検討中のようです。それを聞いてどう思いますか？

山本和江：早く決まってほしいですね。受験は待ってくれないので。

Part 2：消費税についての認知・考え（自由発話）

M：消費税についてはどのような知識や情報をお持ちですか。また、どのように考えていますか？

山本和江：食料品が 8%で、それ以外は 10%というのは知っています。消費税がどこに使われているかは、社会保障って聞いたことがあります、詳しくはわかりません。

M：まずご家族の食費・生活費という立場から、どう感じますか？

山本和江：食費は月 6〜7 万円くらいかかっています。子どもが大学と浪人で、学費・予備校代・受験費用を合わせると毎月かなりの額になっていて。消費税が下がっても、教育費の前では焼け石に水なんですけど.....でも、焼け石に水でも水はあった方がましですから。

M：その情報はどこから？

山本和江：家計簿をつけているので自分で把握しています。食材の値段は肌感覚でわかります。

M：何か実感として感じているものはありますか？

山本和江：食材が高くなっているのは実感しています。同じものを買っても明らかに値段が上がっている。消費税のせいなのか物価なのか、両方が重なっている気がします。

M：それについてはどう思いますか？

山本和江：消費税が下がれば少し楽になります。でも、うちの一番の問題は教育費なので、消費税が下がるだけでは全体的には厳しい状況に変わりはないですね。

Part 3：高市総理への好感度・評価

M：高市総理が就任してから、印象は変わりましたか？

山本和江：就任前は経済に強い人というイメージでした。消費税ゼロという公約は「本当にできるの？」と思いながら期待していました。1%案になったのは残念ですが、まあそういうものかなと。

M：受験を抱えているお母さんの立場から見ると、高市総理についてどんなことが気になりますか？

山本和江：教育費の支援が一番気になります。大学の授業料とか、受験費用とか。消費税の話は——下がってくれるのはありがたいですが、うちには教育費の支援の方がもっと切実です。

M：消費税の問題での高市総理の姿勢、どう見えますか？

山本和江：方向性としては良いと思います。1%案になった理由も今日聞いて納得しました。もう少し早く実現してほしいですね。

M：今の高市総理に何か一言メッセージを送るとしたらなんと言いますか？

山本和江：「消費税を下げるのはいいけど、教育費の支援も一緒にやってほしい」ですかね。

M：なぜそう言いたいのですか？

山本和江：消費税が1%下がっても、大学の学費や予備校代の重さは変わらない。うちみたいな家庭には、教育費の支援の方がもっと助かります。

締め

M：ご主人とこういう話をすることはありますか？

山本和江：します。夫は「消費税が下がっても焼け石に水だよな」と言っていました。でも「それでも下がった方がいい」とも言っていて、私と同じ気持ちです。

M：今日の話を通じて、一言でまとめると何でしょう？

山本和江：「焼け石に水かもしれないけど、それでも1%でも早く下げてほしい」ですかね。

M：なぜそう思いますか？

山本和江：レジシステムの話聞いて、ゼロより1%の方が半年早く始まるなら、その方がいい。うちは今が一番お金のかかる時期なので。焼け石に水でも、水はあった方がましです。

M：言い忘れたことや、改めて思ったことがあれば。

山本和江：消費税の話は今日少し整理できました。1%でも早く実現してくれれば助かります。ただ、教育費の問題は消費税だけでは解決しないので、そちらも一緒に考えてほしいというのが正直なところですよ。

M：ありがとうございました。

No.19 「ゼロの方が良かったけどシステムの問題なら仕方ない—— 待つより 1%で早く始まる方が助かる 43 歳」

対象者プロフィール

氏名	菅野 美代
居住地	東京都杉並区
年齢・性別	43 歳・女性
職業	会社員（正職員・出版社）
家族構成	夫（会社員）・子なし
政治関心/知識	中／中

3 ブリーフィング

【1. 導入+Part 1：食料品消費税の議論への賛否と理由】

根拠：「ゼロの方が良かったけど、システムの問題があるなら仕方ない。1%でも下がって早く始まる方が助かる」と述べた。「待つより早い方がいい」と語り、「1%なら半年で始まる、というのはわかりやすい」と評価した。

推論：ゼロへの残念感を持ちながら、システムの問題という説明を「わかりやすい」と素直に受け入れている。子なし共働きで食費への切迫感は薄い、物価上昇の実感から「どこかで節約できれば」という穏やかな動機を持っている。半年早いという実利が、残念感を上回る判断の根拠になっている。

FD：菅野にとって消費税 1%案への賛成は、ゼロへの残念感を持ちながらもシステムの問題という理由を「わかりやすい」と受け入れ、待つより早く始まる方が良いという生活者としての実利判断だ。切迫感より穏やかな歓迎が基調にある。

【2. Part 2：消費税についての認知・考え】

根拠：「月 5～6 万円の食費で、年間 4,000～5,000 円くらいの節約でしょうか」と述べた。「子どもがいないので金額的には大きくはないですが、物価が上がっている中での節約は助かります」と続けた。

推論：消費税への知識は一般的な水準で、節約額を自分で概算しているが専門的な分析はない。子なし共働きで金額的な切実さは薄いと自覚しながら、物価上昇の実感が「毎日の買い物での積み重ねは大きい」という感覚につながっている。

FD：菅野における消費税は「物価上昇の中で少しでも節約できればというゆるやかな歓迎」として語られる。子どもがいないため切迫感は薄く、評価の言葉も穏やかで大げさでない。

【3. Part 3：高市総理への好感度・評価】

根拠：「生活者として歓迎です」と述べた。「消費税が下がれば自分の生活としては助かります。経済全体が少し楽になればいいなとは思いますが」と続けた。

推論：高市総理への評価は食料品消費税の方向性への好意的な受け入れにとどまっており、深い評価や批判はない。職業的な観点より「生活者として」という立場からの評価が基調だ。

FD：菅野の高市評価は「食費が下がる方向は助かる、早く始めてほしい」という生活者としての穏やかな支持だ。政治への強い関心はなく、日常の買い物への影響という生活感覚から評価している。

【全体総括】

根拠：「ゼロの方が良かったけど、システムの問題があるなら仕方ない。1%でも下がって早く始まる方が助かる」と締めた。「毎日の買い物での積み重ねは大きい」という言葉が生活感覚を示している。

推論：菅野を貫く行動原理は「子なし共働きで食費への切迫感は薄い、物価上昇の中で毎日の買い物が重くなっている実感を持っており、ゼロより半年早い1%という実利的な選択を穏やかに支持する」だ。強い賛否より「助かる・仕方ない」という受け入れの姿勢が一貫している。

FD：菅野美代を特徴づけるのは「子なし共働きで食費への切迫感はそれほど大きくないが、物価上昇の中で毎日の買い物が重くなっている実感から消費税削減を穏やかに歓迎し、ゼロへの残念感を持ちながらも半年早い1%を実利として受け入れた43歳」だ。「待つより早い方がいい」という言葉に、大げさでない生活者の本音が出ている。

発言録

導入 + Part 1：食料品消費税の議論への賛否と理由

M：今日はお時間をいただきありがとうございます。正解のない対話ですので、思ったことをそのままお話しいただければ大丈夫です。最近の生活はいかがですか？

菅野美代：出版社で編集の仕事をしています。夫と二人暮らしで、子どもはいないです。杉並区に住んでいます。最近は物価が上がっていて、日常の買い物で前より出費が増えていると感じています。

M：食料品消費税の議論をご存知でしたか？

菅野美代：なんとなく知っています。高市総理が食料品の消費税をゼロにしていると言っていて、最近1%案になってきているという話は聞きました。

M：まずご家族の食費という立場からはいかがですか？

菅野美代：夫婦二人なので食費はそこまで多くないですが、月 5～6 万円くらいかかっています。物価が上がってきているので、同じものを買っても前より高くなっているのを感じます。少しでも下がれば助かります。

M：食料品消費税を 1%にするという案が出ていますが、どう思いますか？

菅野美代：良いと思います。ゼロの方が当然いいですが、1%でも今の 8%からかなり下がるので助かります。

M：なぜそう思いますか？

菅野美代：月 5～6 万円の食費で消費税が下がれば、少し余裕ができます。子どもはいないので切迫感はそこまでないですが、物価が上がっている中でどこかで節約できれば助かります。

M：ゼロにするという公約があったのですが、覚えていますか？

菅野美代：ぼんやり覚えています。ゼロになるなら嬉しいなと思っていました。

M：驚きましたか、1%になったと聞いて？

菅野美代：少し残念ですね。ゼロの方が良かったので。でも何か理由があるんだろうなとは思っていました。

M：1%になったとしたら評価しますか？

菅野美代：評価します。8%から 1%は大きな変化だと思います。

M：0 にできない理由について知りたいですか？

菅野美代：知りたいです。なぜ 1%になったのか気になっていました。

M：実は、スーパーなどのレジシステムを税率ゼロに対応させるための改修に約 1 年かかるためです。0%だと 1 年、1%なら半年で実現できるそうです。それを聞いてどう思いますか？

菅野美代：へえ、そういう理由だったんですね。確かに全国のスーパーのレジを一斉に変えるのは大変そうです。ゼロにするには特別な対応が必要で時間がかかる、1%なら半年で始まる、というのはわかりやすいですね。それなら 1%で半年早い方が助かります。待つより早い方がいい。

M：半年早いなら、1%になる方がいいということですか？

菅野美代：そうですね。半年早く始まるなら 1%の方が良いです。

M：まだ決まったわけではありません。今も検討中のようです。それを聞いてどう思いますか？

菅野美代：早く決まってほしいです。いつから変わるかはっきりしてほしいですね。

Part 2：消費税についての認知・考え（自由発話）

M：消費税についてはどのような知識や情報をお持ちですか。また、どのように考えていますか？

菅野美代：食料品が 8%で他が 10%というのは知っています。レシートを見れば書いてあるので。なんとなく仕組みはわかりますが、詳しいわけではないです。

M：まずご家族の食費という立場からはいかがですか？

菅野美代：月 5～6 万円の食費で消費税が 1%になれば、年間で 4,000～5,000 円くらいの節約でしょうか。子どもがいないので金額的には大きくはないですが、物価が上がっている中での節約は助かります。

M：その情報はどこから？

菅野美代：ニュースや夫との会話ですね。夫も「消費税が下がれば助かる」と言っています。

M：何か実感として感じているものはありますか？

菅野美代：物価が上がっているのは実感しています。スーパーで同じものが前より高くなっているのがわかります。食費全体が少し重くなっている感じがします。

M：それについてはどう思いますか？

菅野美代：消費税が少しでも下がれば助かります。物価上昇が続いているので、どこかで節約できるのはありがたいです。

Part 3：高市総理への好感度・評価

M：高市総理が就任してから、印象は変わりましたか？

菅野美代：就任前は正直あまり詳しくなかったですが、食料品消費税の話は生活者として歓迎です。今日の話でシステムの問題だとわかって、1%案の理由が理解できました。

M：出版社にお勤めの立場から見ると、高市総理についてどんなことが気になりますか？

菅野美代：仕事との直接の関係はあまりないですが、消費税が下がれば自分の生活としては助かります。出版業界も物価上昇の影響を受けているので、経済全体が少し楽になればいいなとは思っています。

M：消費税の問題での高市総理の姿勢、どう見えますか？

菅野美代：ゼロという公約から 1%案になった流れは、今日の話でシステムの問題だとわかって納得しました。方向性は良いと思います。

M：今の高市総理に何か一言メッセージを送るとしたらなんと伝えますか？

菅野美代：「食費が少しでも下がると日常の買い物が楽になります。1%案で早く始めてほしいです」ですかね。

M：なぜそう言いたいのですか？

菅野美代：物価が上がっている中で消費税が下がれば、日常の食費が少し楽になります。子どもはいないので金額的には小さいですが、毎日の買い物での積み重ねは大きいです。

締め

M：ご主人とこういう話をすることはありますか？

菅野美代：します。夫も「食費が下がれば助かるね」と言っていました。二人で話すことはありますが、あまり深く考えてはいないです。

M：今日の話を通じて、一言でまとめると何でしょう？

菅野美代：「ゼロの方が良かったけど、システムの問題があるなら仕方ない。1%でも下がって早く始まる方が助かる」ですかね。

M：なぜそう思いますか？

菅野美代：ゼロの方が良かったのは正直なところですが、理由がわかれば納得できます。半年早く始まるなら、ゼロより1%の方が実際の生活では良い選択ですね。

M：言い忘れたことや、改めて思ったことがあれば。

菅野美代：今日の話でなぜ1%なのかわかって良かったです。早く確定してほしいです。

M：ありがとうございました。

No.20 「1%にするなら財源の手当てをちゃんと説明してください」——生活への影響がほぼゼロでも財政の行方が気になる外資系金融 30 歳

対象者プロフィール

氏名	畠山 彩
居住地	東京都中央区
年齢・性別	30 歳・女性
職業	外資系金融会社員
家族構成	夫（外資系会社員）・子なし
政治関心/知識	低／中

3 分ブリーフィング

【1. 導入+Part 1：食料品消費税の議論への賛否と理由】

根拠：「自分の生活には影響がほぼないので、政策としてどうかという目で見ている」と述べた。1%案に「政策としては現実的な妥協点だと思う」と答えた。レジシステムの理由に「財政の問題ではなくインフラの問題ということなら、1%になった理由として合理的だと思う」と応じた。

推論：消費税への評価が生活者の視点ではなく政策の妥当性という視点からなされている。外食・デリバリー中心の生活で食費への消費税が実質的に存在しないため、評価軸が「自分への恩恵」ではなく「財政政策の合理性」に向いている。レジシステムの説明も即座に「合理的」と受け入れており、論理による納得を重視している。

FD：畠山にとって消費税 1%案への態度は「財政的に現実的な妥協点」という政策評価だ。生活への影響がほぼゼロである一方、金融の仕事を通じて財政と税収の関係を理解しており、評価の軸が完全に政策の合理性に向いている。「困っている方には早い方がいい」という言葉は、他者への配慮として語られており、自分ごとの切実さとは異質だ。

【2. Part 2：消費税についての認知・考え】

根拠：「消費税が 1%下がっても、うちの生活への影響はほぼゼロだと思う」と述べた。「単純に下げれば良いとは言えない、財政とのバランス次第だと思っている」と語った。

推論：消費税への知識は一般より高く、財源と社会保障の関係を理解している。外食・デリバリー中心の生活で食材消費税が実質的に関係ないため、家計への影響という発想がない。政策の合理性という軸だけで消費税を評価しており、生活者としての当事者感がない。

FD：畠山における消費税は「財政政策として見るべき問題」だ。生活者としての当事者感はなく、消費税の増減を財政規律との関係で評価している。この立場の根拠は高収入・子なし・外食中心という生活様式にある。

【3. Part 3：高市総理への好感度・評価】

根拠：「財源の手当てについての説明が不足している気がする」と述べた。メッセージは「1%にするなら、財源の手当てをちゃんと説明してください」と答えた。

推論：高市への評価は「財源の説明責任」という一点に集約されている。消費税 1%案自体は「現実的」と認めつつも、それに伴う財政への影響の説明を求めている。レジシステムの理由には即座に納得しており、論理的な説明があれば受け入れる姿勢がある。

FD：畠山の高市評価は「方向性は理解するが財源の説明が不十分」という条件付きの評価だ。金融の専門家として財政の持続可能性への目線が政策評価の基準になっており、「説明のある政策なら納得できる」という合理主義が一貫している。

【全体総括】

根拠：「うちの生活への影響はほぼゼロ」と述べた。「1%にするなら、財源の手当てをちゃんと説明してください」と締めた。

推論：畠山を貫く行動原理は「消費税を生活者としてではなく、財政政策として評価する」だ。高収入・子なし・外食中心という生活が消費税議論への当事者感を消し、代わりに金融の専門家的な目線が残っている。レジシステムの説明に即座に「合理的」と反応した場面が、論理で動く評価構造を示している。

FD：畠山彩を特徴づけるのは「食費への消費税が実質的に存在しない生活の中で、1%案を財政政策として評価し、財源の説明を求める外資系金融 30 歳」だ。「生活への影響はほぼゼロ」という言葉と「財源の手当てをちゃんと説明してほしい」という言葉が、この人物の消費税議論への立ち位置を示している。

発言録

導入 + Part 1：食料品消費税の議論への賛否と理由

M：今日はお時間をいただきありがとうございます。正解のない対話ですので、思ったことをそのままお話いただければ大丈夫です。最近の生活はいかがですか？

畠山彩：仕事が忙しい毎日です。夫も同じ外資系で、二人とも帰りが遅いので、食事はデリバリーか外食が多いです。スーパーで食材を買って料理することはほとんどないですね。

M：食料品消費税の議論をご存知でしたか？

畠山彩：知っています。高市総理が食料品の消費税をゼロにするという公約を出していたのは知っています。

M：知っていることを教えてください。

畠山彩：消費税ゼロの公約があつて、それが最近 1%案になってきているということは聞いています。金融の仕事をしているので、財政への影響という観点で気になっていました。

M：その話を聞いた時、どんな気持ちでしたか？

畠山彩：正直、自分の生活には影響がほぼないので、政策としてどうかという目で見えていました。ゼロは財政的に無理があるだろうと思っていたので。

M：なぜそう思いましたか？

畠山彩：消費税は社会保障の財源なので、ゼロにするのはリスクが高いとっていて。1%案の方が現実的かなと。

M：食料品消費税を 1%にするという案が出ていますが、どう思いますか？

畠山彩：政策としては現実的な妥協点だと思います。うちは食費への消費税の影響がほとんどないので、生活者としての実感はないですが。

M：なぜそう思いますか？

畠山彩：デリバリーや外食が多いので、スーパーの食材の消費税がゼロになっても、あまり関係ない生活をしています。

M：ゼロにするという公約があつたのですが、覚えていますか？

畠山彩：覚えています。

M：驚きましたか、1%になったと聞いて？

畠山彩：驚かないです。最初からゼロは難しいだろうと思っていたので。

M：1%になったとしたら評価しますか？

畠山彩：方向性としては良いと思いますが、財政への影響がどう手当てされるかの方が気になります。

M：0 にできない理由について知りたいですか？

畠山彩：知りたいです。

M：なぜ 1%という議論が出ているか、ご存知ですか？

畠山彩：知らないです。

M：実は、スーパーなどのレジシステムを税率ゼロに対応させるための改修に約1年かかるためです。0%だと1年、1%なら半年で実現できるそうです。それを聞いてどう思いますか？

畠山彩：ああ、そういうシステム的な理由なんですね。財政の問題ではなくインフラの問題ということでしたら、1%になった理由として合理的だと思います。

M：半年早いなら、1%になる方がいいということですか？

畠山彩：そうですね。困っている方には早い方がいい。

M：まだ決まったわけではありません。今も検討中のようです。それを聞いてどう思いますか？

畠山彩：早く決めてほしいですね。不確実性は良くないので。

Part 2：消費税についての認知・考え（自由発話）

M：消費税についてはどのような知識や情報をお持ちですか。また、どのように考えていますか？

畠山彩：食料品が8%で、それ以外は10%というのは知っています。消費税が社会保障の財源になっているということも。金融の仕事をしているので、税収と財政の関係は気になる場所です。

M：まずご家族の食費・生活費という立場から、どう感じますか？

畠山彩：正直なところ、二人で食費を気にして節約するような生活はしていません。外食やデリバリーが多いので、スーパーでの食材の消費税は意識することがないですね。消費税が1%下がっても、うちの生活への影響はほぼゼロだと思います。

M：その情報はどこから？

畠山彩：ニュースや職場での会話から。金融関係の仕事をしているので、財政や税制の話題は自然と入ってきます。

M：何か実感として感じているものはありますか？

畠山彩：物価上昇は感じています。外食の値段も上がっていますし。でも消費税が原因なのか物価全般の問題なのか、区別はつけていないですね。

M：それについてはどう思いますか？

畠山彩：消費税を下げるのが経済対策として有効かどうかは、財政とのバランス次第だと思います。単純に「下げれば良い」とは言えないかなと。

Part 3：高市総理への好感度・評価

M：高市総理が就任してから、印象は変わりましたか？

畠山彩：就任前は経済に強いイメージがありました。消費税ゼロの公約は「大きく出たな」と思っていたのですが、1%に落ち着くのは想定内でした。

M：外資系金融で働かれているお立場から見ると、高市総理についてどんなことが気になりますか？

畠山彩：財政規律をどう維持するかが一番気になります。消費税を下げながら社会保障をどう維持するか、財源の手当てについての説明が不足している気がします。

M：消費税の問題での高市総理の姿勢、どう見えますか？

畠山彩：方向性は分かりますが、財政の裏付けが見えにくい。今日レジシステムの理由は聞いて納得しましたが、財源については別途説明があってほしいです。

M：今の高市総理に何か一言メッセージを送るとしたらなんと言いますか？

畠山彩：「1%にするなら、財源の手当てをちゃんと説明してください」ですかね。

M：なぜそう言いたいのですか？

畠山彩：消費税は社会保障の大切な財源です。下げることで短期的に喜ばれても、中長期的な財政への影響がきちんと手当てされているか、説明がないと信頼できません。

締め

M：ご主人とこういう話をすることはありますか？

畠山彩：たまにします。夫も「1%案の方が現実的だね」と言っていました。二人とも金融関係なので、財政の話になりがちです。

M：今日の話を通じて、一言でまとめると何でしょう？

畠山彩：「1%案は現実的だと思うが、財源の説明がほしい」ですかね。

M：なぜそう思いますか？

畠山彩：レジシステムの話は今日初めて聞いてなるほどと思いました。うちの生活への影響はほぼないですが、政策として正しいかどうかは、財源とセットで見たいという気持ちがあります。

M：言い忘れたことや、改めて思ったことがあれば。

畠山彩：消費税 1%案自体は現実的な政策だと思います。ただ、困っているご家庭には早く届いてほしいとも思うので、検討が長引かないでほしいですね。

M：ありがとうございました。